公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第572集

前六供遺跡

単独道路改築事業(一)大原境三ツ木線
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

前六供遺跡

単独道路改築事業(一)大原境三ツ木線
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一三

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

前六供遺跡

単独道路改築事業(一)大原境三ツ木線
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県道315号大原三ツ木線は、太田市大原と伊勢崎市境三ツ木（三ツ木橋東交差点）を結ぶ一般県道で、起点から北関東自動車道の太田藪塚インターチェンジまでが再整備され、高速道へのアクセス道となっております。県道整備事業の一環として、伊勢崎新田上江田線と交差する、いずみ団地入口交差点より西側の拡幅工事が行われることとなり、本報告の前六供遺跡は、この道路改築工事計画に伴い平成24年４月に発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡や隣接する通称田中館と呼ばれる中世館跡の一部などが検出されました。今回の発掘調査で発見された遺物・遺構は、地域の歴史解明の貴重な資料となるものと思われます。今後、ご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、報告書の刊行に至るまで、県土整備部道路整備課、太田土木事務所、群馬県教育委員会、太田市教育委員会、太田市立綿打中学校、並びに地元関係者の皆様には、多大なご協力を賜りました。本報告書の刊行に際し、関係者の皆様に心から感謝を申し上げ、序といたします。

平成25年６月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　須　田　榮　一

例　言

1　本書は、平成24年度単独公共単独道路改築事業(一)大原境三ツ木線に伴い発掘調査された前六供遺跡〔まえろっくいせき〕の発掘調査報告書である。

2　前六供遺跡は、群馬県太田市新田上田中町181-２番地他に所在する。

3　事業主体　　群馬県太田土木事務所

4　調査主体　　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5　調査期間　　平成24年４月１日～平成24年４月30日

6　調査面積　　540.0㎡

7　発掘調査体制および委託は次の通りである。

発掘調査担当　齊藤利昭〔上席専門員〕

遺跡掘削工事請負　　有限会社 高澤考古学研究所

地上測量委託　　株式会社 シン技術コンサル

8　整理期間　　平成25年４月1日～平成25年５月31日

9　履行期間　　平成25年４月1日～平成25年７月31日

10　本書作成の担当者は次の通りである。

編　集　　新倉明彦〔上席専門員〕　　デジタル編集　齊田智彦〔主任調査研究員〕

保存処理　関　邦一〔補佐(総括)〕　　遺物写真撮影　佐藤元彦〔補佐(総括)〕

執　筆　　第４章　石器・石製品観察表　岩崎泰一〔上席専門員〕

古墳～奈良平安時代遺物観察表　徳江秀夫〔上席専門員〕、陶磁器等観察表　大西雅広〔上席専門員〕

金属器・木製品観察表　関　邦一〔補佐(総括)〕、上記以外　新倉明彦

11　出土石器・石製品の石材同定については飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)にお願いした。

12　発掘調査及び報告書作成には、太田土木事務所、群馬県教育委員会、太田市教育委員会をはじめ、関係機関ならびに関係各位に多くのご協力・ご指導を頂いた。太田市立新田荘歴史資料館　小宮俊久氏には前六供遺跡をはじめ周辺諸遺跡の調査状況についてのご教示を頂いた。

13　発掘調査資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

14　同一遺跡の発掘調査報告書として、既に下記の２冊が新田町教育委員会より刊行されている。

○新田町文化財調査報告書第25集　(平成12年３月24日刊行)

「前六供遺跡・後谷遺跡・西田遺跡」－県道伊勢崎新田線道路整備事業に伴う発掘調査－

調査＝平成10(1998)年10月20日～平成11(1999)年12月25日

(平成10年10月～ 12月、平成11年６月～７月、平成11年12月)

調査面積＝1,200㎡　　調査機関＝新田町(現太田市)教育委員会　　調査担当＝小宮俊久

○新田町文化財調査報告書第33集(平成12年３月24日刊行)

「前六供遺跡Ⅱ」(前六供遺跡２次調査)－県道伊勢崎新田線道路整備事業に伴う発掘調査－

調査＝平成14(2002)年２月８日～平成14(2002)年12月20日

調査面積＝1,000㎡　　調査機関＝新田町(現太田市)教育委員会　　調査担当＝小宮俊久

凡　例

1　本文挿図の遺構実測図中にある＋印は、世界測地系座標の位置を示し、その名称には座標値のＸ値・Ｙ値の下３桁を記した。また、図中の方位記号は、同座標第Ⅸ系の北位を示す。遺構実測図中の●印は出土遺物を示す。

2　遺構名称については、発掘調査時の資料との整合性を保つため、原則として調査時に付した名称・番号を踏襲し、変更したものは(　)内に旧称を記した。

3　遺構の主軸方位は、座標北を基準として、カマドを有する住居はカマドがある壁を軸上にその傾きを、それ以外の遺構は長軸の傾きをそれぞれ計測した。

4　遺構計測値で、全容が計測できない遺構については、(　)で検出部の値を記した。

5　挿図の縮尺については、原則として以下のとおり掲載した。

〔遺構図〕　住居・溝＝１：60、カマド・土坑・ピット・井戸＝１：30

〔遺物図〕　土器1：３、石器１：１・１：２・１：３・１：４・１：６

6　遺物観察表や土層注記文中の色調は、農林水産省技術会議監修、(財)日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』1996年版の色名を使用した。

7　挿図中で使用したトーンは、次のとおりである。

〔遺構図〕

攪乱　　焼土　　炭

8　遺物観察表での表現は、以下のとおりである。

・遺物番号は、観察表・実測図・遺物写真共に一致する。

・土器・土製品胎土の細砂粒と粗砂粒とは、直径２㎜を境に区別した。

・成・整形の特徴の項目にあるハケ目の本数は、１㎝あたりの本数を示す。

・土器計測位置の表現は、口径＝口、底径＝底、器高＝高と略記した。

・遺物の計測値で、欠損品の場合は、(　)で残存部の値を記した。

9　本書で使用した地形図・地勢図は、以下のとおりである。

国土地理院地勢図　1:200,000「深谷」　平成18年４月１日発行

国土地理院地形図　1:25,000「伊勢崎」　平成15年２月１日発行

国土地理院地形図　1:25,000「上野境」　平成14年12月１日発行

太田市　　現況図　1:2,500　No.51　　平成22年10月測量(太田市転載許可済)

目　次

第１章　調査に至る経過
　第１節　調査に至る経過 ･･･ 1

第２章　遺跡の立地と環境
　第１節　地理的環境 ･･･ 3
　第２節　歴史的環境 ･･･ 3

第３章　調査の方法と経過
　第１節　調査の方法と経過 ･･ 7
　第２節　基本土層 ･･ 8
第４章　検出遺構と出土遺物
　第１節　竪穴住居 ･･ 9
　第２節　井戸･･ 24
　第３節　土坑・墓坑 ･･ 29
　第４節　ピット列・ピット ･･ 37
　第５節　溝 ･･ 39
　第６節　遺構外出土遺物 ･･ 44

遺跡全体図(折込図) ･･ 45

第５章　調査の成果 ･･ 47

報告書抄録

写真図版
　検出遺構写真･･ PL. 1
　出土遺物写真･･ PL.19

奥付

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 2
第３図　大間々扇状地と遺跡位置図 …… 3
第４図　周辺遺跡位置図(１) …… 5
第５図　周辺遺跡位置図(２) …… 6
第６図　基本土層図 …… 8
第７図　１号住居遺構図(１) …… 9
第８図　１号住居遺構図(２)・遺物図 …… 10
第９図　２号住居遺物図 …… 11
第10図　２号住居遺構図 …… 12
第11図　３号住居遺構図(１) …… 13
第12図　３号住居遺構図(２)・遺物図 …… 14
第13図　４号住居遺構図・遺物図 …… 15
第14図　５号住居遺構図(１) …… 16
第15図　５号住居遺構図(２)・遺物図(１) …… 17
第16図　５号住居遺物図(２) …… 18
第17図　６号住居遺構図 …… 19
第18図　６号住居遺物図 …… 20
第19図　７号住居遺構図・遺物図 …… 21
第20図　８号住居遺構図・遺物図 …… 22
第21図　９号住居遺構図・遺物図 …… 23
第22図　１号井戸遺構図 …… 24
第23図　２号井戸遺構図・遺物図 …… 25
第24図　３号井戸遺構図・遺物図 …… 26
第25図　４号井戸遺構図・遺物図 …… 27
第26図　５号井戸遺構図・遺物図 …… 28
第27図　１・２・３・４・５号土坑遺構図 …… 29
第28図　６・７・８・９・10号土坑遺構図 …… 30
第29図　11・12・13・14・15号土坑遺構図 …… 31
第30図　16・17・18・19・22号土坑遺構図 …… 32
第31図　20・21・23・24・25・27号土坑遺構図 …… 33
第32図　26・28・29・30・31号土坑遺構図 …… 34
第33図　３・５・30号土坑遺物図 …… 35
第34図　１号墓坑遺構図・遺物図(１) …… 36
第35図　１号墓坑遺物図(２) …… 37
第36図　１・２号ピット列遺構図 …… 38
第37図　１・２・３号ピット遺構図 …… 38
第38図　１号溝遺構図 …… 39
第39図　２・３・４・５・６号溝遺構図 …… 40
第40図　１号溝遺物図(１) …… 41
第41図　１号溝遺物図(２)・３号溝遺物図 …… 42
第42図　遺構外遺物図 …… 44
第43図　前六供遺跡全体図 …… 45
第44図　上田中・長慶寺周辺城館跡と前六供遺跡 …… 49

表 目 次

第１表　前六供遺跡調査一覧 …… 6
第２表　１号住居遺物観察表 …… 11
第３表　２号住居遺物観察表 …… 13
第４表　３号住居遺物観察表 …… 14
第５表　４号住居遺物観察表 …… 16
第６表　５号住居遺物観察表 …… 18
第７表　６号住居遺物観察表 …… 20
第８表　７号住居遺物観察表 …… 21
第９表　８号住居遺物観察表 …… 22
第10表　９号住居遺物観察表 …… 23
第11表　住居一覧表 …… 23
第12表　２号井戸遺物観察表 …… 25
第13表　３号井戸遺物観察表 …… 27
第14表　４号井戸遺物観察表 …… 28
第15表　５号井戸遺物観察表 …… 28
第16表　井戸一覧表 …… 29
第17表　３・５・30号土坑遺物観察表 …… 35
第18表　土坑一覧表 …… 35
第19表　墓坑一覧表 …… 36
第20表　１号墓坑遺物観察表 …… 37
第21表　ピット列一覧表 …… 38
第22表　ピット一覧表 …… 39
第23表　１・３号溝遺物観察表 …… 42
第24表　溝一覧表 …… 43
第25表　遺構外遺物観察表 …… 44

写 真 図 版 目 次

PL.１　調査区全景　北から
PL.２　調査区遠景　北から
調査区遠景　南から
PL.３　１～５号住居遠景　北西から
遺跡より長慶寺・江田館を望む　西から
PL.４　１号住居全景　南から
１号住居遺物出土状態　南西から
１号住居遺物出土状態　南西から
１号住居カマド掘り方全景　西から
１号住居貯蔵穴全景　南西から
PL.５　２号住居全景　南から
２号住居遺物出土状態　南から
２号住居遺物出土状態　北西から
２号住居遺物出土状態　西から
２号住居掘り方全景　南西から
PL.６　３号住居全景　南から
３号住居埋土断面　東から
３号住居遺物出土状態　西から
３号住居遺物出土状態　南から
３号住居カマド検出状態　西から
PL.７　４号住居全景　南西から
４号住居遺物出土状態　南から
４号住居遺物出土状態　南西から
４号住居遺物出土状態　北東から
４号住居遺物出土状態　南西から
PL.８　５号住居全景　南西から
５号住居遺物出土状態　西から
５号住居遺物出土状態　西から
５号住居遺物出土状態　北西から
５号住居遺物出土状態　北西から
PL.９　５号住居掘り方全景　南西から
５号住居床下土坑　東から
５号住居床下土坑上層遺物出土状態　南から
５号住居床下土坑中層遺物出土状態　東から
５号住居床下土坑下層遺物出土状態　東から
PL.10　６号住居全景　東から
６号住居埋土断面　東から
６号住居埋土断面　東から
６号住居遺物出土状態　東から
６号住居遺物出土状態　東から
PL.11　７号住居全景　南西から
８号住居全景　南西から
PL.12　９号住居全景　南から
９号住居埋土断面　南から
９号住居埋土断面　西から
９号住居遺物出土状態　西から
９号住居炭化物出土状態　西から
PL.13　１号井戸全景　東から
１号井戸埋土断面　東から
２号井戸遺物出土状態　東から
２号井戸埋土断面　東から
３号井戸全景　西から
３号井戸遺物出土状態　西から
４号井戸全景　西から
５号井戸全景　西から
PL.14　１号土坑全景　西から
２・３号土坑全景　西から
４・５号土坑全景　南から
６・７・８号土坑全景　南から
９号土坑全景　南西から
10号土坑全景　南から
11号土坑全景　西から
12・13号土坑全景　東から
PL.15　14・15号土坑全景　南西から
16・17・18号土坑全景　西から
19号土坑全景　南西から
20・21号土坑全景　北西から
22号土坑全景　西から
23号土坑全景　北から
24・25・26・27号土坑全景　北西から
28・29号土坑全景　北西から
PL.16　30号土坑全景　北西から
31号土坑全景　南西から
１号墓坑全景　西から
１号墓坑遺物出土状態　南東から
１号ピット列全景　北から
２号ピット列全景　北から
１・２号ピット全景　西から
３号ピット全景　南から
PL.17　１号溝全景　北から
１号溝遺物出土状態　北西から
２号溝全景　西から
３号溝全景　西から
３号溝遺物出土状態　西から
４号溝全景　西から
５号溝全景　西から
６号溝全景　北から
PL.18　田中山長慶寺
境内石造物群
宝篋印塔
宝篋印塔
境内北土塁跡
境内北土塁跡
PL.19　１・４・５号住居出土遺物
PL.20　５・６・９号住居、２号井戸出土遺物
PL.21　３・４・５号井戸、５号土坑、１号墓坑出土遺物
PL.22　１・３号溝、遺構外出土遺物

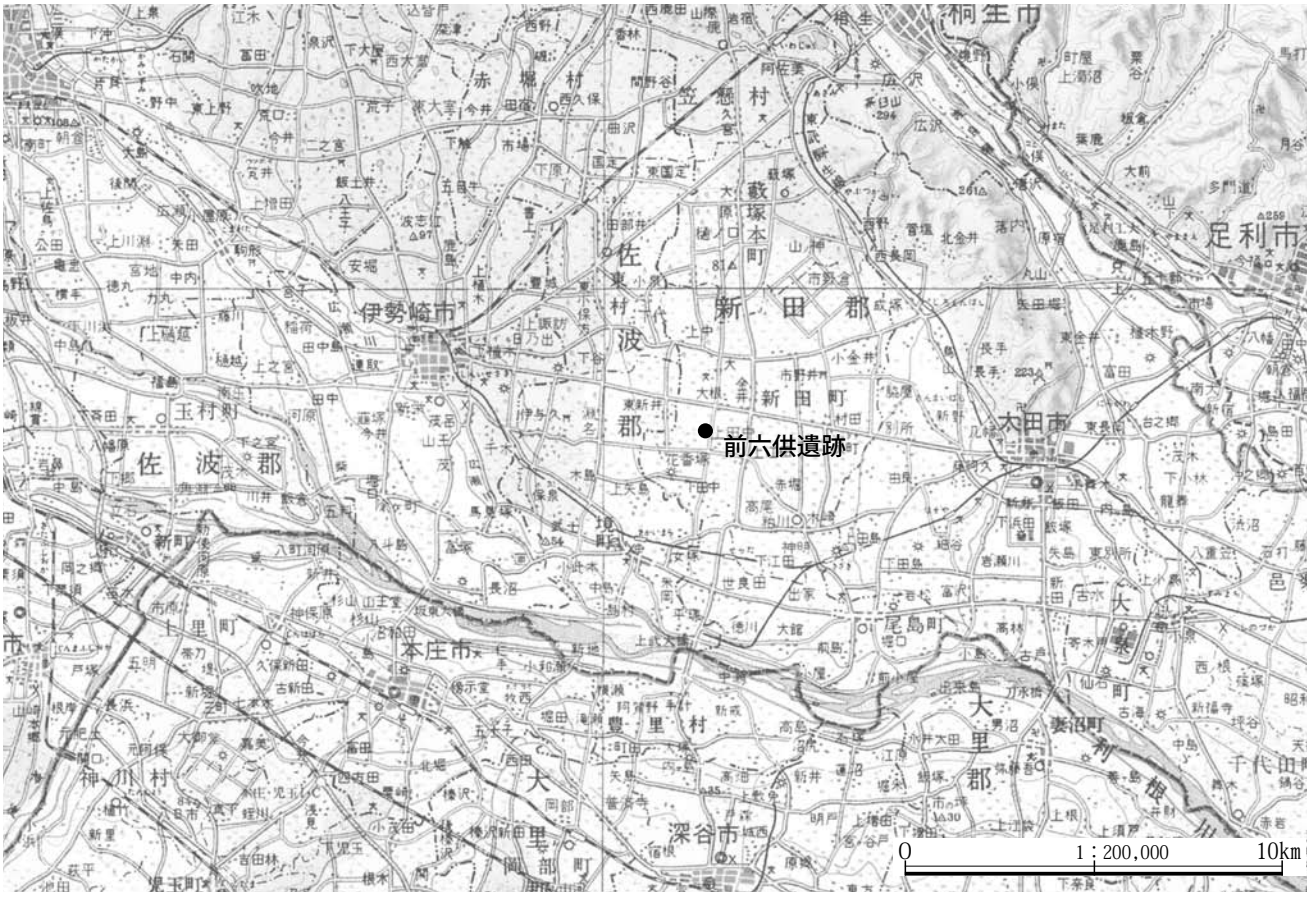
第１章　調査に至る経過

第１節　調査に至る経過

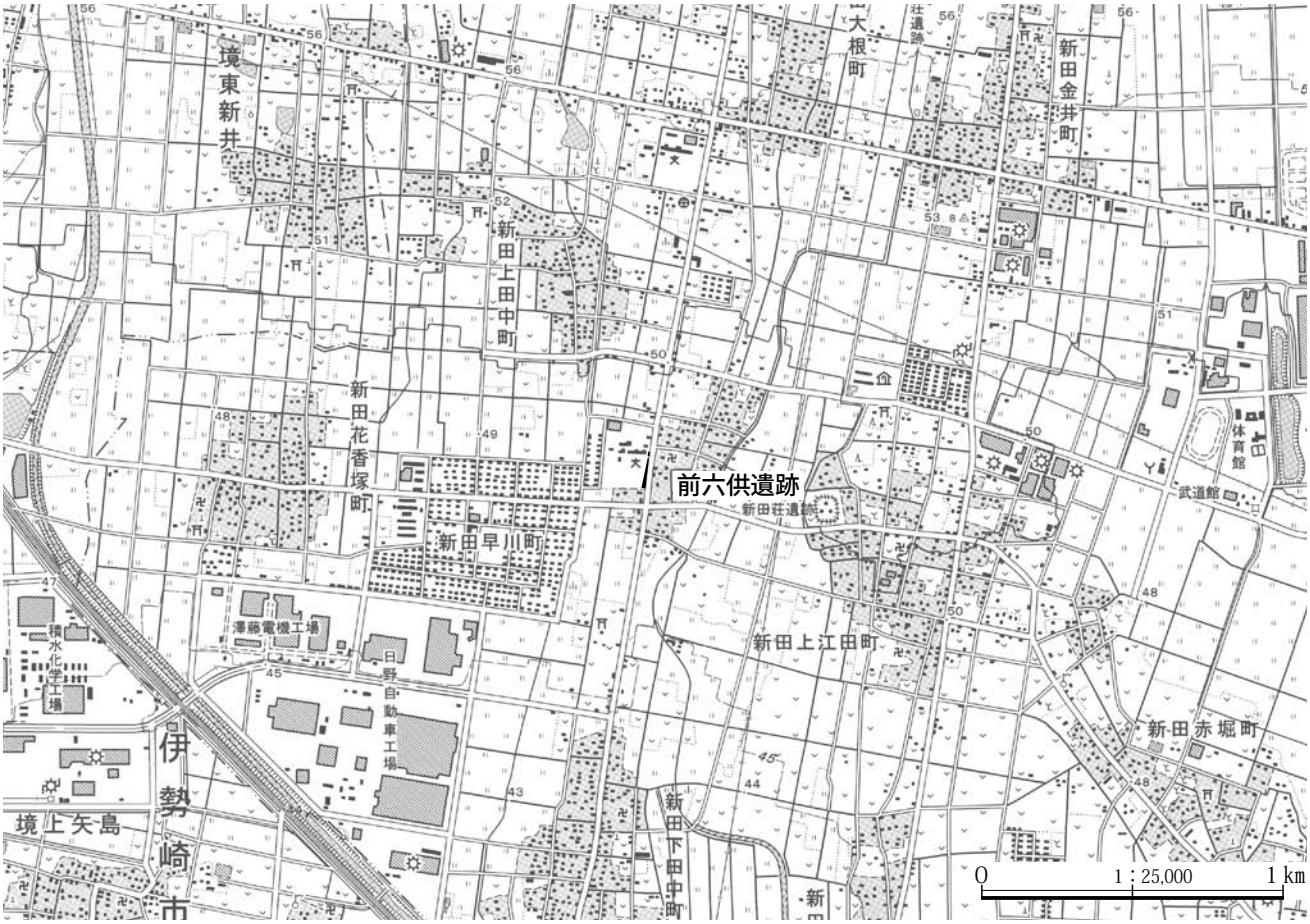
群馬県道315号大原境三ツ木線は、群馬県太田市大原町から伊勢崎市境三ツ木(三ツ木橋東交差点)に至る一般県道で、同県道69号大間々世良田線の西側に並行する形で南北に走り、起点から北関東自動車道の太田藪塚インターチェンジまでは片側２車線に再整備され、高速道へのアクセス道となっている。

この幹線道整備の一環として、太田土木事務所より、群馬県教育委員会文化財保護課に対し、県道315号大原境三ツ木線の改築工事計画が示された。対象となる地点は、県道292号伊勢崎新田上江田線と交差するいずみ団地入口交差点より北側の太田市立綿打中学校に面する道路西側拡幅部分の120mである。既に県道292号の道路整備に伴い、新田町(現太田市)教育委員会により、平成10・11年、及び平成14年に前六供遺跡として発掘調査が行われており、近接の当該部分についても遺跡の存在が想定されたため、県文化財保護課が平成23年11月並びに平成24年２月に試掘調査を実施した。その結果、当該地点において遺構の存在が確認されたことから、埋蔵文化財に対する保護の措置が必要である旨を太田土木事務所に通知すると共に、取扱いについての協議を行った。協議の結果、工事計画の変更は困難との判断から、記録保存のための緊急発掘調査の実施が決定された。

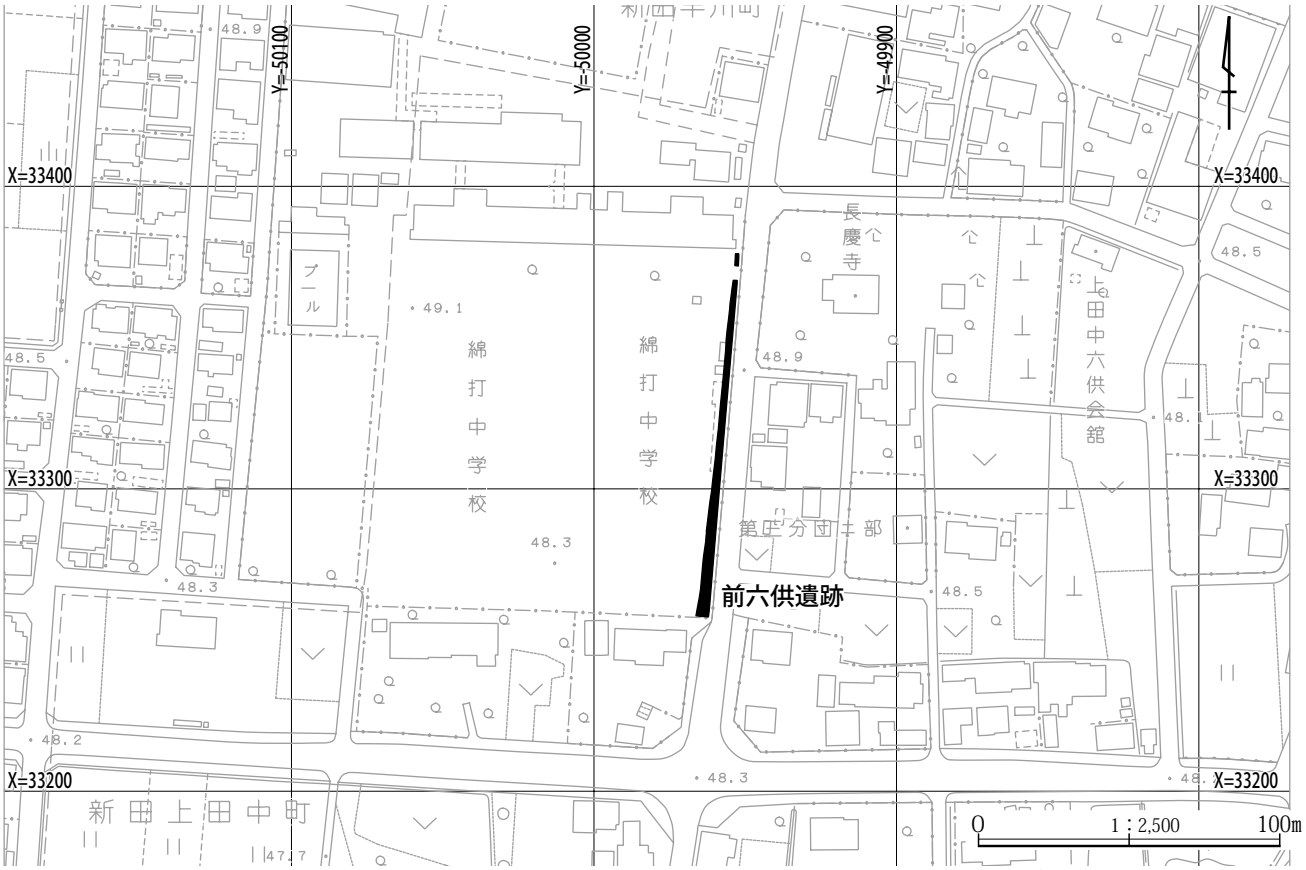
発掘調査は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することとなり、平成24年４月１日付けで太田土木事務所との間で受託契約が締結された。調査工程は、平成24年４月から一ヶ月間発掘調査を実施することとなった。なお、調査区南端部については、農業用井戸送水施設の付け替え工事が急がれている関係で、先行して４月10日までに調査を終える必要が生じた。



第１図　遺跡位置図　(国土地理院地勢図　1:200,000「深谷」　平成18年４月１日発行)



国土地理院地形図　1:25,000「上野境」　平成14年12月１日発行



太田市　現況図　1:2,500　No.51　平成22年10月測量(太田市転載許可済)

第２図　遺跡位置図

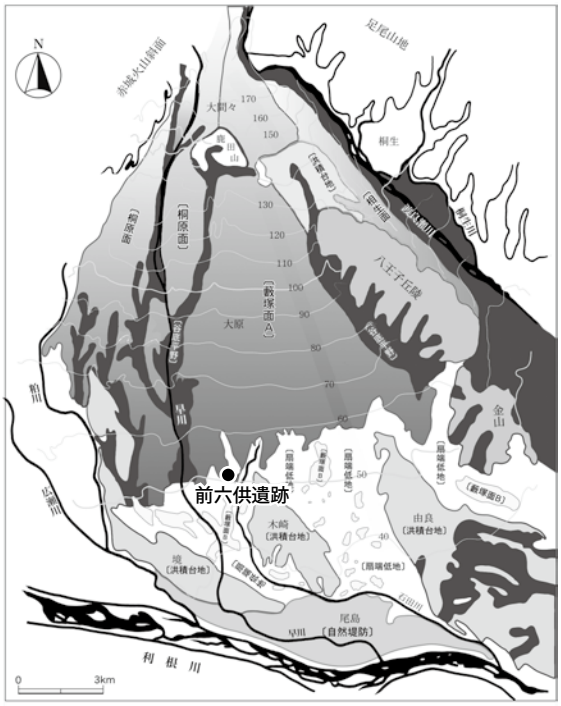
第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

〔地形〕　遺跡は、関東平野の北西にあたる群馬県南東部の平野部に位置し、周囲の現況は北から南に緩やかに傾斜する平坦な地形を呈する。

遺跡地は、旧渡良瀬川によって形成された大間々扇状地端部の南に位置する。大間々扇状地は、渡良瀬川が足尾山地を流れ出る谷口(標高200m)を扇頂とし、西は赤城山南東斜面、東は八王子丘陵(標高294m)・金山丘陵(標高236m)を限りとする東西約14km、南北約18kmに及ぶ関東地方で三番目に大きな扇状地である。大量の砂礫を堆積させた渡良瀬川は、約24,000年程前に流路を東に変えたため、扇央部には河川が無く乾燥した土地となった。一方、扇端より南は、基盤層である厚い砂礫層を流れる地下水や扇状地上に降り浸透した雨水が標高50m程の所で湧水として湧出し、これを源とする小河川も生まれ豊かな沖積地となる。

本遺跡周辺には、寺井・小金井・上野井・市野井・金井など「井」の付く地名が連なり、1968年の調査当時は大小合わせて56の湧水点の分布が確認されている。



第３図　大間々扇状地と遺跡位置図

第２節　歴史的環境

〔旧石器時代〕　旧石器時代の石器出土事例として、木崎台地の西辺部に存在が確認されており、花園遺跡(25)ではAT(姶良丹沢火山灰)下からナイフ形石器が出土し、As-BP(浅間-板鼻褐色軽石群)下で礫群が検出されている。

〔縄文時代〕　木崎台地の西辺および東辺部に存在が確認されているが、縄文時代の遺構検出例は少なく、僅かに中江田Ａ遺跡(16)で草創期から早期の土器と後期の竪穴住居・土坑が、台遺跡(18)や大根一丁田遺跡で中期の住居跡が、北宿(４)・観音前遺跡(40)では後期の柄鏡形住居の検出などが報告されている。

〔弥生時代〕　当該地域は弥生時代の遺跡数が希少であるが、その中において台遺跡で後期の住居跡が検出されたほか、後期の土器片の出土例のみが数例ある。

〔古墳時代〕　『上毛古墳綜覧』によると、旧新田町所在の古墳として昭和10年の分布調査時には、前方後円墳５基・円墳33基・不詳８基の計46基が記録されている。この内、遺跡周辺地域の綿打村地区には、前方後円墳２基・円墳23基が存在したとされる。代表的な古墳としては、上田中にある鈴鏡や馬具が出土した兵庫塚古墳を中心とした古墳群が挙げられる。総体的に見ると旧新田町の古墳分布は、５世紀代に赤堀地区に出現し、上田中・六供綿打中学校周辺へと広がり、６世紀後半以降は各地域に群集墳が造られ、７世紀末に終焉を迎えるようである。

一方、集落跡の分布をみると、古墳時代の初頭には木崎台地や低地周辺の微高地上に点在し、その後、水田開発に伴う居住範囲の拡大は飛躍的に増大し、大規模集落を形成するようになる。

本遺跡で検出された遺構も、この時期より造営された集落の一端と考えられる。

〔奈良・平安時代〕　律令期の遺跡周辺地域は、新田郡に比定され、『和名類聚抄』によれば郡内には新田(尒布多)・滓野(加須野)・石西・祝人(波布利)・淡甘の５郷と東山道駅家が存在したとされる。大宝令の五等区分上は下郡に当たる。郡名については、正倉院蔵の奉献庸布に、「上野国新田郡淡甘郷戸主谷田部根麻呂・・」の名が

記された資料が残る。各郷は、新田郷が郡中央部、滓野郷が郡南部、石西郷が郡南東部、祝人郷が郡北東部、淡甘郷が郡西部に比定されている。

新田郡衙については、かねてからその推定地とされていた天良七堂遺跡の近年の発掘調査成果などにより、郡庁の建物跡や石敷き遺構、郡衙の周囲を囲む堀跡などが検出され、新田郡庁の建物配置と変遷など様相が明らかになりつつある（平成20年「上野国新田郡庁跡」として国史跡指定）。また、郡衙周辺では、南方に東山道駅路と考えられる巾10m強の２本の道路跡（牛堀・矢ノ原ルート、下新田ルート）、東方に寺井廃寺、西方には瓦葺き礎石建物跡が検出された入谷遺跡、唐三彩陶枕が出土した境ヶ谷戸遺跡などがある。（下掲の第５図参照）

隣接の前六供遺跡一次調査では、「新」と墨書された土器数点や、井戸跡内から「貞観九（867）年四月十五日」の紀年銘をもつ木簡が出土している。木簡は、曲物の蓋材を転用し、表に一ヶ月分の検収記録、裏に責任者である「検収権目代壬生道□」の自署が記されており、当時の地方行政の実態を示す良好な資料と言える。

〔中世〕　中世に至ると、遺跡周辺地域には二つの荘園と御厨が相次いで成立する。大治五（1130）年頃に仁和寺法金剛院所領地として寄進されたと推察される渕名荘と、久寿三（1156）年に成立した園（薗）田御厨、保元二（1157）年に本家に鳥羽院祈願寺である金剛心院、領家に藤原氏北家花山院流藤原忠雅の所領地として寄進し立券した新田荘である。渕名荘は、ほぼ律令制下の佐位郡を領域として、秀郷流藤原氏の兼行（渕名大夫）らが開発・寄進し下司（荘官）を務めたのに対し、新田荘は新田義重らが新田郡西南部の「空閑地」19郷を開発・寄進し、同様に下司職として新田郡一円に勢力を拡大していった。その荘域は、立券当所の19郷（女塚・上江田・下江田・田中・大館・粕川・小角・押切・出塚・世良田・三木・上今井・下今井・上平塚・下平塚・木崎・長福寺・多古宇・八木沼）から、嘉応二（1170）年には56郷と拡大し、その境は北限が桐生市新里の鹿田山周辺にて須永御厨と接し、南は埼玉県深谷市の旧利根川流路、東は太田市金山丘陵・旧岩瀬川流路にて薗田御厨・足利荘（藤姓・源姓）と接し、西は早川を境に渕名荘と接するまでに至るが、承安二（1172）年に起きた薗田御厨との紛争をはじめ、享徳四（1455）年の「新田荘田畠在家注文」には荘域である木嶋などの地名に「さかいにとらる」の註釈が加えられているように、領地境をめぐる攻防が繰り返されたものと推察される。新田荘は、源義国・義重父子により開発・立券された後、惣領制を基に荘内に一族が展開し、中世武士団新田氏一族の根源地となったが、その後庶子家の分立から本宗家の弱体化が進み、文永９（1272）年の二月騒動以降は北条家得宗領が拡大していった。元弘三（1333）年の新田義貞挙兵の後、建武二（1335）年には足利尊氏により新田氏所領は没収となる。

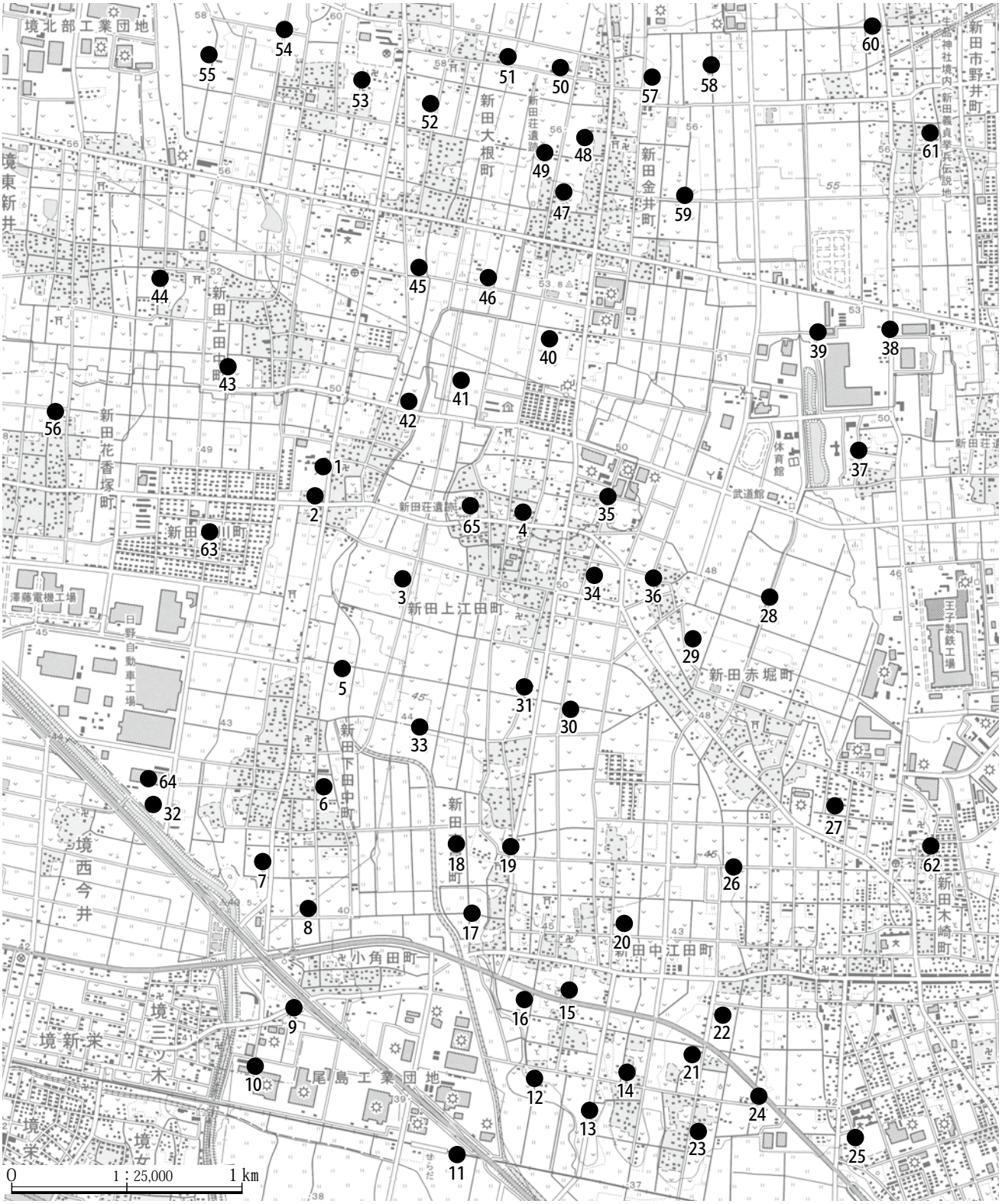
中世新田荘を支えた矢太神沼・重殿などの豊かな湧水であったが、その後の新田開発をも含めた絶対量を賄うには及ばず、新たな用水として渡良瀬川より引水した「新田堀」が生まれた。新田堀の開削時期は明らかではなく、元亀元（1570）年頃とされるが、それ以前の記録にも「用水」の記載が見られる。

遺跡周囲の中世遺構として、史跡新田荘遺跡にも指定されている江田館跡（65）をはじめ、長慶寺から当遺跡・綿打中学校下に推定される上田中・長慶寺周辺城館跡（通称田中館跡）などの城館址がある。

〔近世〕　遺跡地の上田中村は、中世の田中郷が太閤検地の頃に上田中と下田中に分けられ、生まれたとされる。遺跡周辺地域の近世初頭の領主支配は、小金井村が館林城榊原康政領、市野井村の一部が岩松守純領である他は、すべて幕府直轄領となった。その後、天領分は旗本知行領として分与された。交通面では、中山道の倉賀野宿を起点に日光へと続く日光例幣使街道の道筋として木崎宿が置かれ、宿場町となった。

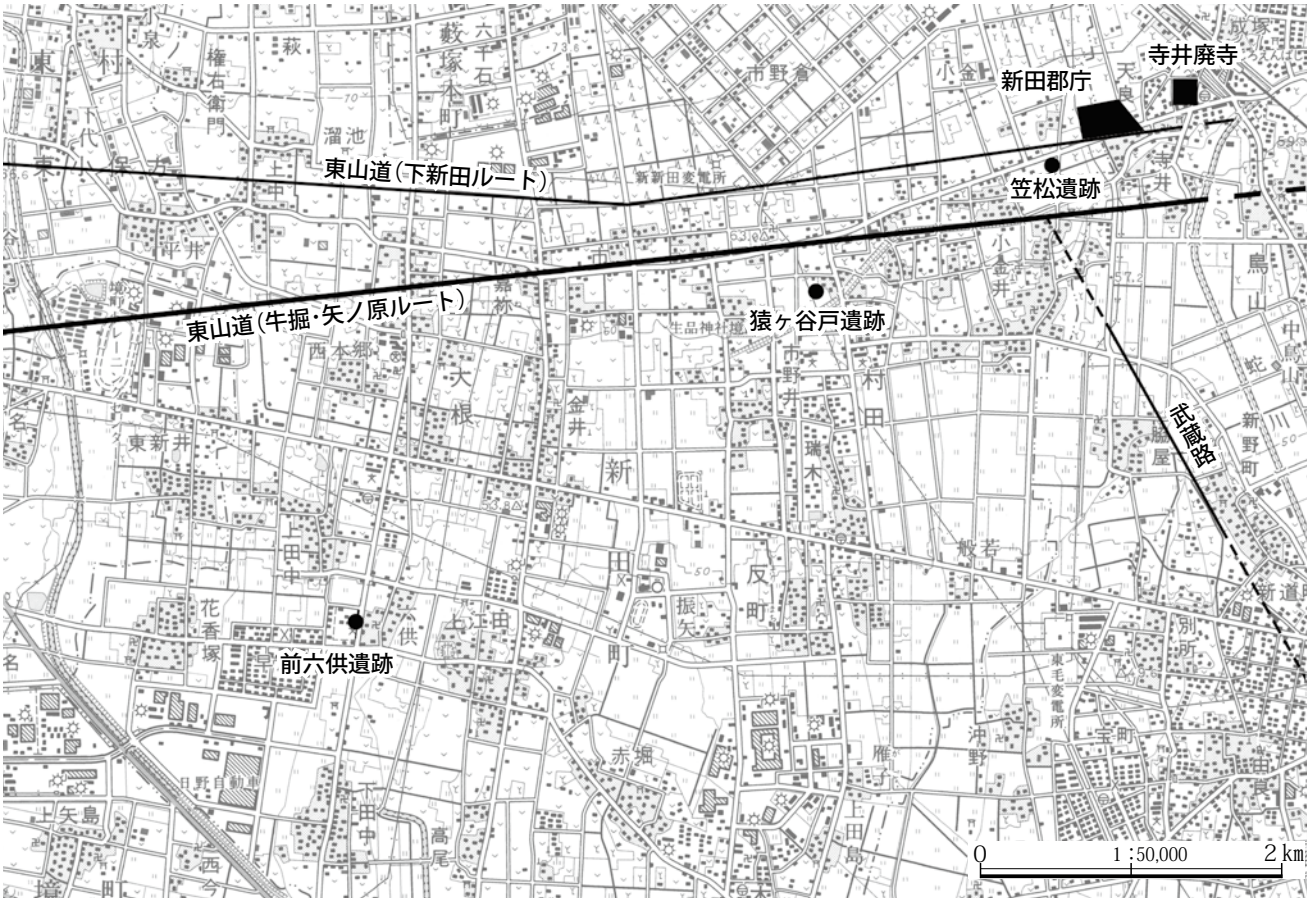
〔近・現代〕　遺跡地は、明治22（1889）年の市制・町村制施行により新田郡内の大根村・上江田村・上田中村・下田中村・花香塚村・金井村・嘉禰村・大村・上中村・溜池村・権右衛門村が合併し綿打村が生まれ、さらに昭和31（1956）年に綿打村・木崎村・生品村が合併して新田郡新田町となった。平成17（2005）年３月には旧太田市と新田郡新田町・同尾島町・同藪塚本町が合併し、現在の太田市となる。

上田中の小字名としては、磯ノ前・兵庫塚・東六句・前六句・西六句・八反田・鶴ヶ沢・馬場前・馬場・天沼浦・天沼・清水浦・圓堂・大通領・五領・葭原・たが（竹冠下に輪）田・中道東・中嶌・桒木嶋・天神ヶ谷戸・熊野がある。（『明治拾四年地理雑件』（小字名調書）より）



1 前六供遺跡　2 前六供遺跡（Ⅰ・Ⅱ）　3 西田遺跡　4 北宿遺跡　5 源六堰遺跡　6 下曲輪東遺跡　7 川久保遺跡　8 中道遺跡
9 小角田前遺跡　10 水久保遺跡　11 歌舞伎遺跡　12 中江田遺跡　13 中江田Ｃ遺跡　14 中江田本郷遺跡　15 中江田宿通遺跡　16 中江田Ａ遺跡
17 田島遺跡　18 台遺跡　19 明神遺跡　20 赤仏遺跡　21 寒沢・原遺跡　22 寒沢遺跡　23 中江田原遺跡　24 八ツ縄遺跡　25 花園遺跡
26 下耕地遺跡　27 一町田・堀ノ内遺跡　28 東油田遺跡　29 林遺跡　30 野中遺跡　31 龍得寺遺跡　32 西今井遺跡　33 谷津遺跡　34 庚申塚遺跡
35 東田遺跡　36 登戸遺跡　37 振矢遺跡　38 梅ノ木遺跡　39 松ノ木遺跡　40観音前遺跡　41一町田遺跡　42五領遺跡　43桑子島遺跡　44馬場遺跡
45大通寺遺跡　46新屋敷遺跡　47妙参寺遺跡　48西側遺跡　49新屋敷北遺跡　50矢太神遺跡　51矢太神沼遺跡　52本村北遺跡　53西本村遺跡
54団蔵坊遺跡　55大根西田遺跡　56梨子木遺跡　57金井西原遺跡　58重殿遺跡　59金山前遺跡　60木刈間々下遺跡　61市野井本郷遺跡　62大通寺後遺跡
63笠松遺跡　64諏訪下遺跡　65江田館（史跡新田荘遺跡）

第４図　周辺遺跡位置図（１）（国土地理院地形図　1:25,000「伊勢崎」 平成15年２月１日発行）



第５図　周辺遺跡位置図（２）（「新田郡衙と東山道駅路 予稿集」2011太田市教育委員会に加筆）

第１表　前六供遺跡調査一覧

遺跡名	前六供遺跡	前六供遺跡Ⅱ	前六供遺跡
所在地 （旧称）	太田市新田上田中町地内 （新田郡新田町大字上田中字前六供）	太田市新田上田中町地内 （新田郡新田町大字上田中字前六供）	太田市新田上田中町地内
市町村コード	104825	104825	10205
遺跡番号	41	41	★
位　置	北緯　36°　17′41″ 東経　139°　16′49″	北緯　36°　17′42″ 東経　139°　16′46″	北緯　36°　17′57″ 東経　139°　16′38″
調査期間	1998.10.20 ～1998.12.25	2002.02.08 ～2002.12.20	2012.04.01 ～2012.06.30
調査面積	1,200㎡	1,000㎡	540㎡
調査主体	新田町教育委員会	新田町教育委員会	（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査原因	県道整備 県道伊勢崎新田線道路整備事業	県道整備 県道伊勢崎新田線道路整備事業	県道整備 単独公共単独道路改築事業 （一）大原境三ツ木線
報告書名	新田町文化財調査報告書　第25集 『前六供遺跡、後谷遺跡、西田遺跡』	新田町文化財調査報告書　第33集 『前六供遺跡Ⅱ』	（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査報告書　第572集 『前六供遺跡』
発行年	2000年	2003年	2013年

第３章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法と経過

調査に際して、調査区が県道315号線と太田市立綿打中学校に隣接することから、県道側に安全フェンスを設置し、重機等の出入・稼働に留意するなど事故防止に努めた。また、用地内に調査事務所を設営することが難しいため、調査区隣接の綿打中学校校庭の一部を無償借用し、事務所用地および排土の仮置き場とした。

掘削に際しては、用地内の農業用井戸送水施設の付替え工事を優先するため、南側調査区より重機（バックホー）を用いて表土の除去を行った。排土は北側の調査区内に仮置きし、調査終了後に反転することとした。北側調査区の掘削に際しては、調査区内に埋設された送電ケーブルや電柱支線を避けて掘削を行った。

遺構の検出は、近・現代の掘削による多くの攪乱が確認面にまで及んでいたため、多くの遺構が部分的な検出となった。

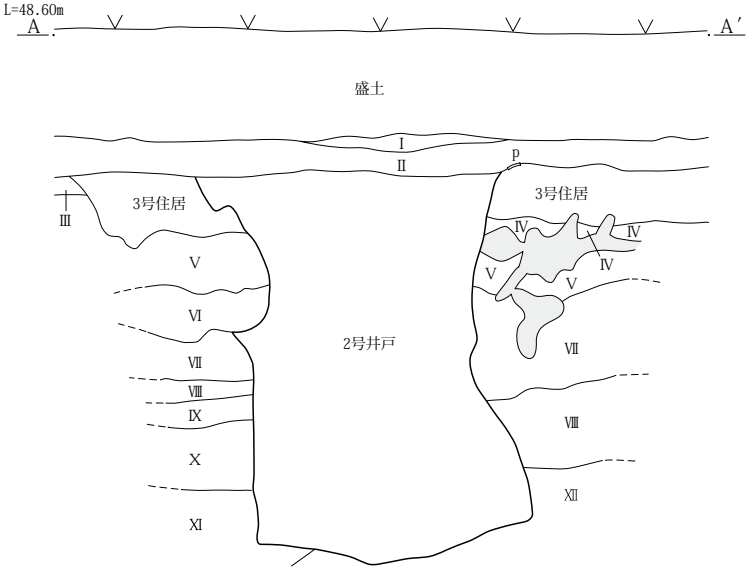
調査は幸いにして降雨による作業休止・冠水等の障害が少なく、予定通り４月25日に調査を終え、埋め戻し作業・調査事務所の撤収等を行った。

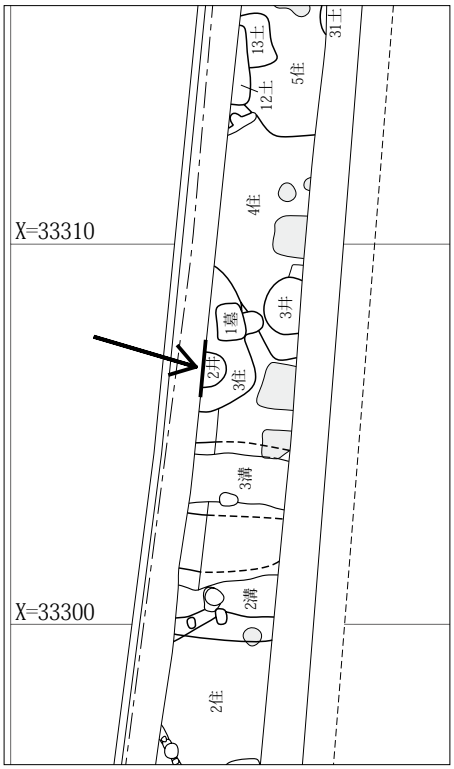
遺構の確認から掘削に至る作業については、遺跡掘削工事請負業者に委託し行った。記録測量については、基準点・水準点測量、および遺構平面図測量（器械測量）等の作業を主として測量業者への業務委託で実施し、補助的に発掘調査作業員による断面図測量等を行った。測量縮尺は、原則として1/10・1/20・1/40を用い、全体図等は適時設定した。また、記録写真撮影については、デジタル一眼レフカメラ（800万～ 1200万画素）と６×７判中型カメラでブローニー判フィルムを用いて調査担当者が撮影を行った。

〔調査日誌（抜粋）〕

４月４日（水）　晴
　調査開始準備
　太田市立綿打中学校　挨拶。　業者（掘削請負・重機）現地打合わせ。
４月５日（木）　晴
　調査区南端掘削開始。土坑・ピット確認。調査開始。
４月６日（金）　晴
　１～３号土坑　完掘～断面・平面測量、全景写真撮影。
　１～３号ピット　断面・平面測量、全景写真撮影。
　１号焼土面（１号溝内）平面測量、全景写真撮影。
　１号溝　掘削。　調査区南端部土坑・ピット平面測量。
４月９日（月）　曇
　調査区南端埋戻し開始。１号溝（館堀跡）掘削。
　調査区南端部土坑・ピット平面測量。１号溝遺物出土図および平面測量。
４月10日（火）　晴
　１号溝全景写真撮影、平面測量、断面測量。
　調査区南端埋戻し完了～引渡し。　北調査区掘削開始。
　４号・５号土坑断面測量、全景写真撮影。　土坑・ピット遺構確認～掘削。
４月11日（水）　曇
　北調査区重機掘削。　遺構確認作業～住居・土坑掘削。
４月12日（木）　曇のち雨
　降雨のため重機掘削作業中止。
　遺構確認作業。１号住居・４号土坑掘削。
４月13日（金）　晴
　北調査区重機掘削。遺構確認作業。
　１号住居カマド断面測量・写真撮影・貯蔵穴掘削。
　２号住居掘削。１号ピット列断面図測量。３号住居掘削。
　２号井戸掘削（３号住居内）。１号墓壙掘削（３号住居内）
　その他、土坑・ピット掘削
４月16日（月）　曇
　重機掘削：北に向かって掘削。　住居・土坑遺構確認作業。
　２号住居完掘、全景写真撮影。　３号住居カマド断面測量、全景写真撮影。
　４号・５号住居掘削。３号井戸掘削。１号墓壙全景写真撮影、古銭取り上げ。
４月17日（火）　曇
　住居・土坑遺構確認作業。
　１号住居カマド掘り方断面測量。　２号住居、２号・３号溝断面写真撮影。
　３号住居西壁断面写真撮影、測量。　４号住居・５号住居掘削。
　２号・３号井戸、２号・３号溝全景写真撮影。　４号溝掘削。
４月18日（水）　晴
　住居・土坑遺構確認作業。
　１号住居貯蔵穴断面測量、全景写真撮影。
　２号住居・３号住居・４号住居・３号井戸東壁断面図写真撮影、測量。
　５号住居・２号井戸遺物出土状況写真撮影。
　３号井戸・４号溝西壁セクション写真撮影・実測。
４月19日（木）　晴
　住居貯蔵穴断面測量、全景写真撮影。
　６号・７号住居（20号土坑に壊され、貯蔵穴・カマドのみ確認）掘削。
　貯蔵穴内より刻書土器「東」出土。
　８号住居（試掘トレンチに壊され、貯蔵穴、カマドのみ確認）掘削。
　２号井戸全景・遺物出土状態写真撮影、遺物（石臼）取り上げ。
　調査区北端、遺構確認～掘削。
４月20日（金）　晴
　調査区北端（水準点北側）重機により掘削。
　送電ケーブル埋設確認、予定の半分を掘削。
　遺構確認作業、住居・溝検出。
　４号住居全景写真撮影、遺物取り上げ。
　５号住居全景写真撮影、遺物エレベーション、遺物取り上げ。
　20号土坑・５号井戸断面測量。　７号住居全景写真撮影。
　綿打中学１年生１クラス見学来訪。
４月21日（土）　曇
　１号住居・２号住居掘り方調査。３号住居掘り方精査。
　５号住居掘り方調査、床下土坑確認、断面写真撮影～測量。
４月23日（月）雨のち曇
　２号住居・５号住居掘り方調査。
　９号住居南掘り込み掘削、ピット完掘。　遺跡全景写真撮影準備。
４月24日（火）　晴
　高所作業車による遺跡全景写真撮影。
　５号住居掘り方、床下土坑検出。床下土坑内より土器出土。
　９号住居全景写真撮影、断面図測量。　１号・２号ピット列全景写真撮影。
　調査区北端東壁断面測量（28号・30号土坑含む）。
４月25日（水）　晴
　５号住居掘り方全景写真撮影、床下土坑遺物エレベーション測量。
　１号・２号井戸掘削。
４月26日（木）　曇
　埋戻し作業。
４月27日　（金）
　撤収作業。事務処理。

第２節　基本土層





Ⅰ．褐色土　砂質土　小石含む　しまり弱い　旧耕作土。

Ⅱ．暗褐色土　ローム粒　炭粒含む。

Ⅲ．くすんだ褐色土　よごれたローム土にロームブロック混土(漸位層)。

Ⅳ．ローム層。

Ⅴ．明黄色土　硬質ローム　As-YP状の白色細粒含む。

Ⅵ．明黄灰色　細砂層。

Ⅶ．明黄褐色　粘質ローム。

Ⅷ．黄茶色　粘質ローム　マンガン集積層。

Ⅸ．黄橙色　粘土層。

Ⅹ．灰白色　粘土層。

Ⅺ．灰白色　わずかに細砂含む。

Ⅻ．青灰色　砂層。

第６図　基本土層図

第４章　検出遺構と出土遺物

第１節　竪穴住居

１号住居

位置：Ｘ＝33,284　Ｙ＝－49,962付近

規模・形状：調査区南半部西壁に接し、カマドを有する北東壁から東コーナー部を経て南東壁の一部が検出された。検出規模は3.2×1.35m、面積は2.3㎡を測り、方形ないし長方形状を呈するものと思われる。

主軸方位：Ｎ－62°－Ｅ

遺存状態：後世の削平・攪乱を受け、遺存状態は悪い。残存深度は確認面より床面まで35cm程を測る。

埋土：暗褐色土を主体とした砂質土で、堆積に乱れはなく、自然埋没の様相を呈する。

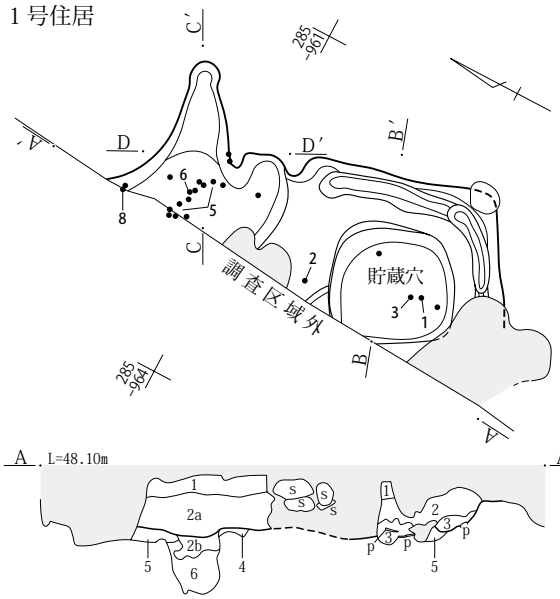
床面：しまりある掘り方埋土(灰黄褐色土)で床面を構築するが、顕著な硬化面は認められない。東コーナー部壁下に、幅13～20cm、深度２～８cmを測る壁溝が巡る。

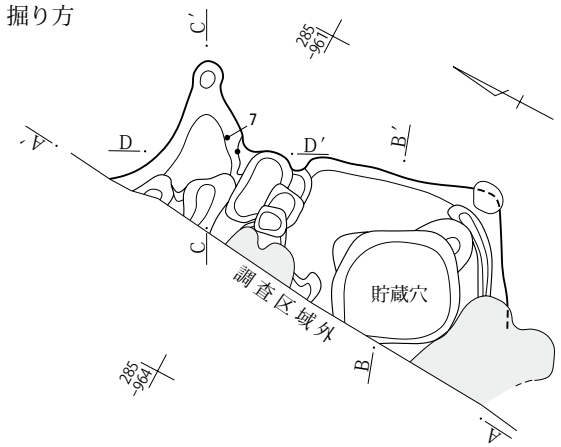
柱穴等：調査範囲内には柱穴は検出されず、東コーナー部付近にて95×100cm、深さ55cmを測る隅丸方形状の深い貯蔵穴が検出される。

カマド：住居北東壁側に位置する。燃焼部はほぼ壁のライン上に在り、使用面における灰の堆積は少ないが、焼土化は著しい。両袖部は残存せず、右脇に袖石を抜き去ったと思われる痕跡が検出される。

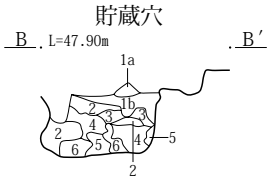
掘り方：一部において４～10cm程の掘り込み、及び貼り床を検出するが、全体の掘り方については明らかではない。

出土遺物：カマド付近より「＋」の刻書土師器杯(第８図１)、土師器杯(同図２・３)、土師器鉢(同図４)、土師器甕(同図５・６・７)、須恵器瓶(同図８)が出土する他、埋土中や掘り方埋土内よりわずかに土師器・須恵器小片が出土するのみである。





A－A′
1．暗褐色土　ローム粒　炭粒わずかに含む。
2a．暗褐色土　ローム粒　炭粒　焼土混じり。
2b．２a層にロームやや多く含む(貯蔵穴埋土)。
3．暗赤褐色土　焼土ブロック多く含み土器片混じり(天井崩落土)。
4．くすんだ黄褐色土　ロームブロック・焼土ブロック混土　しまり強く貼床。
5．灰黄褐色土　ロームブロック主体　しまり強く貼床。
6．ロームブロック　灰褐色の混土　一括埋土(貯蔵穴覆土)。

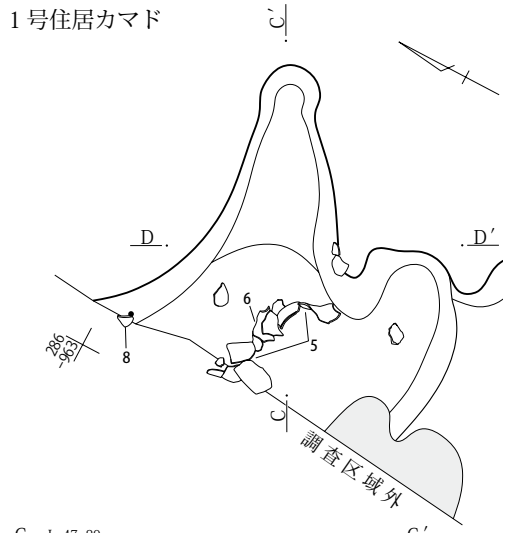


B－B′
1a．暗褐色土　炭粒　焼土粒含む。
1b．暗褐色土　１a層に灰層混じり。
2．くすんだ褐色土　焼土粒をわずかに含む　ロームブロック斑に含む。
3．褐灰色土　ローム粒多く含む。
4．褐灰色土　ローム粒　焼土粒　斑に含む。
5．くすんだ黄褐色土　ローム小ブロック主体。
6．明黄褐色土　ローム粒ブロック主体。

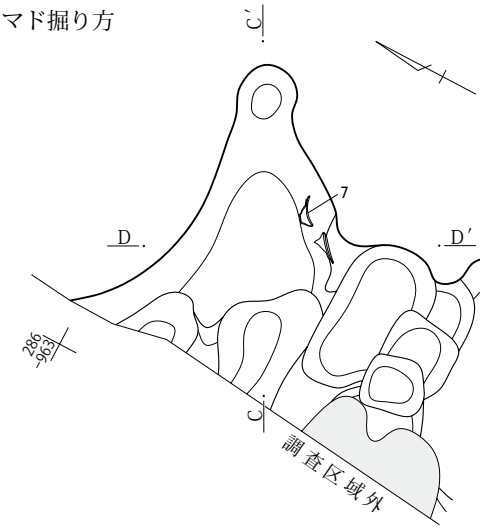
0　1：60　2m

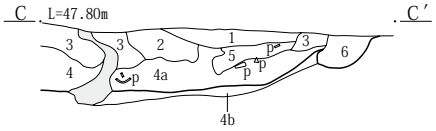
第７図　１号住居遺構図(１)

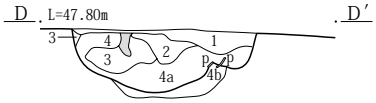
１号住居カマド



カマド掘り方



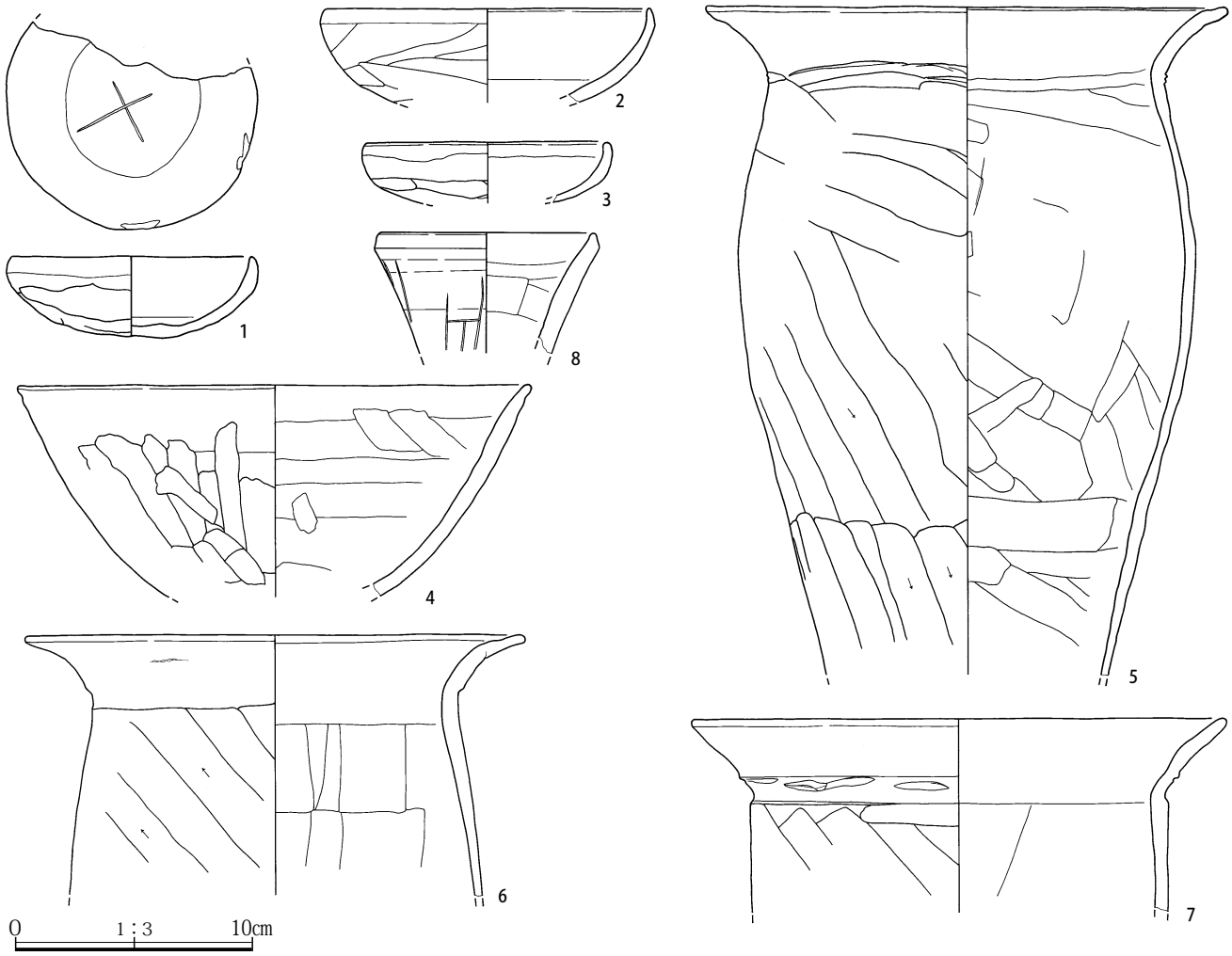




C－C′、D－D′

1．くすんだ褐色土　ローム小ブロック　焼土粒　斑点状に含む。
2．くすんだ黄褐色土　ローム小ブロック　主体　焼土小ブロック混じり。（天井崩落土）
3．くすんだ褐色土　ローム粒　焼土粒を含む。
4a．くすんだ赤褐色土　焼土小ブロック　全体　ローム粒わずかに含む　しまり弱く　フカフカした層。
4b．くすんだ赤褐色土　焼土主体　ローム小ブロック含む。
5．赤褐色土　ロームブロック主体　天井下部崩落土。
6．暗褐色土　焼土粒　炭粒含む　煙出。

0　1：30　1m



第８図　１号住居遺構図（１）・遺物図

第２表　１号住居遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第8図 PL.19	1	土師器 杯	-3 2/3	口	10.0	高	3.4	細砂粒・黒色鉱物粒/良好/明赤褐	口縁部は内方を向く。口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。間に撫での部分をわずかに残す。内面は撫で。	器面やや磨滅。底部内面に「十」の線刻。
第8図	2	土師器 杯	+3 1/3	口	13.6			細砂粒・赤色粘土粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
第8図	3	土師器 杯	-25 1/4	口	10.0			細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。間に撫での部分を残す。内面は撫で。	底部外面に炭素吸着・黒班状。
第8図 PL.19	4	土師器 鉢	埋土 口縁~体部中位 1/4	口	21.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。体部外面は弱いヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	
第8図 PL.19	5	土師器 甕	+1 口縁~胴部下位	口	21.6			細砂粒・赤色粘土粒/良好/橙	口縁部は横撫で。頸部にはヘラの当たった痕跡を残す。胴部外面は上位が斜横、中位が斜縦、下位も斜縦のヘラ削り、内面は斜横のヘラ撫で。	
第8図	6	土師器 甕	+1 口縁~胴上部片	口	20.8			細砂粒・雲母/良好/にぶい黄橙	口縁部はハケ状工具で横撫で。一部に輪積み痕、ヘラ削りの痕跡残す。胴部外面は斜のヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	
第8図	7	土師器 甕	+8 口縁~胴部片	口	22.2			細砂粒・黒色鉱物粒/良好/橙	口唇部は横撫で。口縁部は２回に分けて横撫で、下半部にヘラの当たった痕跡を残す。胴部外面は斜めのヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	
第8図	8	須恵器 瓶	+3 口縁片	口	8.8			白色鉱物粒/還元焔、やや軟質/灰	ロクロ整形(右回転か)、内外面とも回転を伴う撫で調整を重ねる。	口唇部磨耗・外面に細いヘラ状工具による線刻。

重複遺構：東コーナー部において小ピットと重複し、遺構検出時の埋土の様相より、本住居跡の方が古いものと判断される。

所見：出土遺物より、住居の年代は７世紀後半と推定される。

２号住居

位置：Ｘ＝33,297　Ｙ＝－49,960付近

規模・形状：調査区南半部に位置し、北西壁の一部と南西壁から南コーナー部を経て南東壁の一部が検出された。推定規模は一辺4.8mほどを測る、方形状を呈するものと推察される。

主軸方位：Ｎ－８°－Ｅ

遺存状態：後世の削平を受け、残存深度は確認面より床面まで19cm程を測る。

埋土：暗褐色土を主体とした砂質土で、堆積に乱れはなく、自然埋没の様相を呈する。

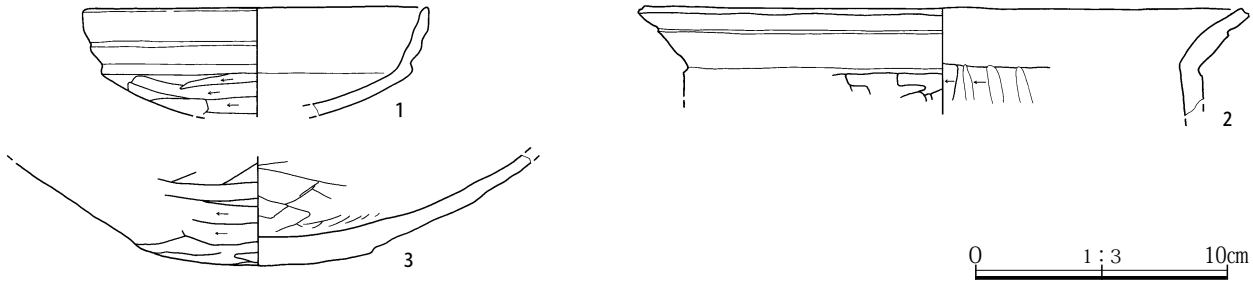
床面：掘削面の地山土を床面とし、中央部は硬化する。検出壁下に、幅19～24cm、深度７～15cmを測る壁溝が巡り、南西壁から南東壁下にかけての壁溝内には掘削時の工具痕が残る。

柱穴等：北東部・北西部・南西部の各柱穴が検出され、径30～100cm、深さ19～66cmを測る。南西部の柱穴は２穴在り、建て替えが行われた可能性もある。また、南東コーナー部付近にて40×47cm、深さ35cmを測る隅丸方形状の屋内土坑が検出され、その北西側を柱穴と壁溝を結ぶように間仕切り状の溝が検出された。

カマド：調査範囲内においては検出されていない。恐らくは調査区外の北東壁側に位置するものと推察される。

掘り方：住居壁際に土坑状や溝状の掘り込みが検出される。

出土遺物：出土する遺物は少なく、土師器杯片(第９図１)、土師器甕片(同図２・３)が出土する他、埋土中や



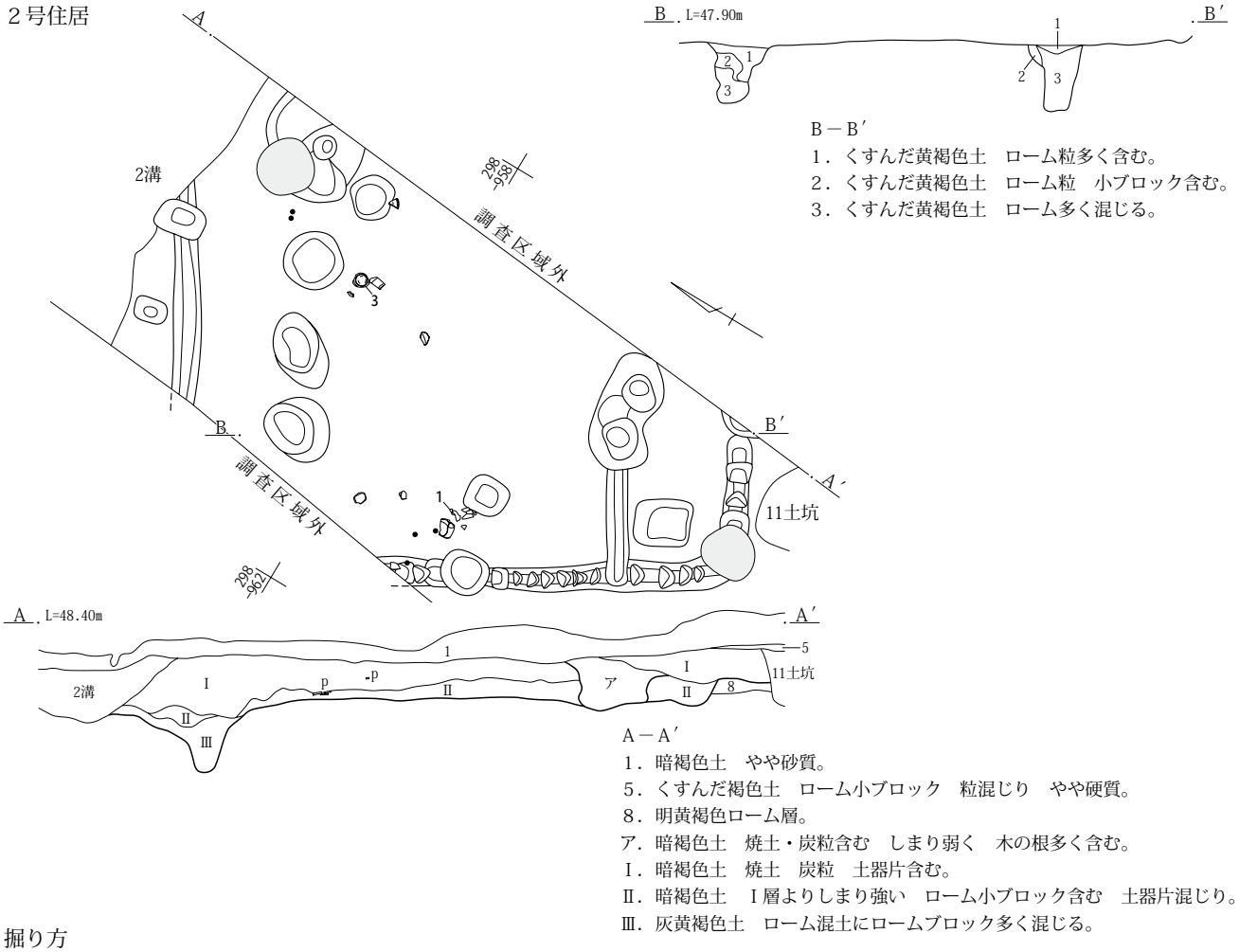
第９図　２号住居遺物図

掘り方埋土内よりわずかに土師器・須恵器小片が出土するのみである。

重複遺構：北東コーナー部において２号溝と重複し、埋土の様相より、本住居跡の方が古いものと判断される。

所見：出土遺物より、住居の年代は６世紀後半と推定される。

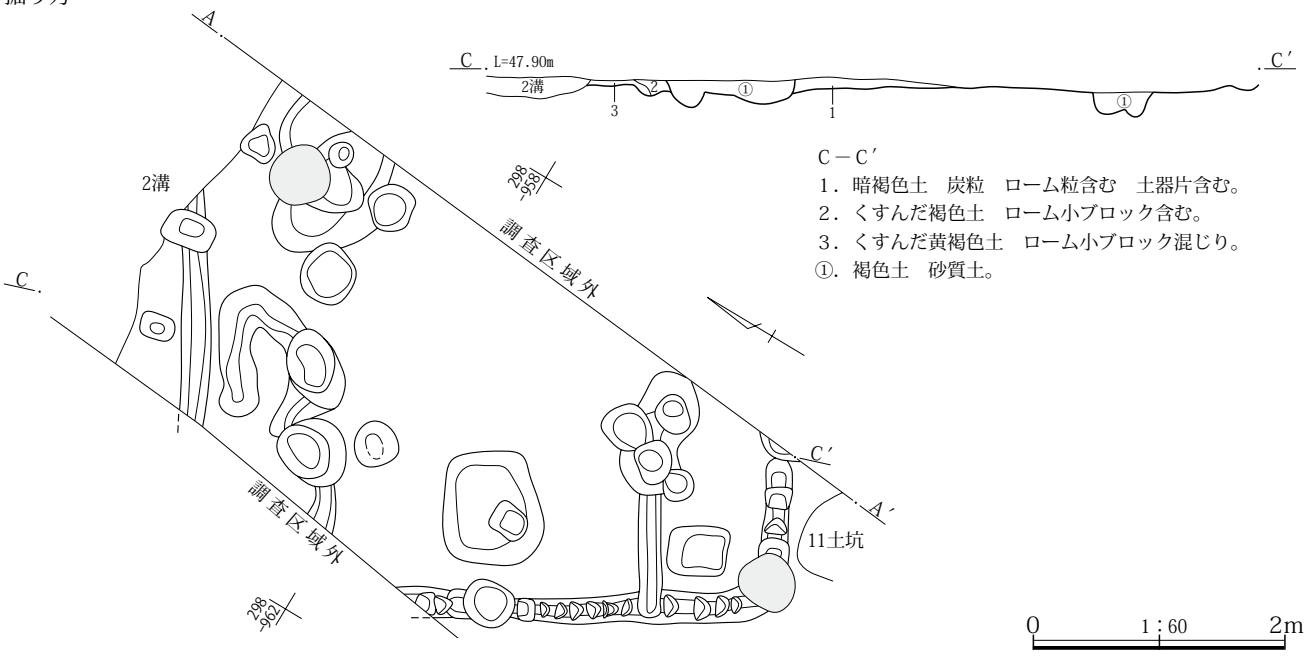
２号住居



B－B′
1．くすんだ黄褐色土　ローム粒多く含む。
2．くすんだ黄褐色土　ローム粒　小ブロック含む。
3．くすんだ黄褐色土　ローム多く混じる。

A－A′
1．暗褐色土　やや砂質。
5．くすんだ褐色土　ローム小ブロック　粒混じり　やや硬質。
8．明黄褐色ローム層。
ア．暗褐色土　焼土・炭粒含む　しまり弱く　木の根多く含む。
Ⅰ．暗褐色土　焼土　炭粒　土器片含む。
Ⅱ．暗褐色土　Ⅰ層よりしまり強い　ローム小ブロック含む　土器片混じり。
Ⅲ．灰黄褐色土　ローム混土にロームブロック多く混じる。

掘り方



C－C′
1．暗褐色土　炭粒　ローム粒含む　土器片含む。
2．くすんだ褐色土　ローム小ブロック含む。
3．くすんだ黄褐色土　ローム小ブロック混じり。
①．褐色土　砂質土。

第10図　２号住居遺構図

第３表　２号住居遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第9図	1	土師器 杯	+2 1/4	口	13.4			細砂粒/良好/灰黄褐	有段口縁。口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内外面炭素吸着･黒色味をおびる･内面磨滅顕著。
第9図	2	土師器 甕	埋土 口縁片	口	23.4			細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削りか、内面は横のヘラ削り後、縦の磨き。	器面やや炭素吸着･甑の可能性？･直径は小さくなる可能性あり。
第9図	3	土師器 甕	+8 胴下位~底部	底	9.0			細砂粒・赤黒色粘土粒/良好/橙	丸胴。胴部外面は斜横のヘラ削り、内面はヘラ撫で。底部外面はヘラ削り。	外面の一部破片となった後炭素吸着、内面炭素吸着、煤か。

３号住居

位置：Ｘ＝33,307　Ｙ＝－49,959付近

規模・形状：調査区南半部西壁に接し、カマドを有する東壁から南東コーナー部を経て南壁の一部が検出された。検出規模は3.95×1.73m、面積は3.0㎡を測り、全容は隅丸方形ないし隅丸長方形状を呈するものと思われる。

主軸方位：Ｎ－89°－Ｅ

遺存状態：後世の削平や重複遺構による攪乱を受け、遺存状態は悪い。残存深度は確認面より床面まで21cm程を測る。

埋土：暗褐色土を主体とした砂質土で、堆積に乱れはなく、自然埋没の様相を呈する。

床面：掘削面の地山土を床面とし、中央部はやや硬化する。検出壁下に、幅16～33cm、深度３～16cmを測る壁溝が巡る。

柱穴等：調査範囲内には柱穴は検出されず、東コーナー部付近にて45×72cm、深さ６cmを測る楕円形の貯蔵穴が検出されている。

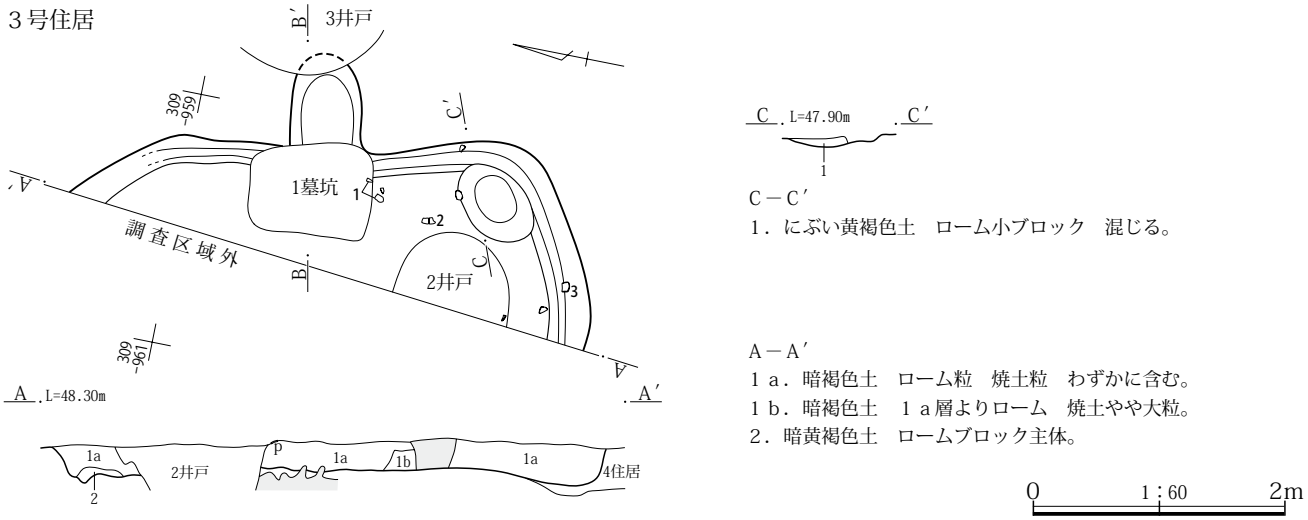
カマド：住居東壁のほぼ中央付近に位置するが、袖部～焚き口と煙道端部を重複する遺構により失う。

掘り方：なし。

出土遺物：出土する遺物は少なく、土師器杯(第12図１)、土師器甕片(同図２)、須恵器横瓶片(同図３)が出土する他、埋土中や掘り方埋土内よりわずかに土師器小片が出土するのみである。

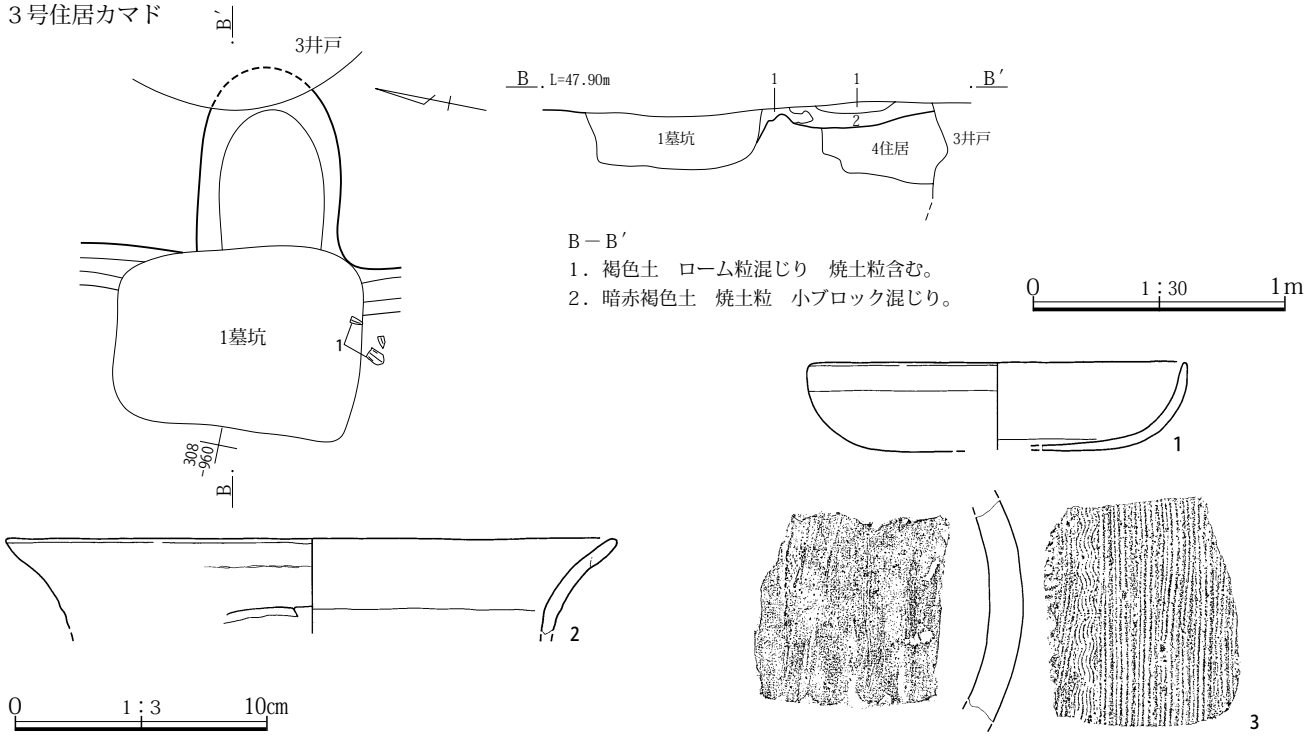
重複遺構：カマド煙道端部において３号井戸と重複、カマド燃焼部において１号墓坑と重複、貯蔵穴北西部において２号井戸とそれぞれ重複し、遺構検出時の埋土の様相より､いずれも本住居跡の方が古いものと判断される。また、南東部で４号住居と重複し、調査区壁断面の埋土の様相より、本住居跡の方が新しいものと判断される。

所見：出土遺物より、住居の年代は８世紀後半と推定される。



第11図　３号住居遺構図(１)

３号住居カマド



第12図　３号住居遺構図（２）・遺物図

第４表　３号住居遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第12図	1	土師器 杯	+3 1/4	口	15.8	高	3.4	細砂粒・黒色鉱物粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部はヘラ削りか。内面は撫で。	外面磨滅。
第12図	2	土師器 甕	+1 口縁~胴上位片	口	23.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で、輪積み痕を残す。胴部外面はヘラ削り。	
第12図	3	須恵器 横瓶か	+1 胴部片					白色鉱物粒・黒色鉱物粒は発泡/還元焔/オリーブ黒	紐づくり。製作時の上位は表面拓本の左側。外面はカキ目を施す内に6条1単位の波状文が見られる。表面残存左端はクシ状工具による刺突文の一部か。	

４号住居

位置：Ｘ＝33,311　Ｙ＝－49,959付近

規模・形状：調査区のほぼ中央に位置し、南コーナー部から南西壁の一部と北西壁の一部が検出された。推定規模は一辺が６ｍほどの方形状を呈するものと推察される。

主軸方位：Ｎ－55°－Ｅ

遺存状態：後世の削平を受け、残存深度は確認面より床面まで15cm程を測る。

埋土：暗褐色土を主体とした砂質土で、堆積に乱れはなく、自然埋没の様相を呈する。

床面：掘削面の地山土を床面とし、中央部はやや硬化する。検出壁下に幅15～22cm、深度16～20cmを測る壁溝が巡る。床面上にわずかながら焼土と炭化物の点在がみられる。

柱穴等：調査範囲内には柱穴・貯蔵穴は検出ていない。

カマド：調査範囲内においては検出されていない。恐らくは調査区外の北東壁側に位置するものと推察される。

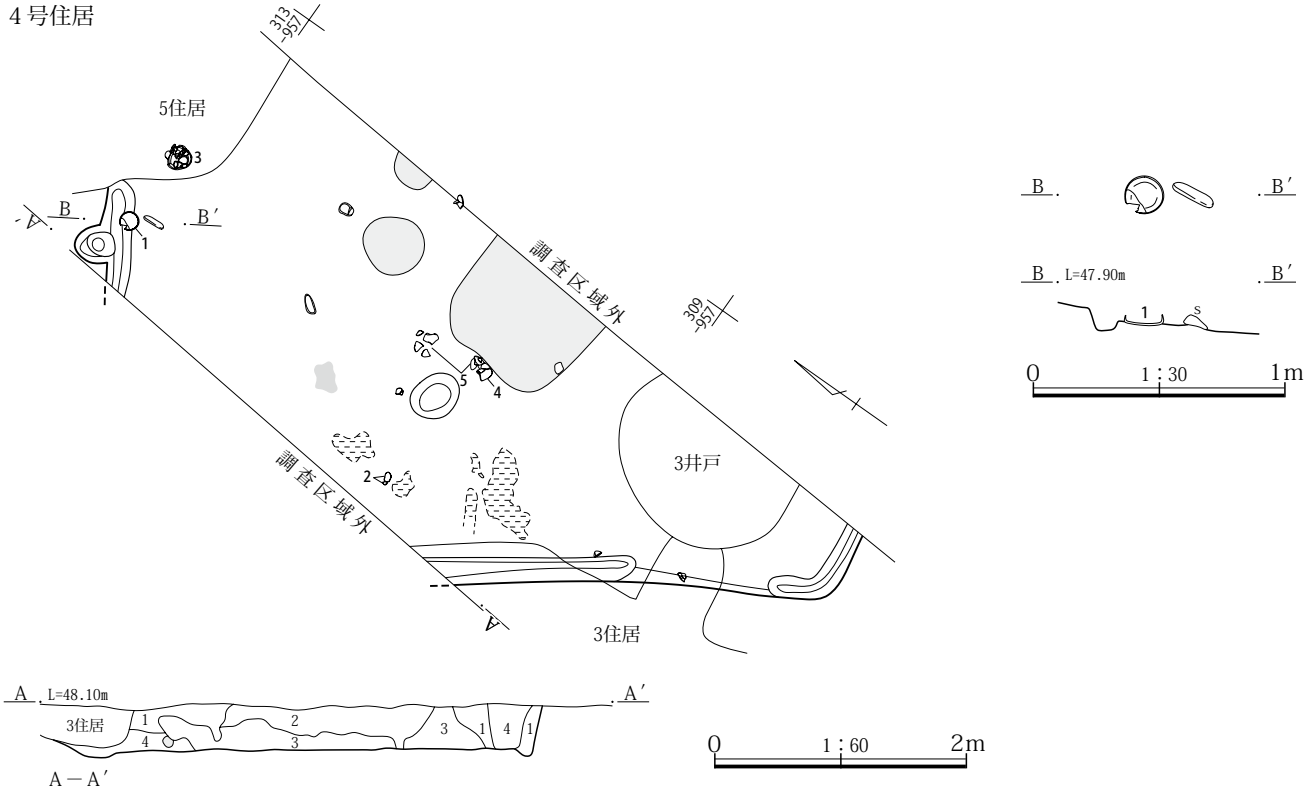
掘り方：なし。

出土遺物：出土する遺物は少なく、土師器杯（第13図１・２）、土師器甕片（同図３・４）、須恵器甕片（同図５）が出土する他、埋土中や掘り方埋土内よりわずかに土師器・須恵器小片が出土するのみである。

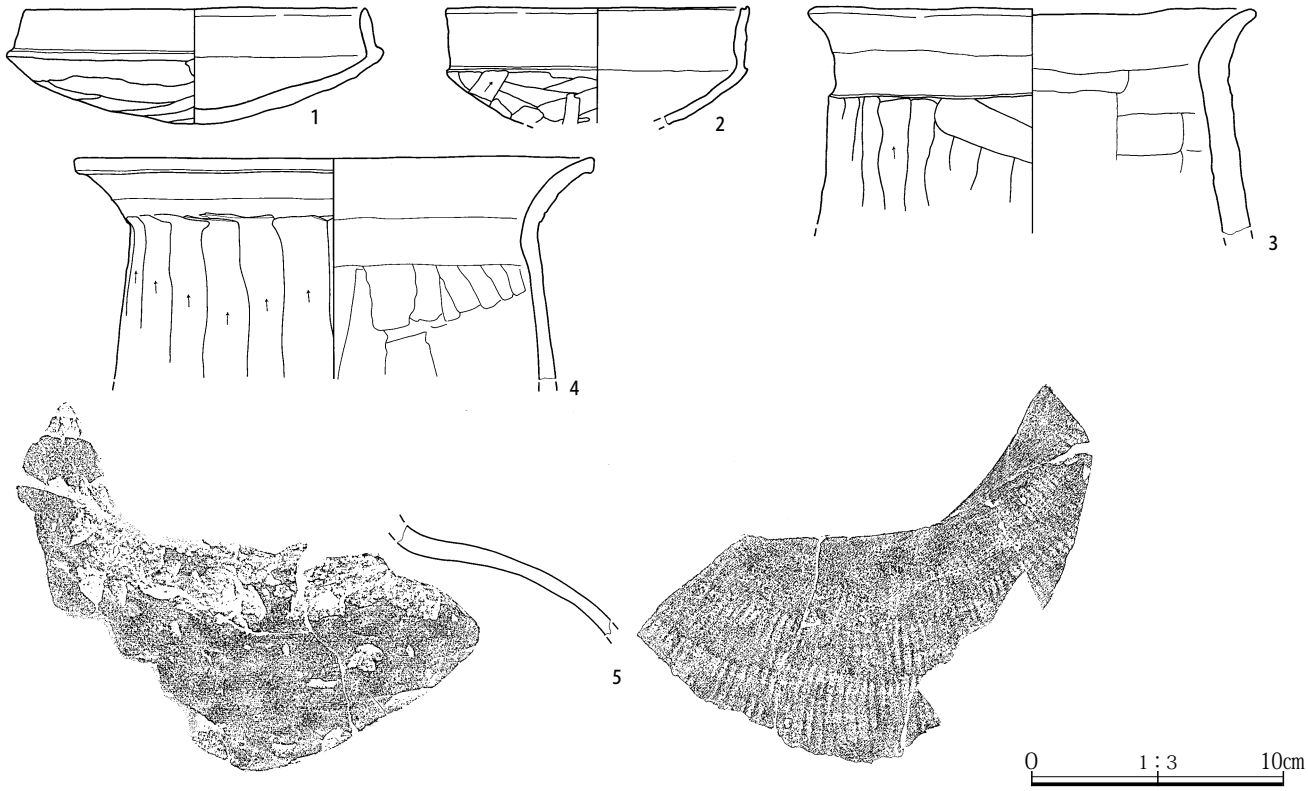
重複遺構：北西部において３号住居と重複、北側にて５号住居と重複する。いずれも調査区壁断面の埋土の様相より、本住居跡の方が古いものと判断される。また、南コーナー部付近にて３号井戸と重複し、遺構検出時の埋土の様相より本住居跡の方が古いものと判断される。

所見：出土遺物より、住居の年代は６世紀中～後半と推定される。

４号住居



Ａ－Ａ′
１．暗褐色土　わずかにローム粒含む。
２．くすんだ褐色土　ローム大ブロックを多量に含む。
３．暗黄褐色土　ローム土にロームブロック含む。
４．暗褐色土　焼土粒　炭粒含む　ローム粒わずかに含む。



第13図　４号住居遺構図・遺物図

第５表　４号住居遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第13図 PL.19	1	土師器 杯	+3 4/5	口	13.3	高	4.5	細砂粒・赤色粘土粒/良好/にぶい橙	須恵器の杯身模倣。口唇部は内面に弱い稜。口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は横撫で。	器面は内外面とも炭素吸着黒色。
第13図	2	土師器 杯	+5 1/4	口	11.8			細砂粒・白色鉱物粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。底部外面はヘラ削り。内面は撫で。	
第13図 PL.19	3	土師器 甕	+5 口縁~胴上位	口	17.1			粗砂粒・細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は縦･斜横の撫でに近いヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	器面の一部に炭素吸着。
第13図	4	土師器 甕	+2 口縁~胴上位片	口	20.2			小礫・粗砂粒・細砂粒多量/良好/橙	口縁部は２回に分けて横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り、内面は斜横のヘラ撫で、一部に撫で。	
第13図	5	須恵器 甕	+5 肩部片					白色鉱物粒/還元焔/褐灰	頸部直下の部分、紐づくり。叩き整形。外面は平行叩き痕の上に撫で、内面は撫で。	

５号住居

位置：Ｘ＝33,315　Ｙ＝－49,958付近

規模・形状：調査区のほぼ中央に位置し、南コーナー部付近から南西壁の一部と北東壁の一部が検出された。推定規模は一辺が４ｍほどの隅丸方形ないし隅丸長方形状を呈するものと推察される。

主軸方位：Ｎ－62°－Ｗ

遺存状態：後世の削平や重複遺構による攪乱を受け、遺存状態は悪い。残存深度は確認面より床面まで28cm程を測る。

埋土：暗褐色土を主体とした砂質土で、堆積に乱れはなく、自然埋没の様相を呈する。

床面：掘削面の地山土を床面とし、中央部はやや硬化する。北東壁下に、幅15～20cm、深度21～23cmを測る壁溝が巡る。

柱穴等：調査範囲内には柱穴は検出されず、南コーナー部付近にて35×49cm、深さ17cmを測る楕円形の屋内土坑が検出される。

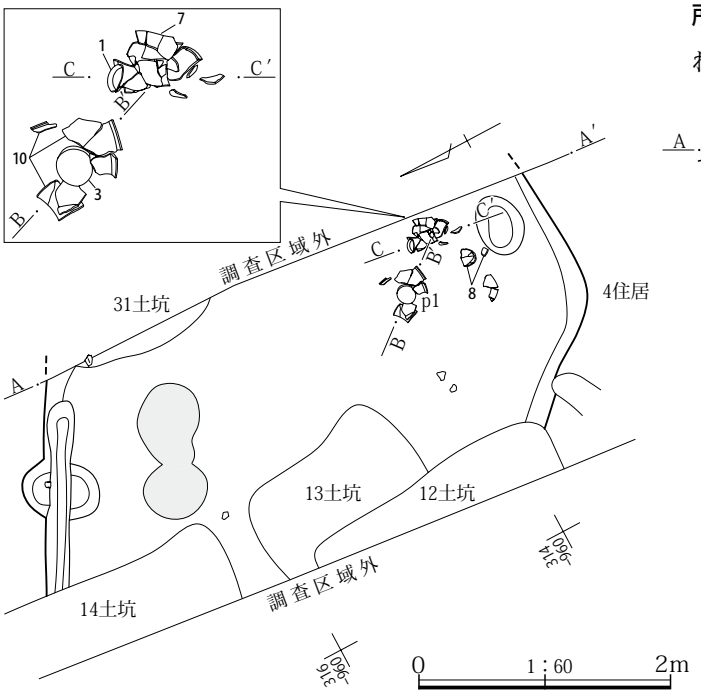
カマド：調査範囲内においては検出されていない。

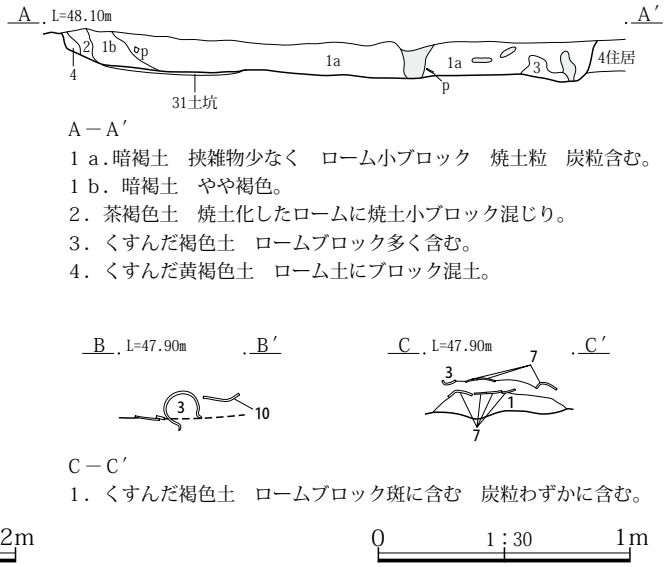
掘り方：住居中央部から南コーナー部にかけて径33～136cmを測る土坑状の掘り込みを有する。特に内１穴は深度110cmを測り、底面付近複数個体の遺物が出土する。

出土遺物：出土する遺物は比較的多く、土師器杯(第15図２)・土師器小型甕(同図４・５・６)・土師器甕(第16図９)が前記の床下土坑内より出土する他、土師器杯(第15図１)・土師器小型甕(同図３)・土師器甕(第16図７・第15図８)・土師器甑(第16図10)などが出土する。

重複遺構：北西部おいて12・13・14号土坑と重複し、遺構検出時の埋土の様相や調査区壁断面の埋土の様相より、本住居跡の方が古いものと判断される。

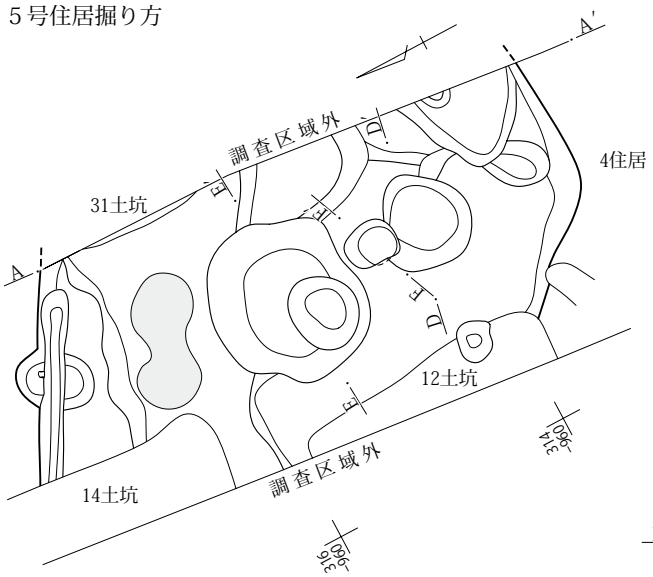
所見：出土遺物より、住居の年代は６世紀後半と推定される。

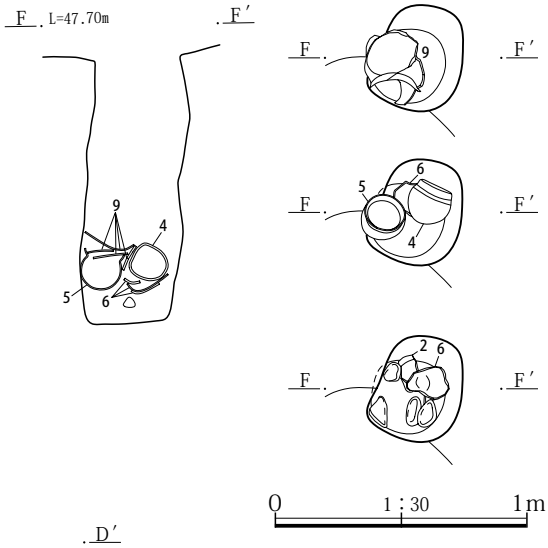


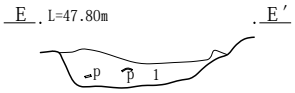


第14図　５号住居遺構図(１)

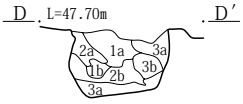
５号住居掘り方





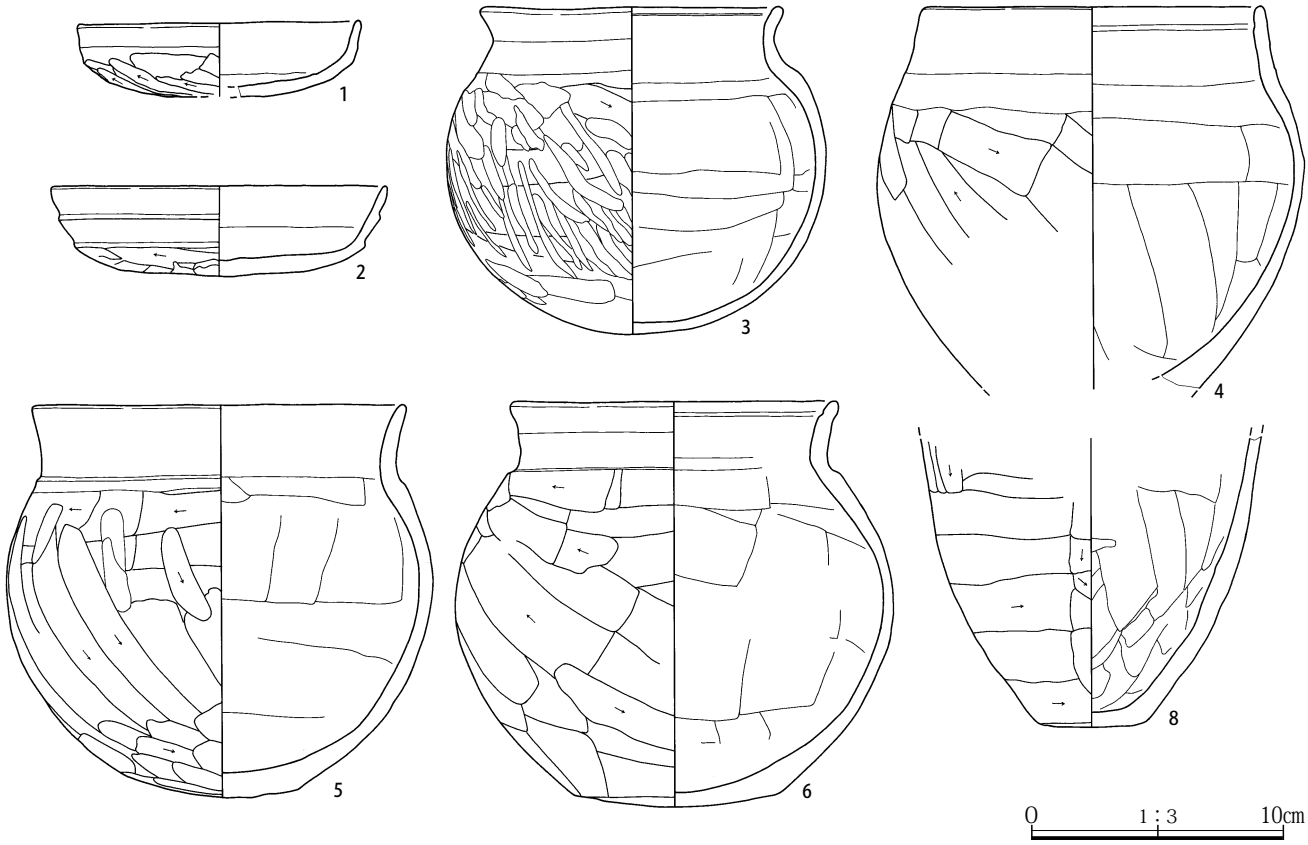


E－E′
1．明オリーブ褐色土　くすんだローム　砂質
　　ロームブロック混土。

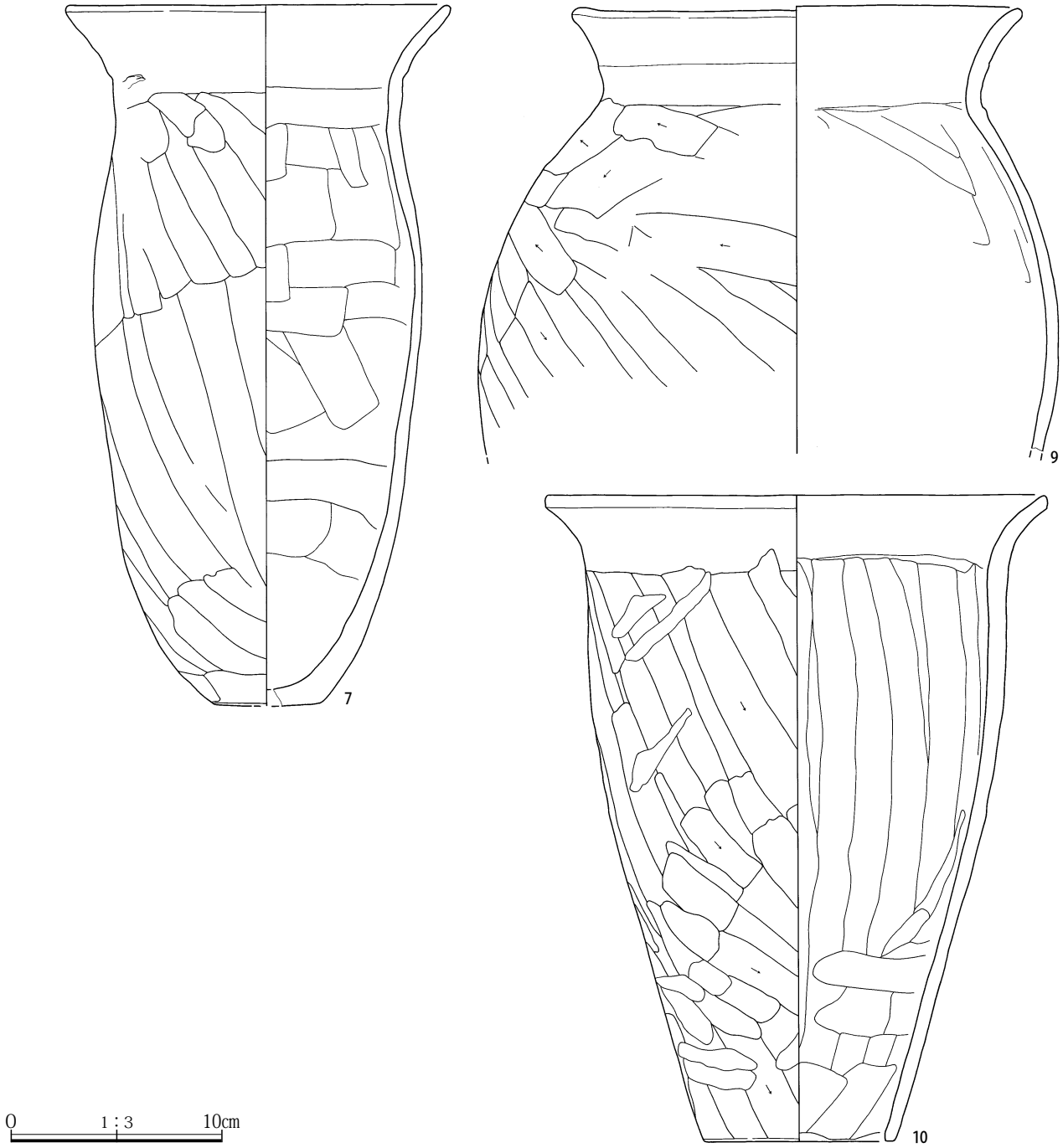


D－D′
1a. 暗褐色土　焼土粒　ローム粒を多く含む。
1b. 褐色土　１層にローム土　焼土粒　炭粒混じり。
2a. 暗茶褐色土　焼土粒　ローム粒を多く含む　焼土化したローム主体。
2b. 暗茶褐色土　焼土化したローム土にローム小ブロック多量に含む。
3a. 灰黄色土　砂質ローム土主体　ロームブロック含む。
3b. 灰黄色土　ロームブロック多量に含む　焼土粒含む。

0　1：60　2m



第15図　５号住居遺物図（２）・遺物図（１）



第16図　５号住居遺物図（２）

第６表　５号住居遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第15図 PL.19	1	土師器 杯	+13 1/3	口	11.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部はヘラ削り。間にわずかに撫での部分を残す。内面は撫で。	
第15図	2	土師器 杯	-101 1/4	口	13.0	高	3.5	細砂粒/やや不良/にぶい赤褐	有段口縁。口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。底部中央にヘラ状工具の当たった痕跡を残す。	内外面炭素吸着・黒色味おびる。
第15図 PL.19	3	土師器 小型甕	-101 完形	口	11.4	高	12.9	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は２回に分けて強い横撫で。胴部外面はヘラ削り後、全面に撫でを重ねる。上位・下位はやや幅広、中位は磨きに近いもの。	外面炭素吸着・下位に煤付着。
第15図 PL.19	4	土師器 小型甕	+7 底部欠	口	13.1			細砂粒・白色鉱物粒・黒色鉱物粒/良好/にぶい橙	口縁部は２回に分けて横撫で。胴部外面上位は斜横、中位は斜めのヘラ削り、内面の上位は横、中位以下は斜縦のヘラ撫で。	外面炭素吸着・中位以下に磨滅顕著。
第15図 PL.19	5	土師器 小型甕	+6 完形	口 底	14.4 5.5	高	15.4	細砂粒・白色軽石・黒色鉱物粒/良好/にぶい黄褐	口縁部は横撫で。胴部外面上位は横、中位は斜縦、下位は斜横のヘラ削り、一部に撫でを重ねる、内面は横のヘラ撫で。底部はヘラ削り。	胴部外面下位に炭素吸着・黒斑状、全面やや磨滅。

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第15図 PL.20	6	土師器 小型甕	-86 1/3	口 底	12.6 8.0	高	15.9	粗砂粒・細砂粒・白色軽石/良好/にぶい赤褐	口縁部は２回に分けて強い横撫で。胴部外面最上位は横、これより下位は斜横のヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。底部はヘラ削り。	外面上半部を中心に炭素吸着･黒班状。全面やや磨滅。
第16図 PL.20	7	土師器 甕	-4 3/4	口	17.9			細砂粒・黒色鉱物粒・白色軽石粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。胴部外面は上位･中位は斜縦、下位は斜横のヘラ削り。内面は横･斜縦のヘラ撫で。接合痕をヘラ削り。底部はヘラ削り。	胴部外面2ヶ所に黒班状の炭素吸着･全面が被熱による変質。やや磨滅。
第15図	8	土師器 甕	-95 胴部下位~底部 1/2	底	4.2			細砂粒・白色鉱物粒/良好/褐灰	胴部外面中位は縦、下位は横のヘラ削り、内面はヘラ撫で。底部はヘラ削り。	外面炭素吸着･被熱のため磨滅･脆弱になっている。
第16図 PL.19	9	土師器 甕	-92 口縁~胴中位 3/4	口	20.7			細砂粒・白色軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は上位と中位でやや方向の異なる斜横のヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	
第16図 PL.20	10	土師器 甑	+2 2/3	口	23.4	高	30.4	細砂粒・白色鉱物粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。胴部外面は上位から中位は斜縦、下位は斜、最下位は斜縦のヘラ削り、一部に撫でを重ねる、内面は下位の一部に横･他は縦のヘラ撫で、下端部間近にヘラ削り。	内外面の下位に炭素吸着。

６号住居

位置：Ｘ＝33,330　Ｙ＝－49,957付近

規模・形状：調査区の中央やや北寄りに位置し、カマド部から東コーナー部が検出された。

主軸方位：Ｎ－50°－Ｅ

遺存状態：後世の削平を受け、残存深度は確認面より床面まで15cm程を測る。

埋土：暗褐色土を主体とした砂質土で、堆積に乱れはなく、自然埋没の様相を呈する。

床面：掘削面の地山土を床面とする。

柱穴等：調査範囲内には柱穴・貯蔵穴は検出ていない。

カマド：北東壁側に位置するが、燃焼部は調査区外に在り、煙道端も重複遺構により欠失しているため、全容は明らかではない。

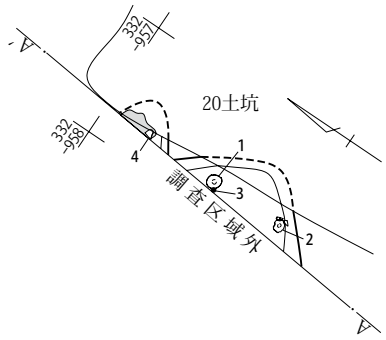
掘り方：なし。

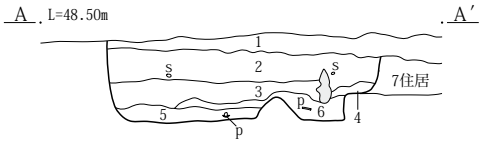
出土遺物：出土する遺物は少なく、「東」の線刻を内面底部にもつ須恵器杯(第18図１)、須恵器杯(同図２)、土師器小型甕(同図３)、須恵器甕(同図４)などが出土する。

重複遺構：東部において20号土坑と重複しカマド煙道部および東コーナー部を失う。また、東側にて７号住居と重複し、調査区壁断面の埋土の様相より本住居跡の方が新しいものと判断される。

所見：出土遺物より、住居の年代は９世紀後半～10世紀初頭と推定される。

６号住居



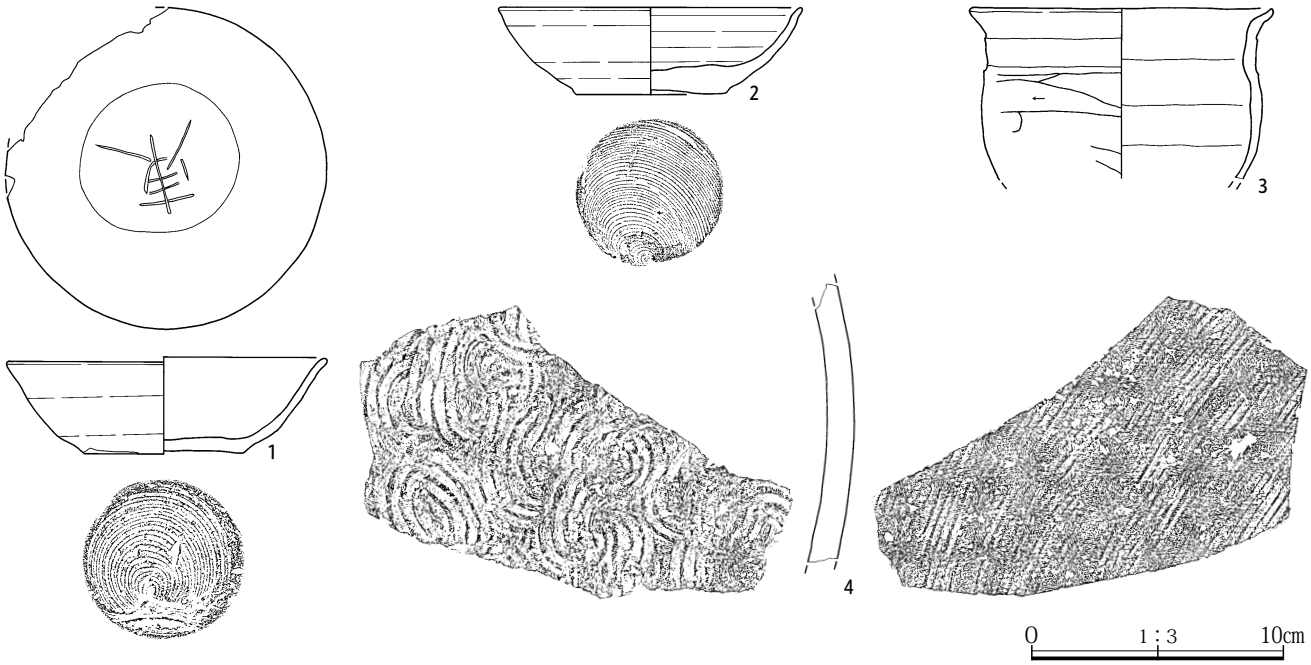


Ａ－Ａ′

１．茶褐色土　旧表土　砂質　細砂　互層に入る。
２．暗褐色土　焼土粒　炭粒　ローム小ブロック含む。
３．暗褐色土　２層よりローム小ブロック少ない。
４．暗褐色土　ロームブロックをやや多く含む　粘性あり(貼床？)。
５．暗褐色土　ローム小ブロックわずかに含む　焼土　炭粒含む。
６．くすんだ赤褐色土　焼土化したロームにローム小ブロック　焼土粒含む　土器片含む。

0　1：60　2m

第17図　６号住居遺構図



第18図　６号住居遺物図

第７表　６号住居遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第18図 PL.20	1	須恵器 杯	+3 口縁一部欠	口 底	12.4 6.3	高	3.8	粗砂粒・細砂粒・長石/還元焔、やや軟質/灰	ロクロ整形(右回転)底部回転糸切り後、無調整。底部内面にヘラによる「東」の刻書。	口縁部上半に炭素吸着。
第18図 PL.20	2	須恵器 杯	+3 1/2	口 底	11.8 6.0	高	3.4	赤黒色粘土粒少量/還元焔、やや軟質/灰	ロクロ整形(右回転)底部回転糸切り後、無調整。	内面磨耗・器面の一部炭素吸着
第18図	3	土師器 小型甕	+4 口縁~胴部片	口	11.8			細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は２回に分けて横撫で。胴部外面は横のヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	
第18図	4	須恵器 甕	+1 胴部片					白色鉱物粒多量/還元焔/灰	紐づくり。叩き整形。外面は平行叩き痕、内面は同心円状当て具痕が残る。	

７号住居

位置：Ｘ＝33,331　Ｙ＝－49,957付近

規模・形状：調査区の中央やや北寄りに位置し、北東コーナー部付近から北壁・東壁の一部と南壁の一部が検出された。推定規模は一辺が３×４ｍほどの隅丸長方形状を呈するものと推察される。

主軸方位：Ｎ－72°－Ｅ

遺存状態：後世の削平や重複遺構による攪乱を受け、遺存状態は悪い。残存深度は確認面より床面まで10cm程を測る。

埋土：褐色土を主体とした砂質土で、自然埋没の様相を呈する。

床面：掘削面の地山土を床面とする。床面の大半が重複遺構により欠失しているため、硬化の度合いは明らかではない。検出壁下には壁溝がみられない。

柱穴等：調査範囲内での柱穴は、南西側に１穴のみ検出され、径43cm、深度６cmを測る。また、南東コーナー部付近にて巾80cm、深さ55cmを測る土坑が検出されるが攪乱を受け、その形状等は明らかではない。

カマド：調査範囲内においては検出されていない。調査区外の東壁中央やや南寄りに存在が推察される。

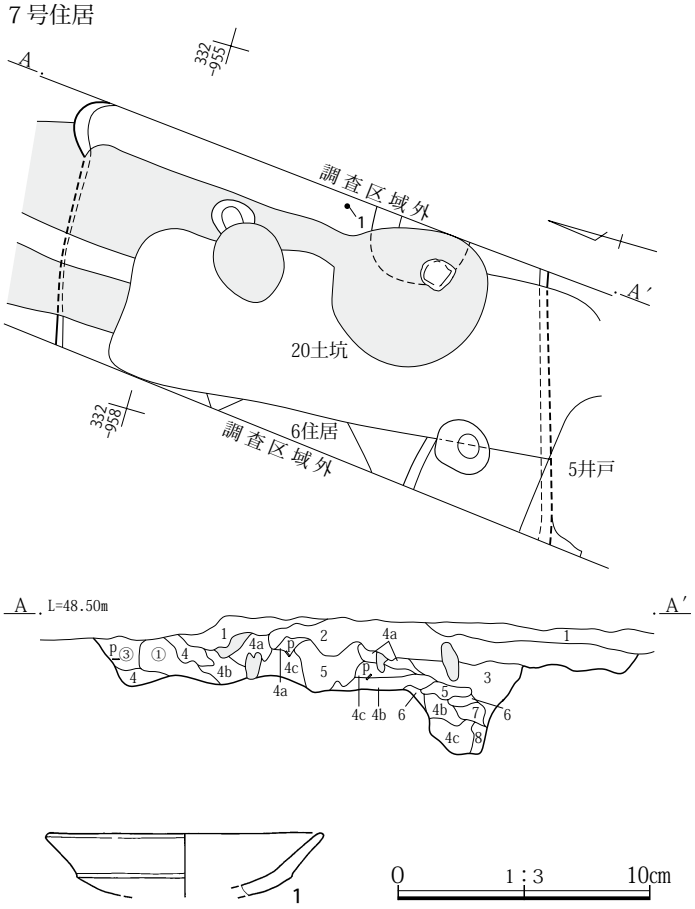
掘り方：なし。

出土遺物：出土遺物は少なく、土師器杯(第19図１)がカマド付近より出土する他、埋土中や掘り方埋土内よりわずかに土師器・須恵器小片が出土するのみである。

重複遺構：６号住居、20・21号土坑、５号井戸と重複し、遺構検出時の埋土の様相や調査区壁断面の埋土の様相より、いずれの遺構より本住居跡の方が古いものと判断される。

所見：出土遺物より、住居の年代は７世紀前半と推定される。

７号住居



A－A′
1．褐色土　土質均質　わずかにローム粒　炭粒含む。
2．暗褐色土　黒味強い　１層に土質似る。
3．褐色土　ローム　焼土　炭粒含む　しまり弱い。
4．暗黄褐色土　ローム土にロームブロック　褐色ブロック混土。
4a．褐色土　土質均質　焼土粒　ローム粒わすかに含む　ややしまり弱い　粘性あり。
4b．褐色土　４a層にローム小ブロック　焼土小ブロック混土。
4c．褐色土　ローム土　焼土粒　灰白色粘土粒含む　粘性強い。
5．暗黄褐色土　ローム　焼土粒　混じり　炭化物多く含む。
6．褐灰黄褐色　ローム土　焼土粒含む。
7．褐灰黄褐色　しまり弱い。
8．黄褐色土　ロームブロック主体　焼土粒含む。
①．褐色土　１の層に似る。
③．暗褐色土　わずかにローム粒　炭粒含む　土器片含む。

0　1：60　2m

第19図　７号住居遺構図・遺物図

第８表　７号住居遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19図	1	土師器 杯	+9 破片	口	10.7			粉っぽい胎土・細砂粒/良好/橙	小破片のため形状不確定、作図よりも器高を有するか。口縁部は横撫で。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられる。	器面割れ口とも磨滅。

８号住居

位置：Ｘ＝33,335　Ｙ＝－49,956付近

規模・形状：調査区の中央やや北寄りに位置し、北東および南東壁の一部が検出された。検出・残存部分が少なく、形状や規模の全容の推定は難しい。

主軸方位：Ｎ－36°－Ｅ

遺存状態：後世の削平を受け、残存深度は確認面より床面まで17cm程を測る。

埋土：褐色～暗褐色土を主体とした砂質土で、自然埋没の様相を呈する。

床面：掘削面の地山土を床面とし、硬化する。

柱穴等：調査区東壁に接し柱穴が一穴検出され、径26cm、深度34cmほどを測る。また、南東壁に接し屋内土坑が検出され、75×85cm、深度13cmを測る隅丸方形状を呈する。

カマド：調査範囲内においては検出されていない。床面に焼土の散乱がみられることから、調査区外の北東壁の東コーナー寄りに存在が推察される。

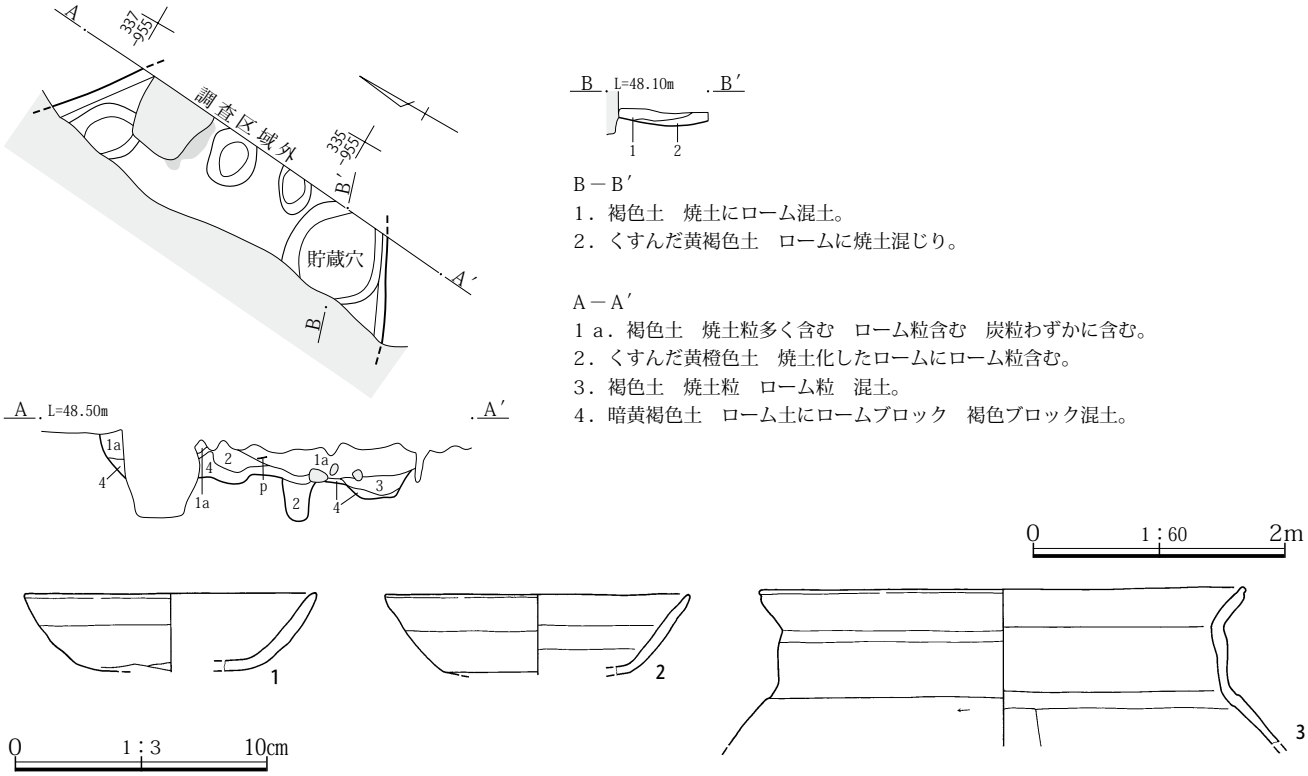
掘り方：なし。

出土遺物：出土する遺物は少なく、土師器杯(第20図１・２)、土師器甕(同図３)が貯蔵穴付近より出土する他、埋土中や掘り方埋土内よりわずかに土師器・須恵器小片が出土するのみである。

重複遺構：なし。

所見：出土遺物より、住居の年代は８世紀後半と推定される。

８号住居



B－B′
１．褐色土　焼土にローム混土。
２．くすんだ黄褐色土　ロームに焼土混じり。

A－A′
１ａ．褐色土　焼土粒多く含む　ローム粒含む　炭粒わずかに含む。
２．くすんだ黄橙色土　焼土化したロームにローム粒含む。
３．褐色土　焼土粒　ローム粒　混土。
４．暗黄褐色土　ローム土にロームブロック　褐色ブロック混土。

第20図　８号住居遺構図・遺物図

第９表　８号住居遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第20図	1	土師器 杯	貯蔵穴埋土 口縁部片	口	11.3			細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は撫で。底部は手持ちヘラ削り、内面は撫で。	器面炭素吸着のためか変色・直径大きくなる可能性あり。
第20図	2	土師器 杯	貯蔵穴埋土 破片	口	11.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。体部外面は撫でを施すが器面に型肌の痕跡を残す。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	体部外面に炭素吸着。
第20図	3	土師器 甕	貯蔵穴埋土 口縁片	口	19.0			細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で、下半部には撫で、指頭圧痕の痕跡をわずかに残す。胴部外面はヘラ削り、内面はヘラ撫で。	

９号住居

位置：Ｘ＝33,376　Ｙ＝－49,953付近

規模・形状：調査区の北端部に位置し、南壁の一部が検出された。検出・残存部分が少なく、形状や規模の全容の推定は難しい。

主軸方位：Ｎ－88°－Ｅ

遺存状態：後世の削平や重複遺構による攪乱を受け、遺存状態は悪い。残存深度は確認面より床面まで１㎝程を測る。

埋土：暗褐色土を主体とした砂質土で、堆積に乱れはなく、自然埋没の様相を呈する。

床面：掘削面の地山土を床面とし、やや硬化する。

柱穴等：調査範囲内では柱穴等は検出されていない。

カマド：調査範囲内においては検出されていない。

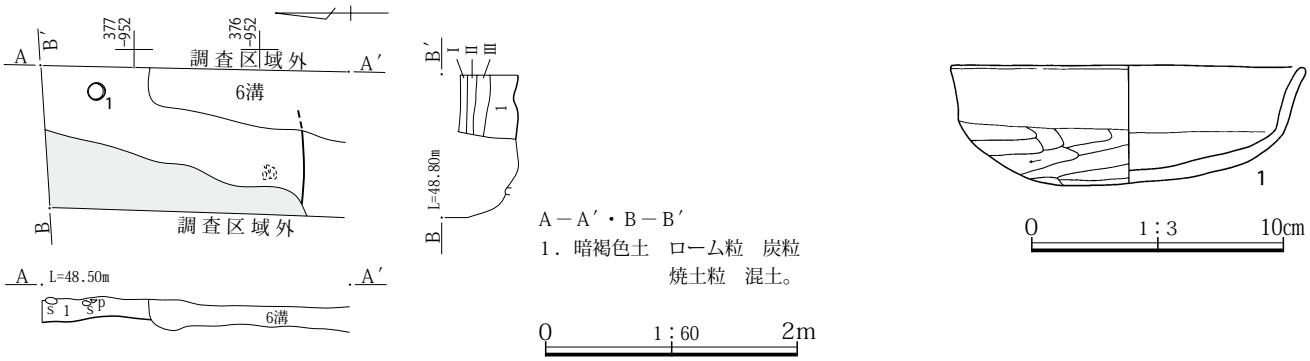
掘り方：なし。

出土遺物：出土する遺物は極めて少なく、土師器杯(第21図１)が出土する他、埋土中や掘り方埋土内よりわずかに土師器・須恵器小片が出土するのみである。

重複遺構：南東部おいて６号溝と重複し、遺構検出時の埋土の様相や調査区壁断面の埋土の様相より本住居跡の方が古いものと判断される。

所見：出土遺物より、住居の年代は６世紀後半～７世紀初頭と推定される。

９号住居



第21図　９号住居遺構図・遺物図

第10表　９号住居遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第21図 PL.20	1	土師器 杯	床面直上 完形	口	13.8	高	4.7	細砂粒・輝石と考えられる黒色鉱物粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内面炭素吸着。

第11表　住居一覧表

遺構番号	位置	形状	規模(m)	面積(㎡)	周溝(cm)	主軸方位	貯蔵穴(cm)	カマド・炉(cm)	重複遺構
1	X=33,284 Y=-49,962	方形ないし長方形	長(1.35) 短(3.20) 深0.35	2.3	25	N-62°-E	長100 幅95 深55	長135 幅100 深23	小ピット
2	X=33,297 Y=-49,960	方形	長4.80 短2.78 深0.19	12.1	18～30	N-８°-E	－	－	２号溝
3	X=33,307 Y=-49,960	隅丸長方形	長(1.73) 短(3.95) 深0.21	3.0	20～33	N-89°-E	長72 幅45 深6	長(73) 幅60 深7	４号住居 １号墓坑 ２・３号井戸
4	X=33,311 Y=-49,959	方形	長(7.00) 短(2.50) 深0.15	11.7	－	N-55°-E	－	－	３号住居 ５号住居 ３号井戸
5	X=33,315 Y=-49,958	隅丸方形 ないし長方形	長(4.00) 短(2.05) 深0.28	9.3	25	N-62°-W	－	－	４号住居 12～14号土坑
6	X=33,330 Y=-49,957	不明	長(0.28) 短(1.68) 深(0.15)	0.4	－	N-50°-E	－	長(28) 幅(40) 深(9)	７号住居 20号土坑
7	X=33,331 Y=-49,957	隅丸長方形	長3.86 短(1.96) 深(0.10)	7.3	－	N-72°-E	長80 幅(48) 深55	－	６号住居 20・21号土坑 ５号井戸
8	X=33,335 Y=-49,956	不明	長(2.90) 短(0.85) 深(0.17)	1.9	－	N-36°-E	長85 幅(75) 深13	－	－
9	X=33,376 Y=-49,953	不明	長(2.03) 短(1.05) 深(0.00)	1.1	－	N-88°-E	－	－	６号溝

第２節　井戸

１号井戸

位置：Ｘ＝33,285　Ｙ＝－49,961付近

規模・形状：調査区南半部に位置し、平面形状は径43cm～70cmを測る円形状を呈し、断面形状は筒形を呈する。

遺存状態：残存深度は90cmを測り、大きな崩落もなく原形を留める。

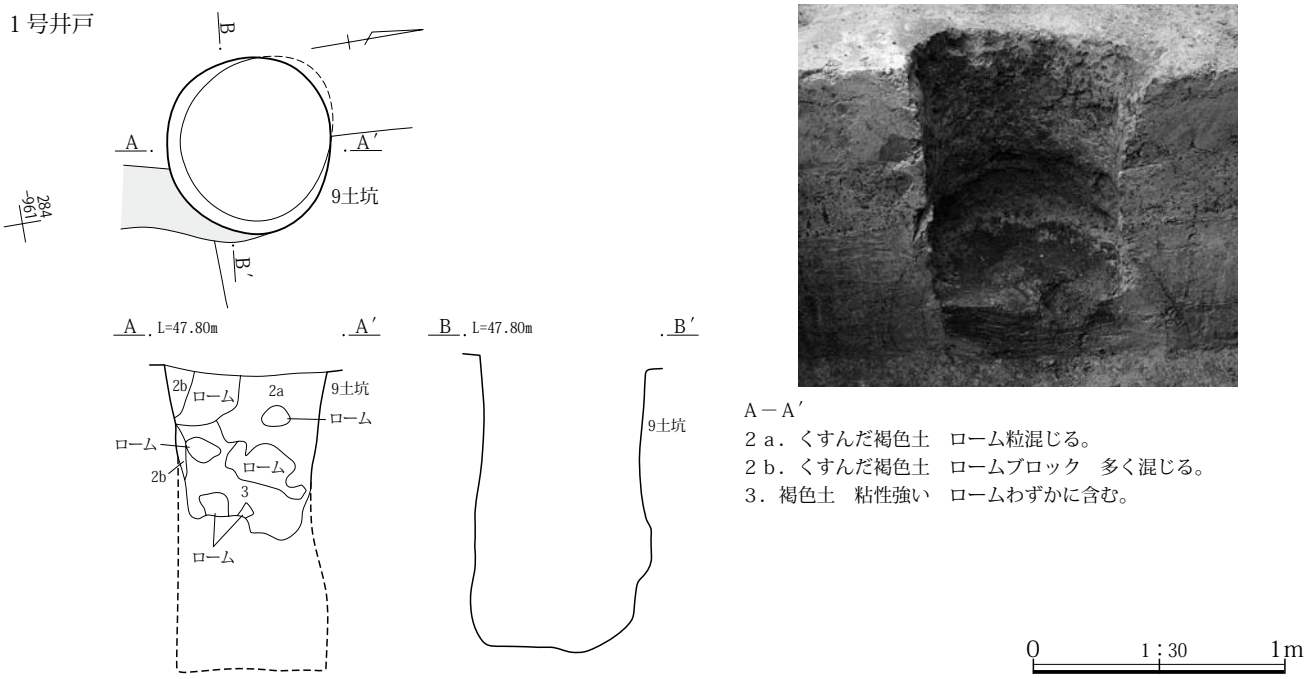
埋土：下層は褐色土による自然埋没の様相を呈するが、上層のみ多量のロームブロックを含むくすんだ褐色土堆積しこの部分は人為的に埋め戻された可能性が高い。儀式的な井戸埋めの痕跡などは認められない。

湧水層：底面より40cmほどの砂質シルト層に壁面の抉れが確認され、この部分が主な湧水層と推察される。

出土遺物：なし。

重複遺構：９号土坑と重複し、遺構検出時の様相より、本井戸の方が新しいものと判断される。

所見：木枠や礫を組んだ痕跡は認められず、埋土中よりの礫・木材の出土もないことから、石組みや木枠を持たない素掘りの井戸であったと考えられる。遺構の年代は出土遺物が少なく根拠に乏しいものの、中・近世の遺構と推定される。



第22図　１号井戸遺構図

２号井戸

位置：Ｘ＝33,307　Ｙ＝－49,960付近

規模・形状：調査区中央やや南寄りに位置し、調査区西壁に接して検出されたため、その全容は明らかではないが、平面形状は径81cm～109cmを測る円形状を呈し、断面は深度140cmを測る筒形を呈するものと推察される。

遺存状態：大きな崩落もなく原形を留める。

埋土：暗褐色土による自然埋没の様相を呈し、儀式的な井戸埋めの痕跡などは認められない。

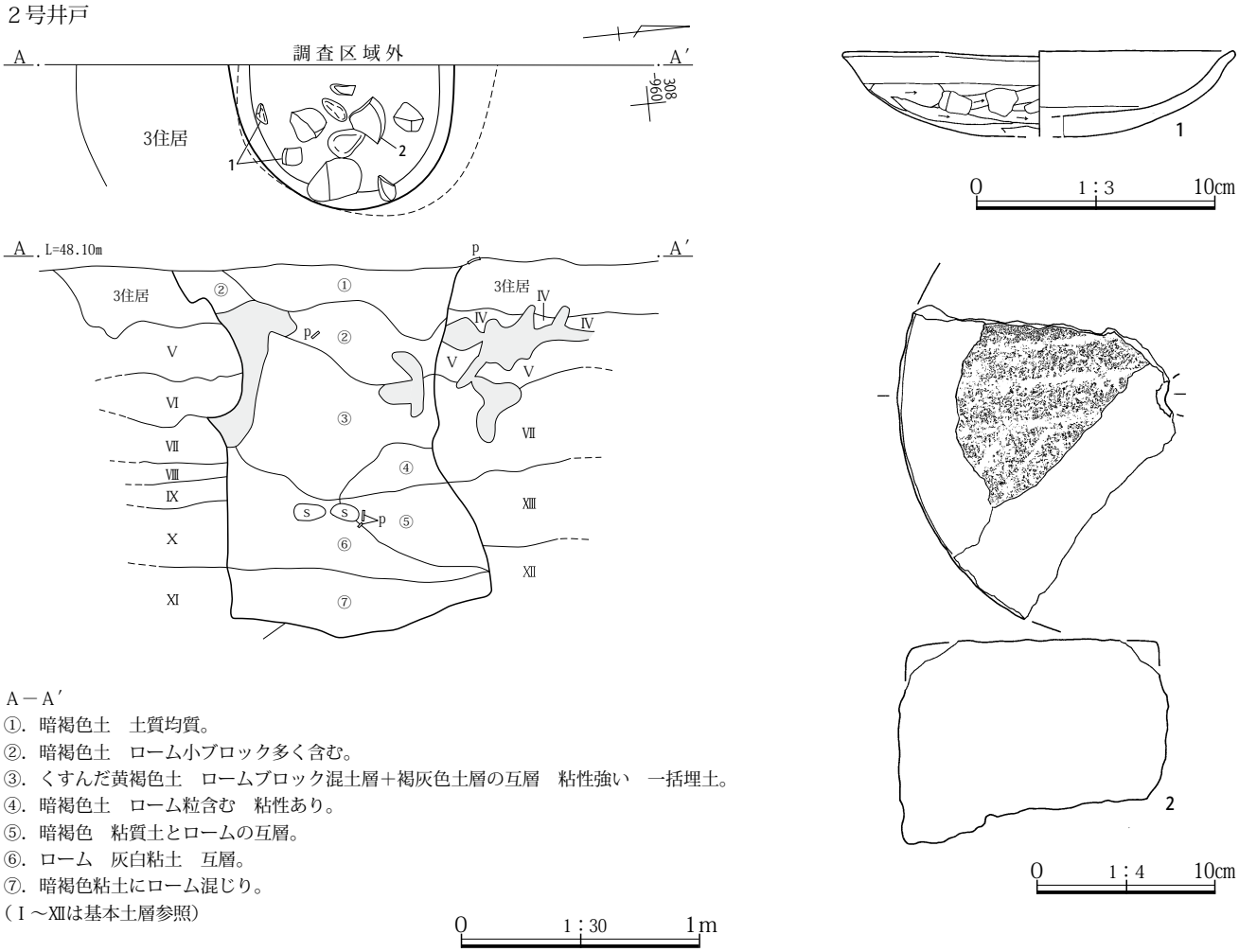
湧水層：底面付近の砂層・粘土層に壁面の抉れが確認され、この部分が主な湧水層と推察される。

出土遺物：出土する遺物は極めて少なく、土師器皿(第23図１)、石臼下臼片(同図２)が底面付近より出土するのみである。

重複遺構：３号住居と重複し、遺構検出時の様相より、本井戸の方が新しいものと判断される。

所見：木枠や礫を組んだ痕跡は認められず、埋土中よりの礫・木材の出土もないことから、石組みや木枠を持たない素掘りの井戸であったと考えられる。遺構の年代は出土遺物の年代から、中・近世の遺構と推定される。

２号井戸



Ａ－Ａ′
①．暗褐色土　土質均質。
②．暗褐色土　ローム小ブロック多く含む。
③．くすんだ黄褐色土　ロームブロック混土層＋褐灰色土層の互層　粘性強い　一括埋土。
④．暗褐色土　ローム粒含む　粘性あり。
⑤．暗褐色　粘質土とロームの互層。
⑥．ローム　灰白粘土　互層。
⑦．暗褐色粘土にローム混じり。
（Ⅰ～Ⅻは基本土層参照）

0　1：30　1m

第23図　２号井戸遺構図・遺物図

第12表　２号井戸遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第23図 PL.20	1	土師器 杯	+93 1/2	口	16.2			細砂粒・黒色鉱物粒・赤黒色粘土粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りの上に一部撫で。	器面やや磨滅。
第23図 PL.20	2	石製品 下臼	+57 1/8	径 高	28.0 11.4	重	3025.9	粗粒輝石安山岩	摺面に刻まれた挽目は激しく摩耗して、限界に近い。体部に粗いノミ跡を残す。	下臼

３号井戸

位置：Ｘ＝33,308　Ｙ＝－49,957付近

規模・形状：調査区中央やや南寄りに位置し、調査区東壁に接して検出されたため全容は明らかではないが、平面形状は径80～141cmほどを測る円形状を呈するものと思われ、深度は136cmを測り、筒形を呈する。

遺存状態：大きな崩落もなく、原形を留める。

埋土：暗褐色から褐灰色土による自然埋没の様相を呈し、儀式的な井戸埋めの痕跡などは認められない。

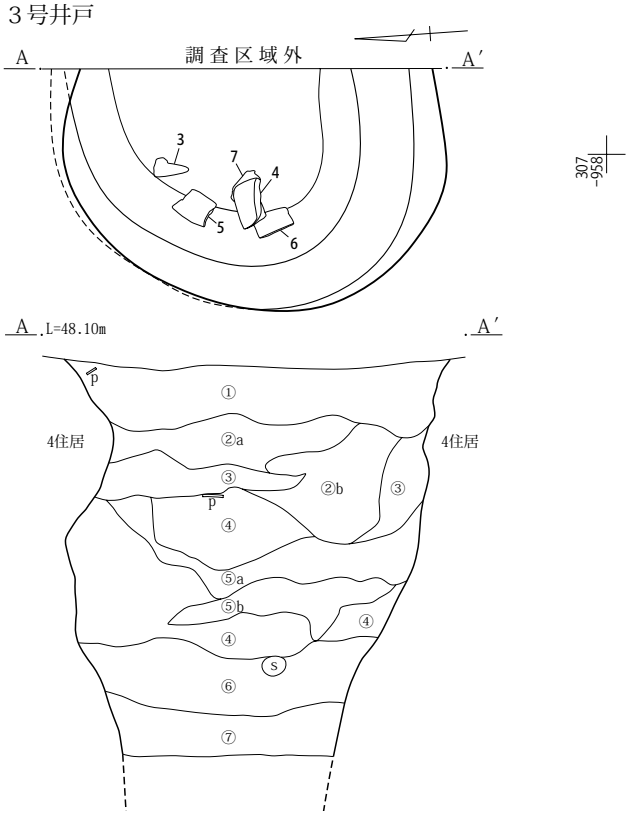
湧水層：確認面より100cmほどの砂質シルト層に壁面の抉れが確認され、この部分が主な湧水層と推察される。

出土遺物：在地系土器（第24図１・２・３）、石臼上臼片（同図４）、板状木製品（同図５・６・７・８）が出土する。

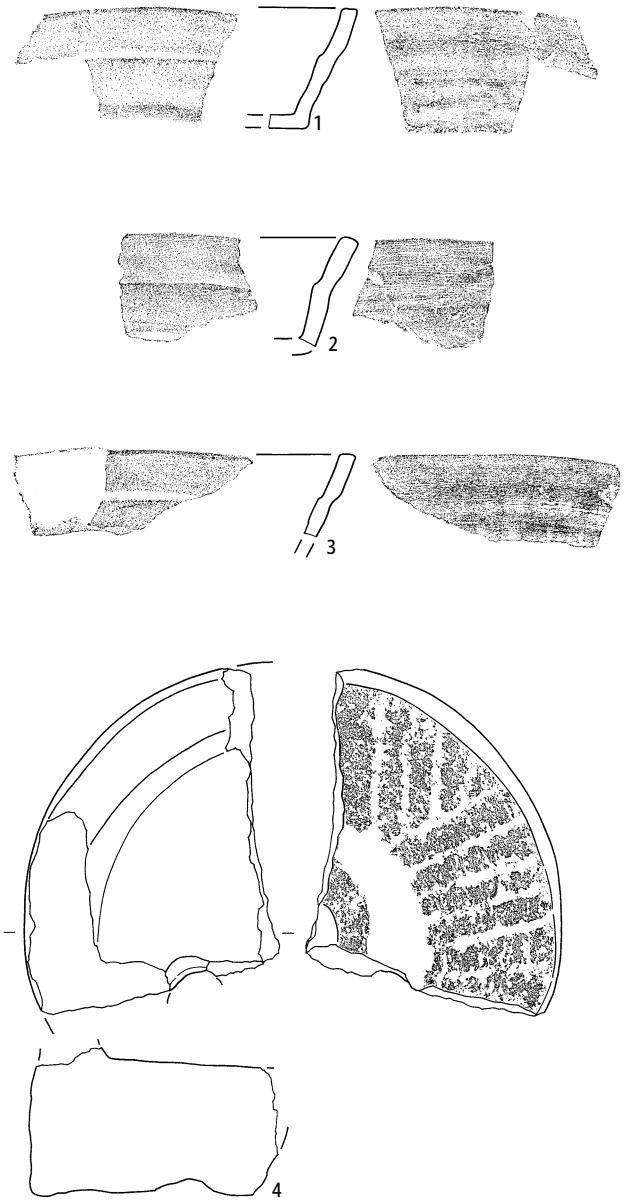
重複遺構：４号住居と重複し、遺構検出時の様相より、本井戸の方が新しいものと判断される。

所見：木枠や礫を組んだ痕跡は認められず、埋土中よりの礫・木材の出土もないことから、石組みや木枠を持たない素掘りの井戸であったと考えられる。遺構の年代は出土遺物が少なく根拠に乏しいものの、中・近世の遺構と推定される。

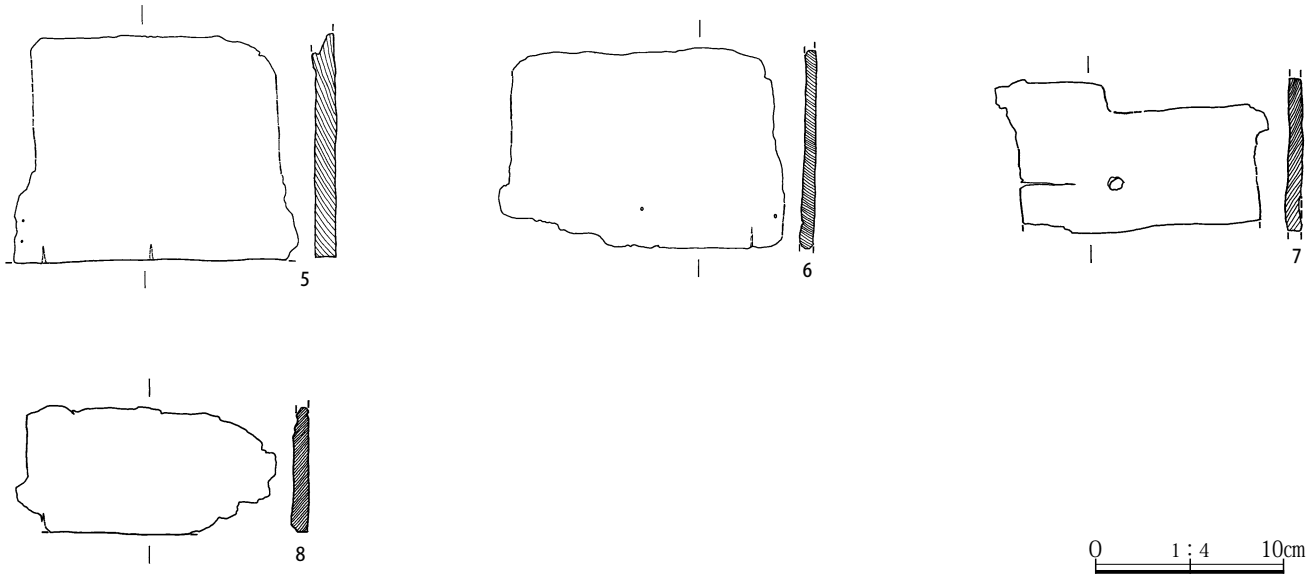
３号井戸



A－A′
①．暗褐色土　ローム粒　炭粒わずかに含む　Ⅱ層に似る。
②a．褐灰色土　ローム大ブロックを含む。
②b．褐灰色土　ロームブロック多く含む。
③．暗褐色土　ローム小ブロックわずかに含む。
④．灰黄褐色土　灰黄褐色粒土にロームブロック混じり。
⑤a．褐灰色　粘質土。
⑤b．褐灰色　粘質土　ローム小ブロック含む。
⑥．灰黄褐色　粘質土　④層よりローム少ない。
⑦．灰黄褐色土　ロームブロック　砂質　ロームブロック　混土。



0　1：30　1m



0　1：4　10cm

第24図　３号井戸遺構図・遺物図

第13表　３号井戸遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24図 PL.21	1	在地系土器 焙烙	埋土破片	口 底		高	6.2	橙～黒	断面は灰白色、器表は橙色で部分的に黒色。器高やや高く、内面に明瞭な段を持つ。口縁端部上面は平坦。	3と同一個体か。16世紀後半～17世紀。
第24図 PL.21	2	在地系土器 焙烙	埋土破片	口 底		高		黒褐	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、器表は黒褐色。内面に明瞭な段を持つ。	17世紀か。
第24図 PL.21	3	在地系土器 焙烙	+94 破片	口 底		高		橙～黒	断面は灰白色、器表は橙色で部分的に黒色。器高やや高く、内面に明瞭な段を持つ。口縁端部上面は平坦。	1と同一個体か。16世紀後半～17世紀。
第24図 PL.21	4	石製品 上臼	+95 1/4	径 高	26.0 9.6	厚 重	0 2942.6	粗粒輝石安山岩	摺面は激しく摩耗しているが、挽目自体は比較的良好に残る。物入れ孔が部分的に痕跡を止める。	上臼
第24図 PL.21	5	木製品 板材	+34 破片	縦 横	117 148	厚 重	11 157.9		針葉樹の板材で、全体に劣化し形状は不明だが左下端に二か所と下面に二か所木釘で留めたとみられる穴がのこる。	
第24図 PL.21	6	木製品 板材	+37 破片	縦 横	104 149	厚 重	7 106.2		針葉樹の板材で、全体に劣化し形状は不明だが下方の板目面に二か所と、右よりの下側面に一か所木釘で留めたとみられる穴がのこる。	
第24図 PL.21	7	木製品 板材	+36 破片	縦 横	79 142	厚 重	859.8		針葉樹の板材で、全体に劣化し形状は不明、中央に左よりに節穴と見られる穴が有る	
第24図 PL.21	8	木製品 板材	破片	縦 横	66 133	厚 重	964.1		針葉樹の板材で、劣化・破損により全体形状は不明だが左下破損面木口端部に木釘の破片が見られる。	

４号井戸

位置：Ｘ＝33,323　Ｙ＝－49,957付近

規模・形状：調査区中央部に位置し、平面形状は直径57cm×67cmを測る円形状を呈し、断面形状は筒形を呈する。調査中も湧水が多く、底面までの掘削が難しかった。

遺存状態：残存深度は90cmを測る。大きな崩落もなく、原形を留める。

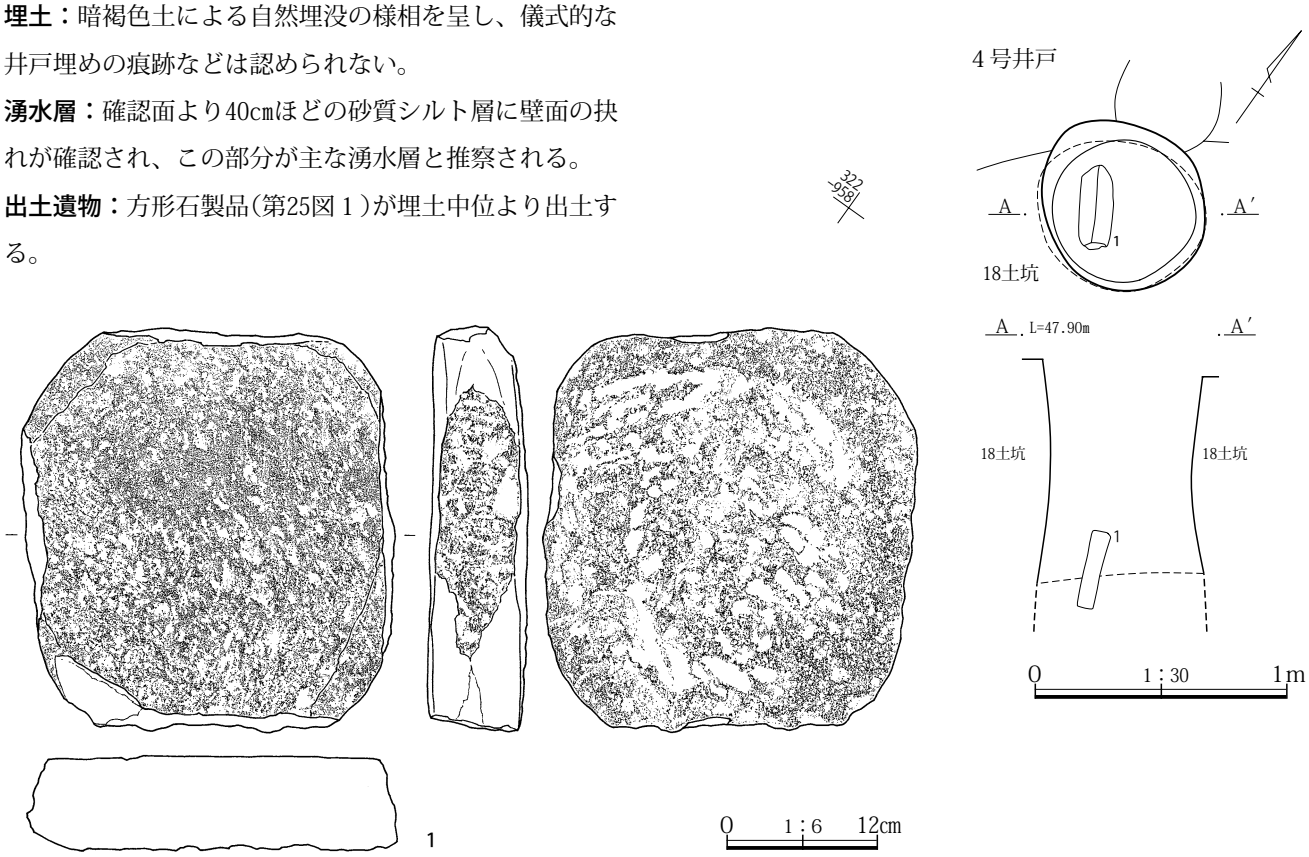
埋土：暗褐色土による自然埋没の様相を呈し、儀式的な井戸埋めの痕跡などは認められない。

湧水層：確認面より40cmほどの砂質シルト層に壁面の抉れが確認され、この部分が主な湧水層と推察される。

出土遺物：方形石製品(第25図１)が埋土中位より出土する。

重複遺構：18号土坑と重複し、遺構検出時の様相より、本井戸の方が新しいものと判断される。

所見：木枠や礫を組んだ痕跡は認められず、埋土中よりの礫・木材の出土もないことから、石組みや木枠を持たない素掘りの井戸であったと考えられる。遺構の年代は出土遺物が少なく根拠に乏しいものの、中・近世の遺構と推定される。



第25図　４号井戸遺構図・遺物図

第14表　４号井戸遺物観察表

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第25図 PL.21	1	石製品 板状	+16 略完形	長 幅	32.1 29.7	厚 重	8.1 5705.7	角閃石安山岩	表裏面・楕円礫の側縁四辺を平坦に面取り整形する。裏面側には幅3cm弱の平ノミの工具痕を残しているが、表面側平坦面は著しく摩耗する。	楕円扁平礫

５号井戸

位置：Ｘ＝33,328　Ｙ＝－49,957付近

規模・形状：調査区中央やや北寄りに位置し、平面形状は径28～118cmを測る円形状を呈し、断面形状は筒形を呈する。

遺存状態：残存深度は134cmを測る。大きな崩落もなく、原形を留める。

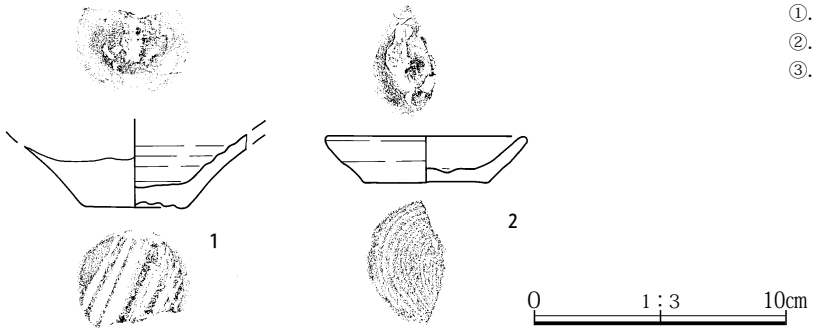
埋土：暗褐～褐灰色土による自然埋没の様相を呈し、儀式的な井戸埋めの痕跡などは認められない。

湧水層：確認面より80cmほどの砂質シルト層に壁面の抉れが確認され、この部分が主な湧水層と推察される。

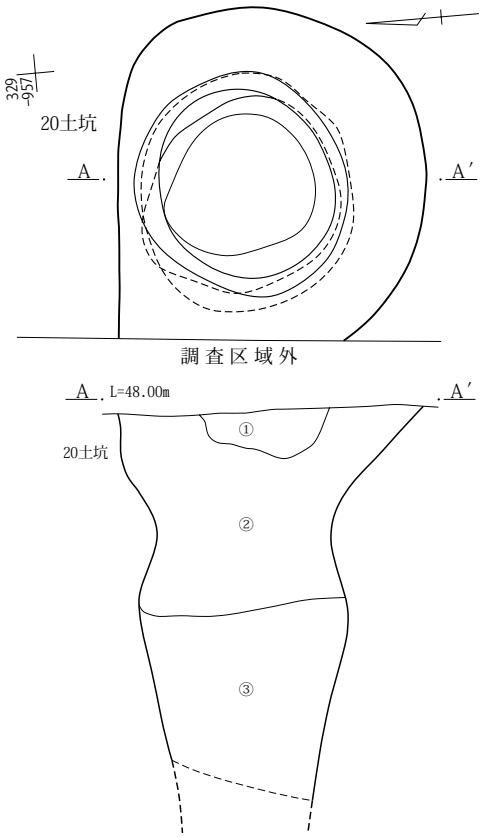
出土遺物：在地系土器片(第26図１・２)が埋土中より出土する。

重複遺構：20号土坑と重複し、遺構検出時の様相より、本井戸の方が新しいものと判断される。

所見：木枠や礫を組んだ痕跡は認められず、埋土中よりの礫・木材の出土もないことから、石組みや木枠を持たない素掘りの井戸であったと考えられる。遺構の年代は出土遺物が少なく根拠に乏しいものの、中・近世の遺構と推定される。



５号井戸



Ａ－Ａ′
①．明黄褐色土　ローム主体。
②．暗褐色土　ローム粒　小石わずかに含む。
③．褐灰色土　ローム　灰褐色　粘質土互層に堆積
　　粘性強。

0　1：30　1m

第26図　５号井戸遺構図・遺物図

第15表　５号井戸遺物観察表

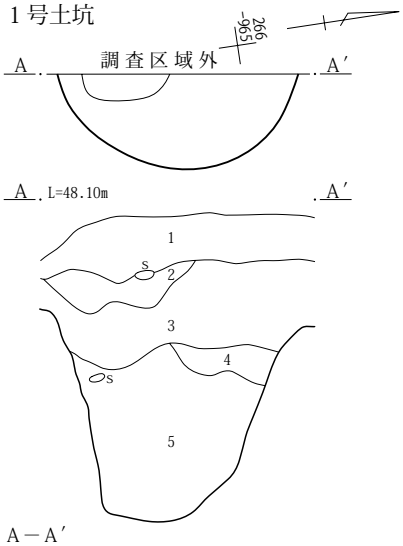
挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第26図 PL.21	1	在地系土器 Ⅲ	埋土 1/2	口 底	4.2	高		淡橙・灰白	内面器表付近から器表は淡橙色、断面中央から外面器表は灰白色。底部回転糸切無調整であるが、圧痕が著しく回転方向不明。内面器表は剥離。	中世。
第26図 PL.21	2	在地系土器 Ⅲ	埋土 口縁部1/3、 底部1/2	口 底	(7.8) (4.8)	高	1.8	明黄褐	体部から口縁部は僅かに内湾気味に開く。底部左回転糸切無調整。	中世。

第16表　井戸一覧表

遺構番号	位置	形状	長(m)	短(m)	深(m)	重複遺構
1	X=33,285 Y=-49,961	円形	0.68	(0.65)	0.90	９号土坑
2	X=33,307 Y=-49,960	円形	1.10	(0.65)	1.39	３号住居
3	X=33,308 Y=-49,958	円形	1.60	(0.90)	1.36	４号住居
4	X=33,323 Y=-49,957	円形	0.72	0.63	(0.73)	18号土坑
5	X=33,328 Y=-49,957	円形	0.90	0.86	1.34	７号住居・20号土坑

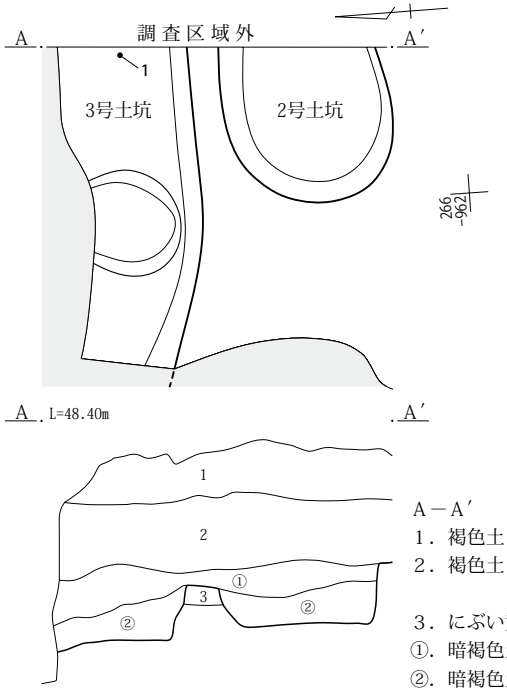
第３節　土坑・墓坑

１号土坑



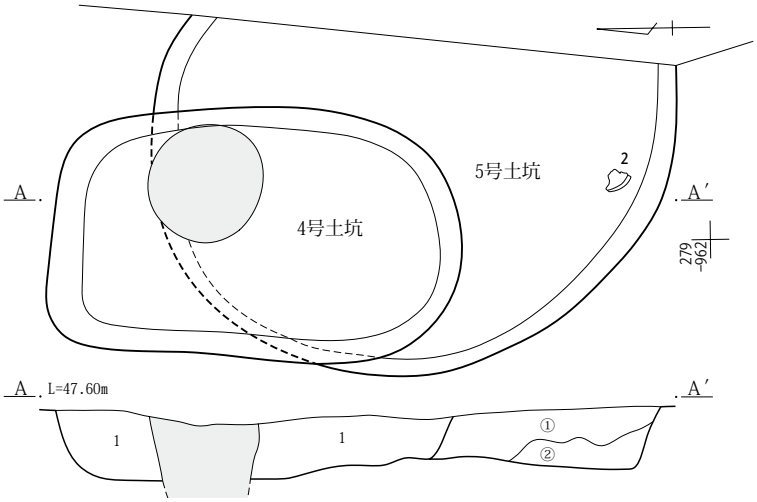
A－A′
1．褐色土　しまり弱くやや砂質　畑耕作土　ローム小ブロック(φ１㎝)を少量含む。
2．暗褐色土　ローム小ブロック　炭粒わずかに含む。
3．暗褐色土　ローム小ブロック　まだらに含む　小石炭粒あり。
4．くすんだ黄褐色土　しまり弱く　ロームブロック含む。
5．くすんだ黄褐色土　ロームブロック　礫混じり　一括埋土。

２・３号土坑



A－A′
1．褐色土　砂質　土質均質　畑耕作土。
2．褐色土　ややしまりあり　ローム粒含む。
3．にぶい黄褐色土　ローム漸位層。
①．暗褐色土　ローム小ブロック含む。
②．暗褐色土　ローム粒小ブロックやや多く含む。

４・５号土坑

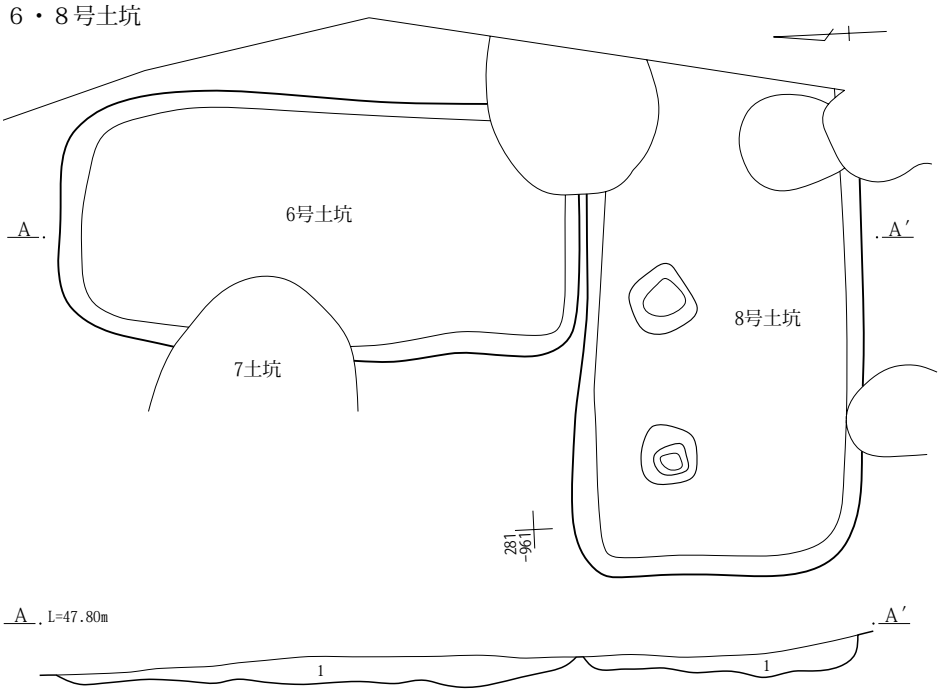


A－A′
1．にぶい黄褐色土　ローム粒　小ブロック混土　一括埋土。
①．暗褐色土　ローム粒　小ブロック混土　一括埋土。
②．くすんだ暗褐色土　ロームブロック多く含みしまりあり　一括埋土。

0　1：30　1m

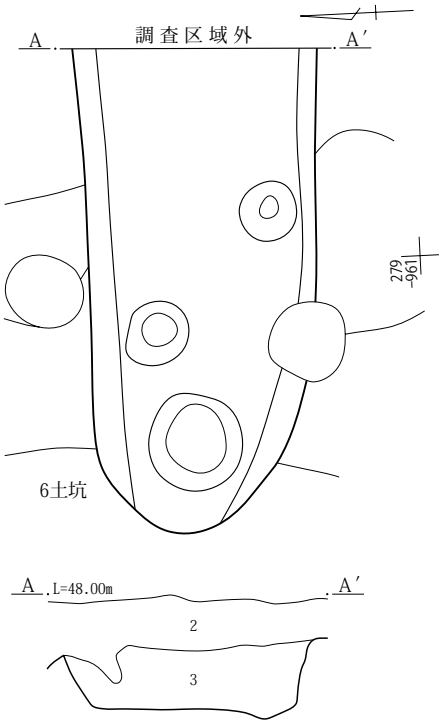
第27図　１・２・３・４・５号土坑遺構図

６・８号土坑



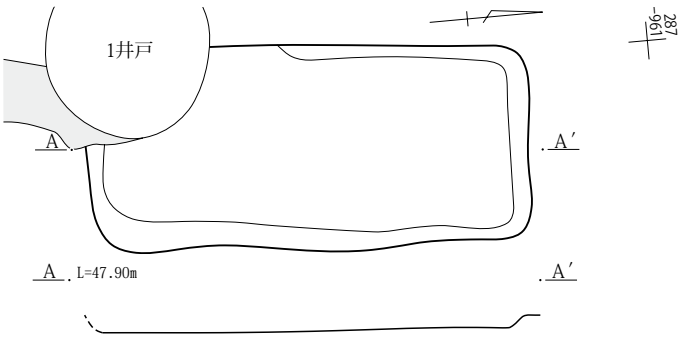
Ａ－Ａ′
1.にぶい黄褐色土　ローム粒　小ブロック混土　一括埋土。

７号土坑

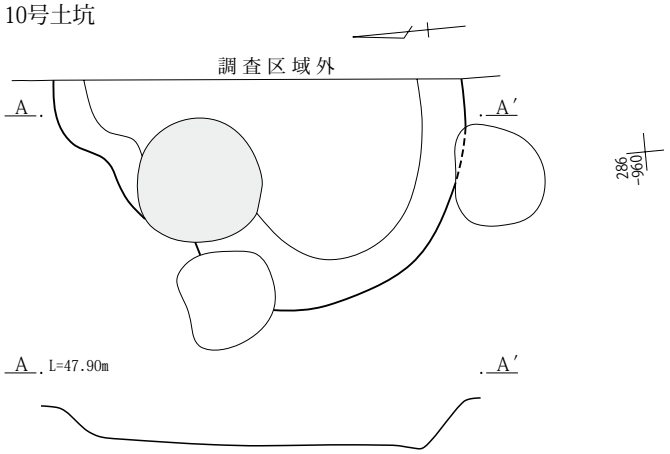


Ａ－Ａ′
２．褐色土　砂粒(As-B)混じり。
３．くすんだ褐色土　ローム大ブロック
多量に含む
一括埋土。

９号土坑



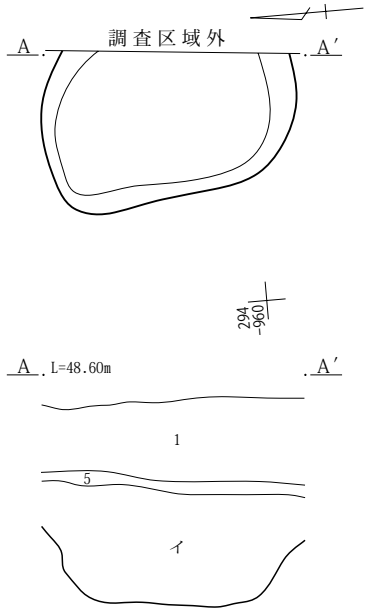
10号土坑



0　1：30　1m

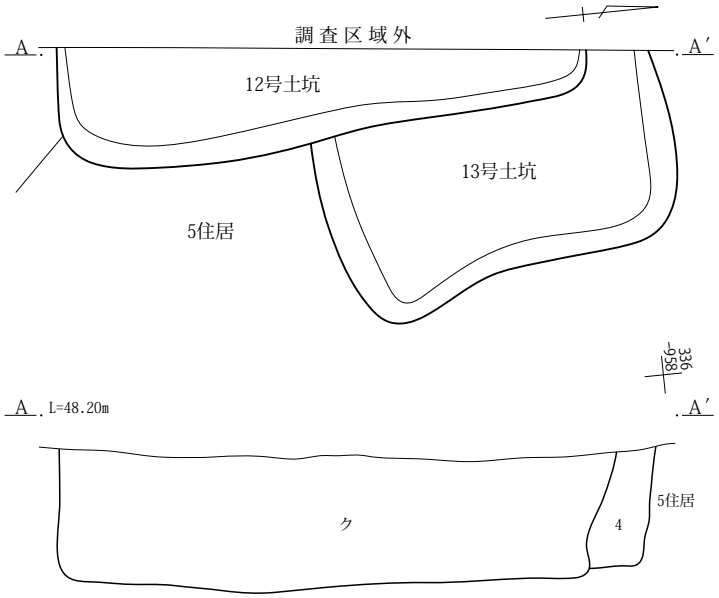
第28図　６・７・８・９・10号土坑遺構図

11号土坑



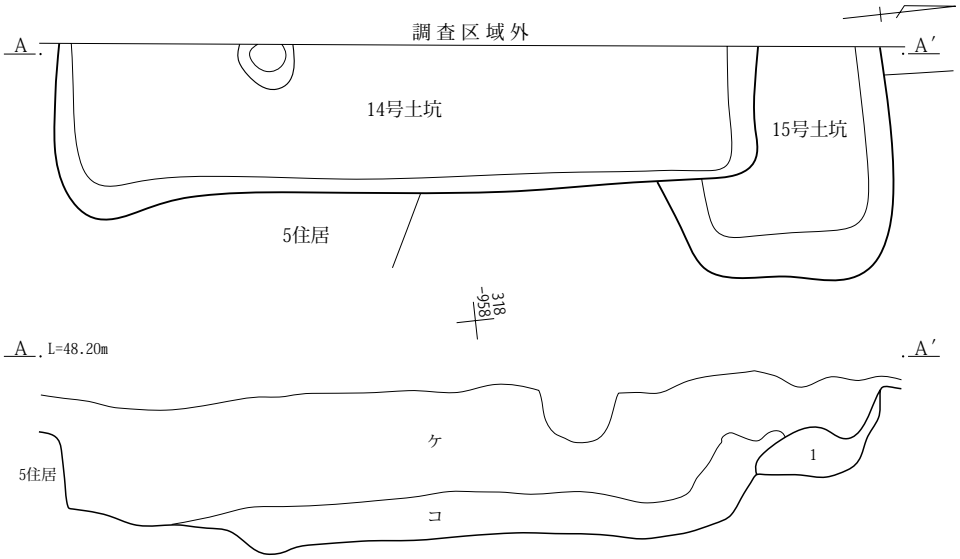
A－A′
1．暗褐色土　やや砂質。
5．くすんだ褐色土　ローム小ブロック　粒混じり　やや硬質。
イ．灰褐色土　ロームブロック斑に含む　一括埋土。

12･13号土坑



A－A′
4．暗褐色土　焼土粒　炭粒含む　ローム粒わずかに含む。
ク．くすんだ暗褐色土　ロームブロック斑に含む　しまり弱い。

14・15号土坑

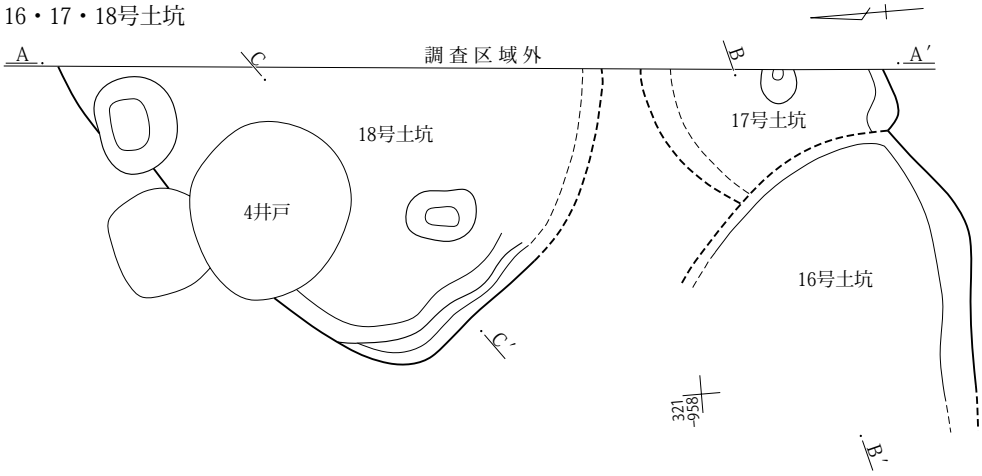


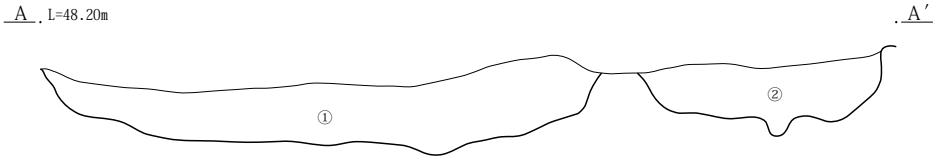
A－A′
1．暗褐色土　わずかにローム粒含む。
ケ．くすんだ黄褐色土　ローム大小ブロック多量に含む。
コ．暗褐色土　ローム小ブロック主体　ややしまりあり。

0　1：30　1m

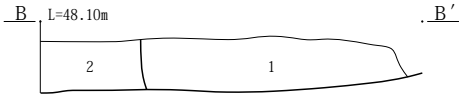
第29図　11・12・13・14・15号土坑遺構図

16・17・18号土坑

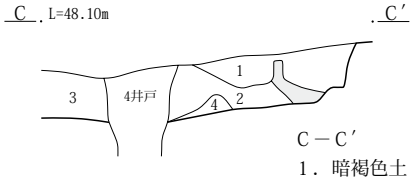




A－A′
①．暗褐色土　ローム小ブロック含む。
②．暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む　しまり弱い。

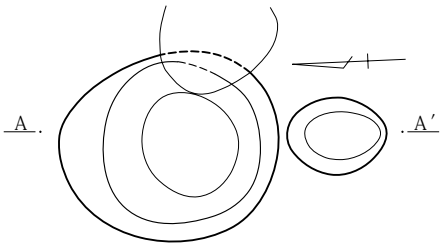


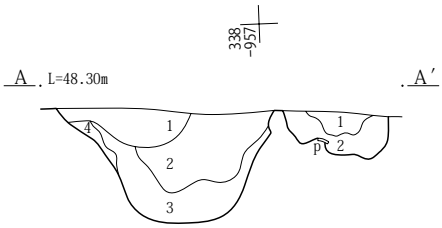
B－B′
1．暗褐色　しまり弱い　ローム小ブロック　斑に含む。
2．暗褐色　しまり弱い　１層よりローム少なく小粒



C－C′
1．暗褐色土　ローム粒少量　焼土粒含む。
2．くすんだ褐色土　ロームにローム小ブロック混土。
3．暗褐色土。
4．くすんだ黄褐色土　ローム＋ロームブロック。

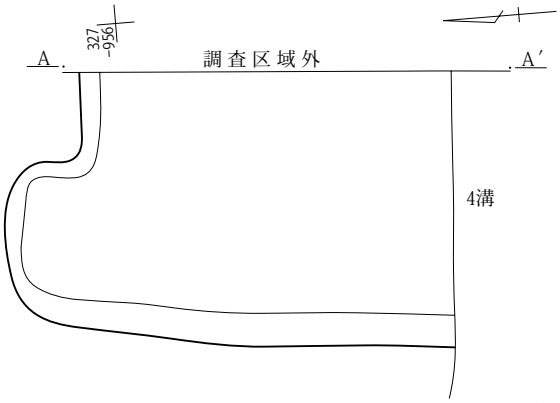
19号土坑

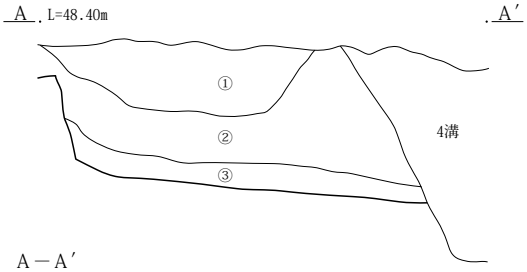




A－A′
1．暗褐色土　ローム粒含む　しまり弱い。
2．褐色土　ローム小ブロック　焼土粒混じり。
3．暗黄褐色土　ロームにロームブロック　褐色土　混土　しまり弱い。
4．くすんだ黄褐色土　ローム＋ロームブロック。

22号土坑



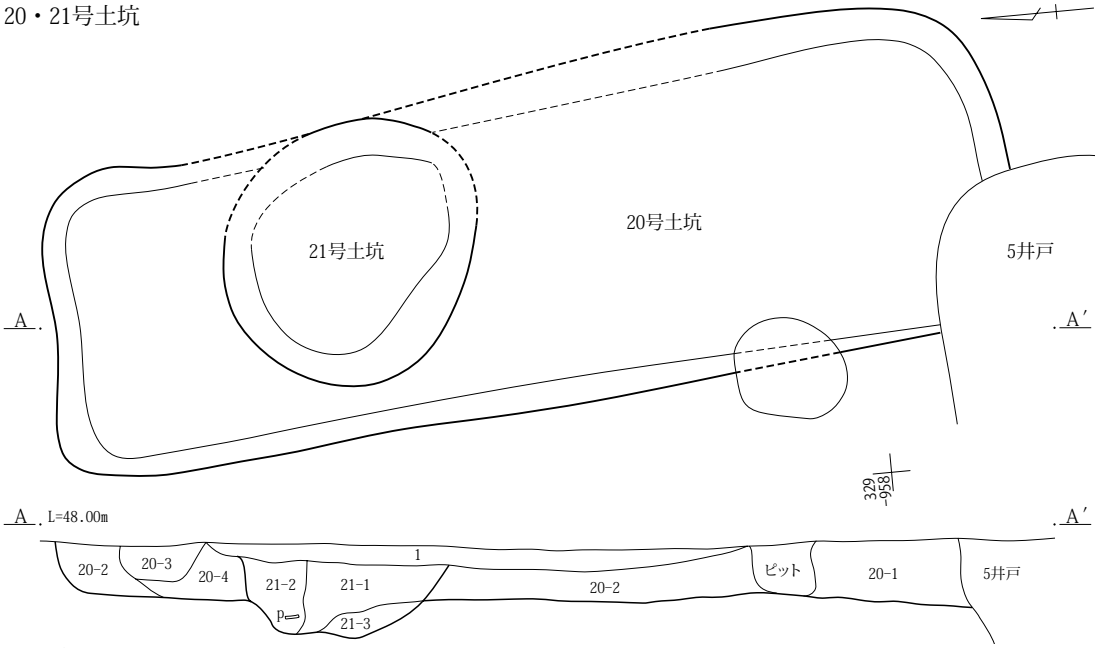


A－A′
①．暗褐色土　ローム小ブロック含む。
②．暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む　しまり弱い。
③．暗褐色土　ローム粒　焼土粒　炭粒わずかに含む。

0　1：30　1m

第30図　16・17・18・19・22号土坑遺構図

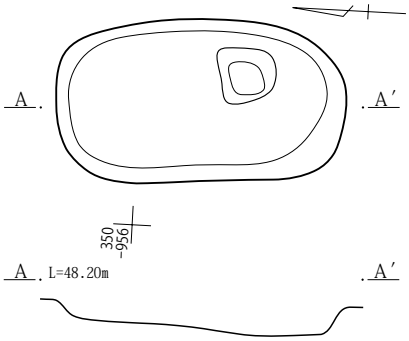
20・21号土坑



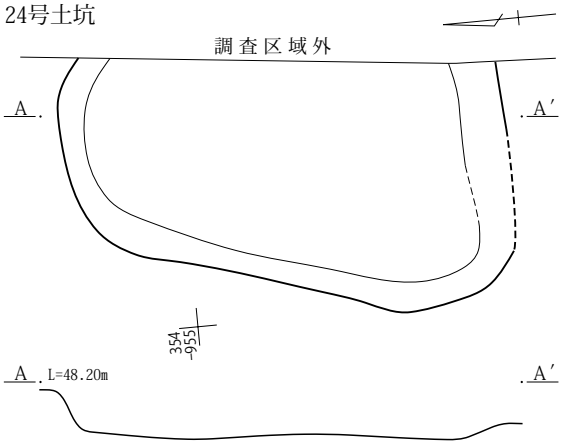
Ａ－Ａ′

1　褐色土　焼土粒　ローム粒含む。
20-1. 褐色土　焼土粒　ローム粒含む。
20-2. 暗褐色土　焼土粒を含み　ローム小ブロック斑に含む。
20-3. くすんだ褐色土　ロームブロック多く含む。
20-4. くすんだ黄褐色土　ローム土にロームブロック混じり。
21-1. 褐色土　ロームブロック　焼土粒わずかに含む。
21-2. くすんだ褐色土　ローム土にローム小ブロック含む
わずかに炭粒・焼土粒含む。
21-3. くすんだ黄褐色土　ローム土にロームブロック混じり。

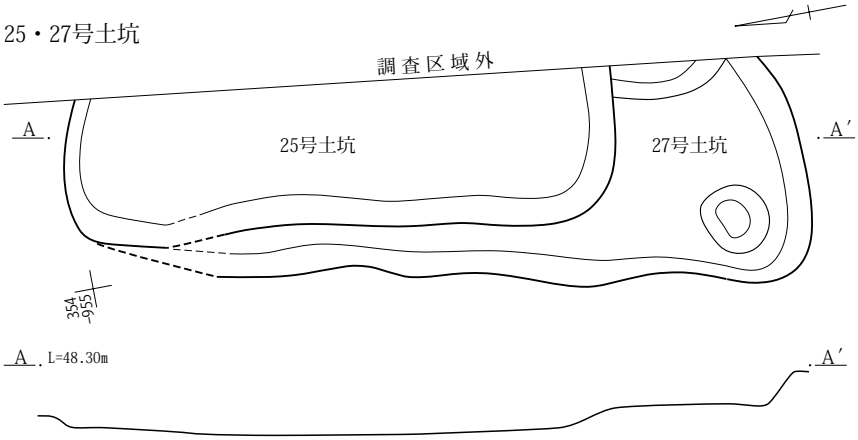
23号土坑



24号土坑



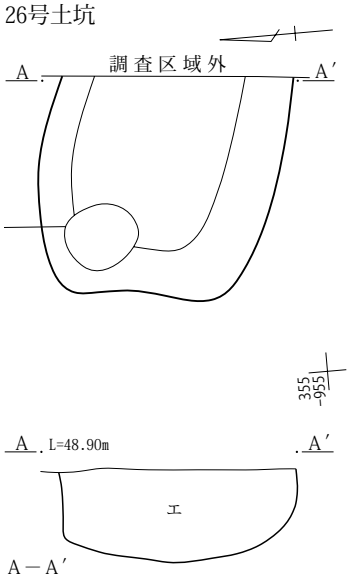
25・27号土坑



0　1：30　1m

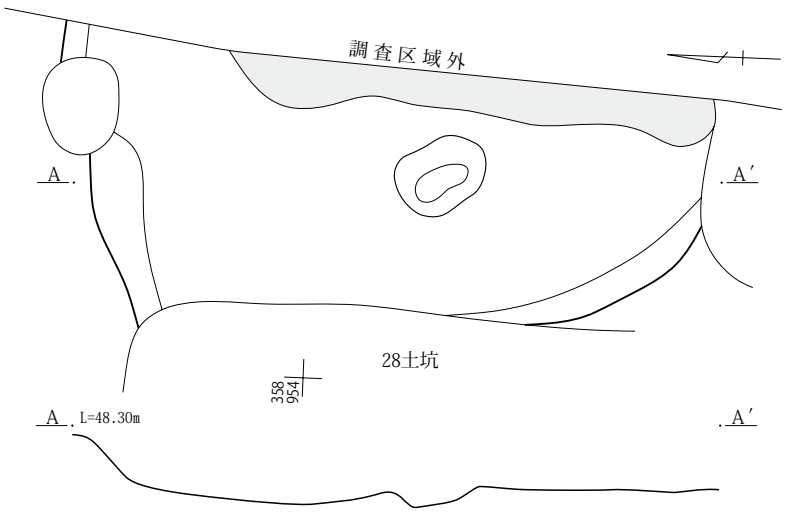
第31図　20・21・23・24・25・27号土坑遺構図

26号土坑

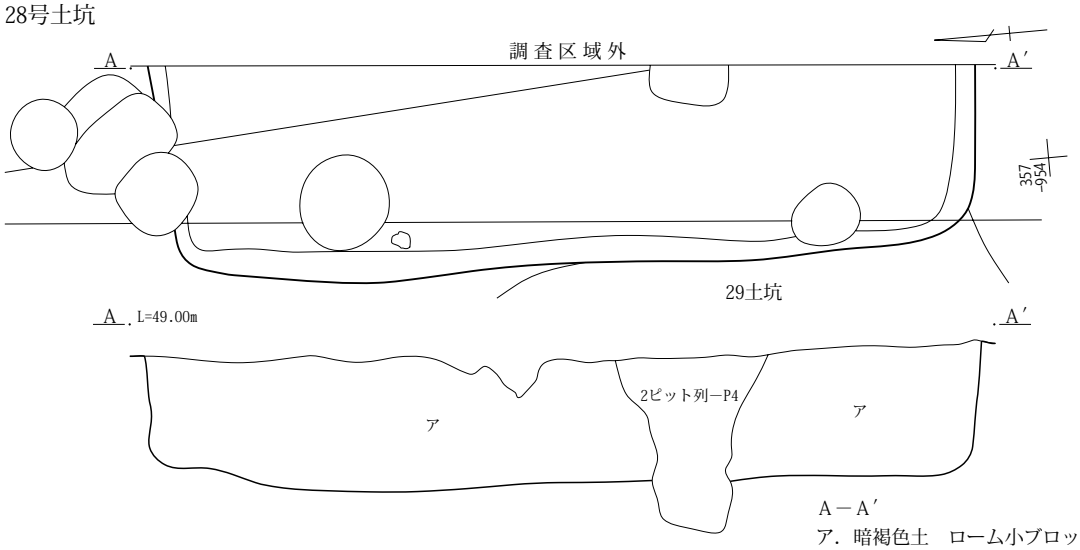


Ａ－Ａ′
エ．暗褐色土　アに似る　焼土粒　炭粒わずかに含む　一括埋土。

29号土坑

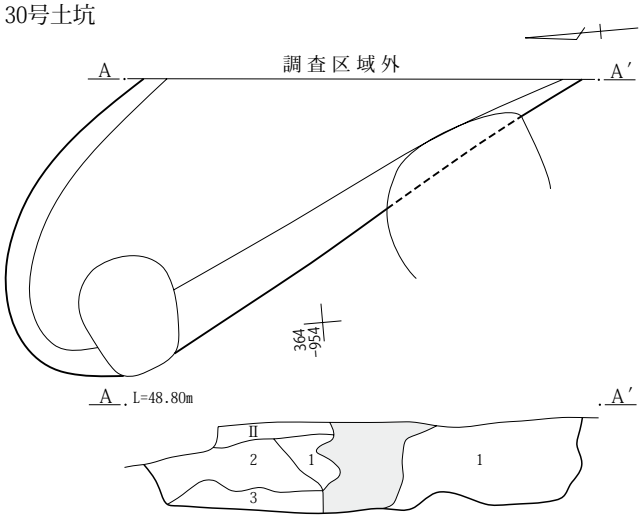


28号土坑

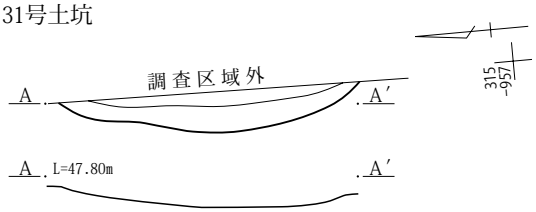


Ａ－Ａ′
ア．暗褐色土　ローム小ブロックを斑に含む　一括埋土。

30号土坑



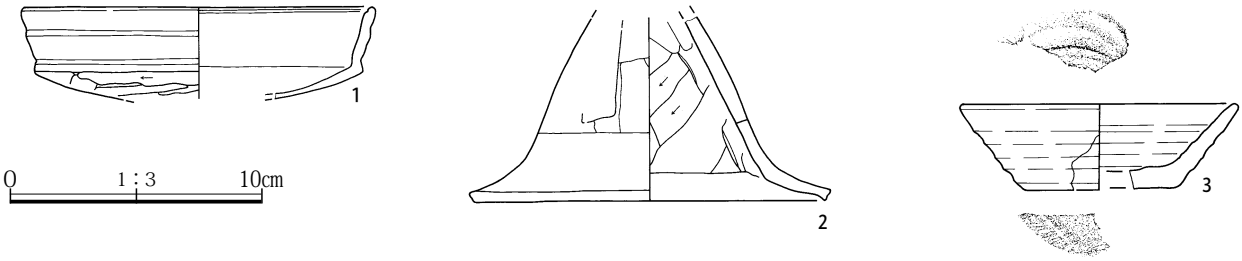
31号土坑



Ａ－Ａ′
Ⅱ．暗褐色土　ローム粒　炭粒含む。
１．暗褐色土　土質均質。
２．くすんだ褐色土　よごれたロームにローム粒混じり。
３．くすんだ褐色土　よごれたローム土にロームブロック混土(漸位層)。

0　1：30　1m

第32図　26・28・29・30・31号土坑遺構図



第33図　３・５・30号土坑遺物図

第17表　３・５・30号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第33図	1	土師器 杯	+15 1/4	口	13.8			細砂粒少量/良好/橙	有段口縁。口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
第33図 PL.21	2	土師器 高杯	+5 脚下半1/3	底	13.8			精選・白色鉱物粒微量/良好/明赤褐	透孔(長方形か)を3ヶ所に配すか。外面は透孔より下位から裾部に横撫で、これより上位には撫で。内面裾部に横撫で、これより上位は斜めのヘラ削り。残存最上位に撫で、しぼり。	写真図版5土1
第33図	3	在地系 土器皿	埋土 1/3	口 底	(10.9) (5.8)	高	3.3	橙	内外面に轆轤目。底部回転糸切無調整。轆轤右回転整形。底部外面に浅い圧痕残る。	中世。

第18表　土坑一覧表

遺構番号	位置	形状	長(m)	短(m)	深(m)	長軸方位	重複遺構
1	X=33,266 Y=-49,965	円形	0.96	(0.40)	0.83	N-７°-E	
2	X=33,266 Y=-49,961	楕円形	(0.62)	0.61	0.09	N-79°-E	
3	X=33,267 Y=-49,962	不明	(1.25)	(0.42)	0.13	N-83°-W	
4	X=33,277 Y=-49,962	隅丸長方形	1.57	0.98	0.27	―	５号土坑
5	X=33,278 Y=-49,962	不明	2.10	(1.30)	0.25	N-４°-E	４号土坑
6	X=33,280 Y=-49,962	長方形	2.06	1.05	0.10	N-３°-E	７号土坑
7	X=33,280 Y=-49,961	楕円形	(1.94)	0.98	0.20	N-90°-	６号土坑
8	X=33,282 Y=-49,962	長方形	(2.00)	1.10	0.08	N-88°-W	
9	X=33,286 Y=-49,961	長方形	1.75	0.82	0.05	N-５°-E	１号井戸
10	X=33,287 Y=-49,960	楕円形	1.64	(0.92)	0.15	N-５°-E	
11	X=33,294 Y=-49,959	楕円形	1.02	(0.70)	0.13	N-22°-W	
12	X=33,315 Y=-49,959	長方形	2.10	(0.45)	0.18	N-２°-E	５号住居 13号土坑
13	X=33,315 Y=-49,959	長方形	1.44	(0.65)	0.15	N-８°-W	５号住居 12号土坑
14	X=33,318 Y=-49,959	長方形	2.78	(0.58)	0.22	N-６°-E	５号住居 15号土坑
15	X=33,319 Y=-49,958	不明	(0.90)	0.90	0.29	―	14号土坑
16	X=33,320 Y=-49,957	不明	(1.20)	(0.75)	0.22	N-77°-E	17号土坑
17	X=33,320 Y=-49,957	不明	(1.10)	(0.35)	0.20	N-32°-W	16号土坑
18	X=33,322 Y=-49,957	不明	(1.60)	(0.90)	0.30	N-53°-E	４号井戸
19	X=33,338 Y=-49,956	円形	0.90	0.75	0.47	―	
20	X=33,330 Y=-49,957	長方形	3.85	1.35	0.21	N-６°-W	６・７号住居 ５号井戸・21号土坑
21	X=33,331 Y=-49,957	円形	1.05	0.92	0.17	―	７号住居 20号土坑
22	X=33,326 Y=-49,957	長方形	(1.80)	(1.10)	0.20	N-５°-E	４号溝

遺構番号	位置	形状	長(m)	短(m)	深(m)	長軸方位	重複遺構
23	X=33,350 Y=-49,955	長方形	1.14	0.65	0.10	N-３°-W	
24	X=33,353 Y=-49,954	楕円形	1.80	(0.88)	0.18	N-５°-E	
25	X=33,355 Y=-49,955	長方形	2.20	(0.57)	0.10	N-11°-E	27号土坑
26	X=33,355 Y=-49,954	長方形	(0.85)	0.95	0.21	N-70°-W	１号ピット列Ｐ４
27	X=33,356 Y=-49,955	長方形	2.20	0.90	0.12	N-11°-E	25号土坑
28	X=33,358 Y=-49,954	長方形	3.18	(0.80)	0.29	N-２°-E	29号土坑・１号ピット列Ｐ２・Ｐ３・２号ピット列Ｐ３・Ｐ４
29	X=33,358 Y=-49,955	楕円形	(2.44)		0.11	N-３°-W	28号土坑
30	X=33,364 Y=-49,953	不明	(1.76)	1.00	0.07	N-30°-W	２号ピット列Ｐ１
31	X=33,316 Y=-49,957	不明	(1.11)	－	0.08	－	５号住居

第19表　墓坑一覧表

遺構番号	位置	形状	長(m)	短(m)	深(m)	長軸方位	重複
1	X=33,308 Y=-49,960	隅丸長方形	0.98	0.72	0.22	N-８°-W	３号住居

１号墓坑

位置：Ｘ＝33,308　Ｙ＝－49,960付近

規模・形状：70×98㎝程を測る隅丸長方形状を呈する。

長軸方位：Ｎ－８°－Ｗ

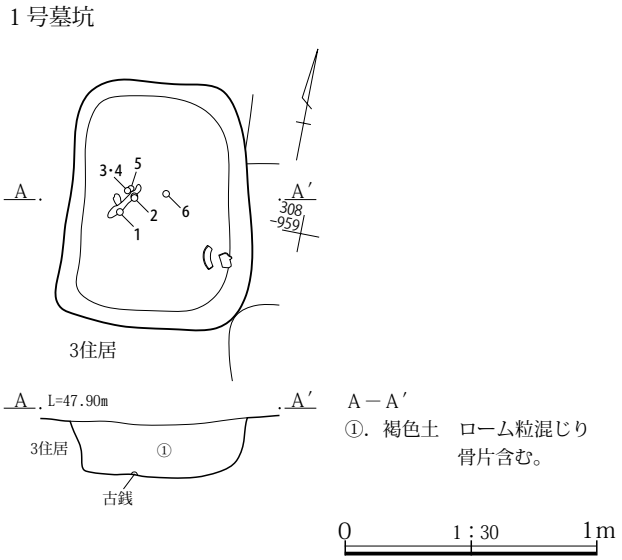
遺存状態：上面を後世の掘削により失い、残存深度は20～25㎝を測る。

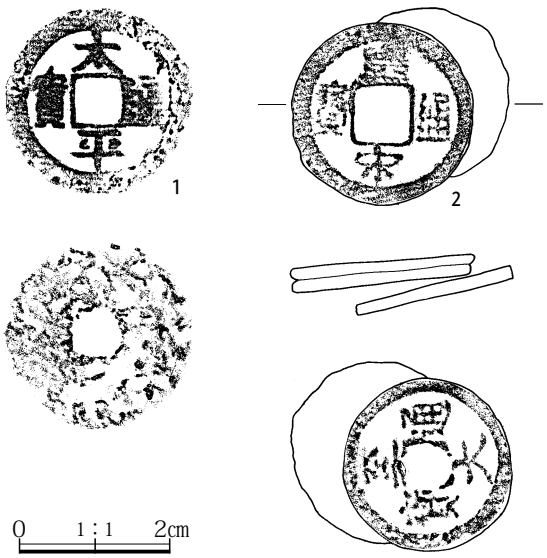
埋土：単一の褐色土よる人為的埋没。

出土遺物：少量の人骨片と共に、古銭９枚(第34図１～第35図６)が出土する。数枚は固着し種別も不明だが、判別出来るものは､｢太平通宝｣｢皇宋通宝｣｢至大通宝｣｢天禧通宝｣｢元豊通宝｣｢洪武通宝｣｢永楽通宝｣の７種である。

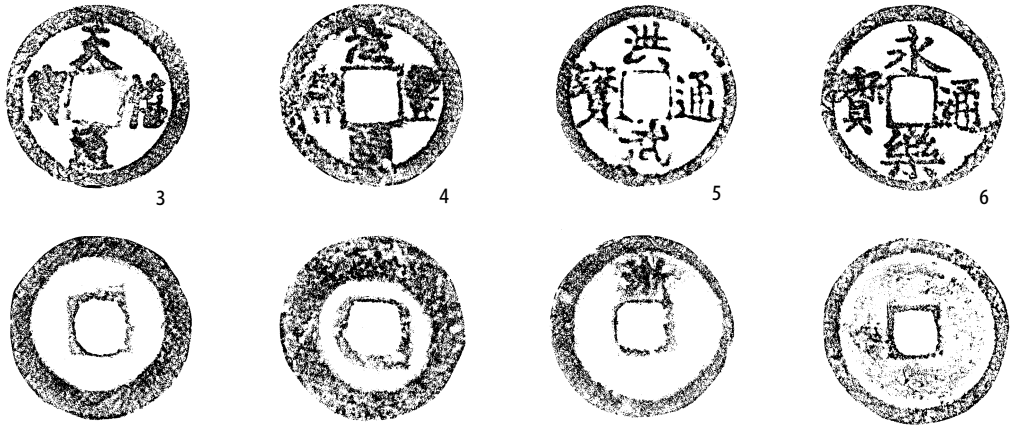
重複遺構：３号住居と重複し、検出時の様相より本墓坑の方が新しいものと判断される。

所見：副葬品の年代より中世後期から近世初頭の墓坑と判断される。検出状況からは、棺桶の存在は明らかではない。





第34図　１号墓坑遺構図・遺物図(１)



第35図　１号墓坑遺物図(２)

第20表　1号墓坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				成形・整形の特徴等
第34図 PL.21	1	金属製品 銭貨	+3完形	縦 横	24.5 25	厚 重量	35.4	2枚の銭貨が錆付、1枚は「太平通宝」(北宋)でもう一枚は錆化が著しく銭種不明。2枚の孔の位置は揃うが紐等は見られない、太平通宝の文字・郭・縁とも明瞭
第34図 PL.21	2	金属製品 銭貨	+3完形	縦 横	24.8 30.3	厚 重量	6.9 10.12	3枚の銭貨が錆付く、「皇宗通宝」(北宋)と銭種不明の2枚がぴったりと錆付「至大通宝」(元)が斜めに錆付いて出土する。皇宗通宝24.7×25×1.43と銭種不明の2枚がぴったりと錆付、至大通宝22.7×23.2×1.73が斜めに錆付いて出土する。
第35図 PL.21	3	金属製品 銭貨	+2完形	縦 横	24.2 25.6	厚 重量	1.3 3.01	「天禧通宝」(北宋)で文字・縁は明瞭だが郭は不明瞭で孔の形も不定形
第35図 PL.21	4	金属製品 銭貨	+2完形	縦 横	24.3 24.6	厚 重量	1.6 3.59	「元豊通宝」(北宋)で文字・縁は不明瞭だが孔の形は正方形に近い、裏面はさらに平坦
第35図 PL.21	5	金属製品 銭貨	+2完形	縦 横	25.2 25.1	厚 重量	1.5 2.62	「永楽通宝」(明)、文字・郭・縁とも明瞭だが裏面はやや平坦
第35図 PL.21	6	金属製品 銭貨	+7完形	縦 横	24.4 24.4	厚 重量	1.4 2.47	「洪武通宝」(明)、文字・外輪とも明瞭だが武の字の上と左に鋳不足がみられる、裏面はやや平坦

第４節　ピット列(柵列)

１号ピット列

位置：Ｘ＝33,359　Ｙ＝－49,954付近

規模：調査区北端部に位置し、柱間160～183cmで３間を測る。

主軸方位：Ｎ－４°－Ｅ

柱穴：径24～35cm、残存深度13～21cmを測る柱穴４穴を検出する。柱穴に建て替えの痕跡は認められない。

埋土：褐色から黒褐色土による自然埋没の様相を呈する。

出土遺物：なし。

重複遺構：26・28号土坑と重複し、遺構検出時の様相より、いずれの遺構より本ピット列の方が新しいものと判断される。また、ピット同士の重複は見られないものの、２号ピット列と軸線上で交わるため、時期差があると判断されるが、新旧の関係は明らかではない。

所見：軸方向がほぼ南北方向で、５号溝と直交する向きになるため、中世館跡に関わる施設の一部である可能性がある。

２号ピット列

位置：Ｘ＝33,361　Ｙ＝－49,953付近

規模：調査区北端部に位置し、柱間135～190cmで３間を測る。Ｐ４は調査区東壁に接するため、規模はさらに南に延びる可能性がある。

主軸方位：Ｎ－４°－Ｗ

柱穴：径30～48cm、残存深度19～42cmを測る柱穴４穴を検出する。柱穴に建て替えの痕跡は認められない。

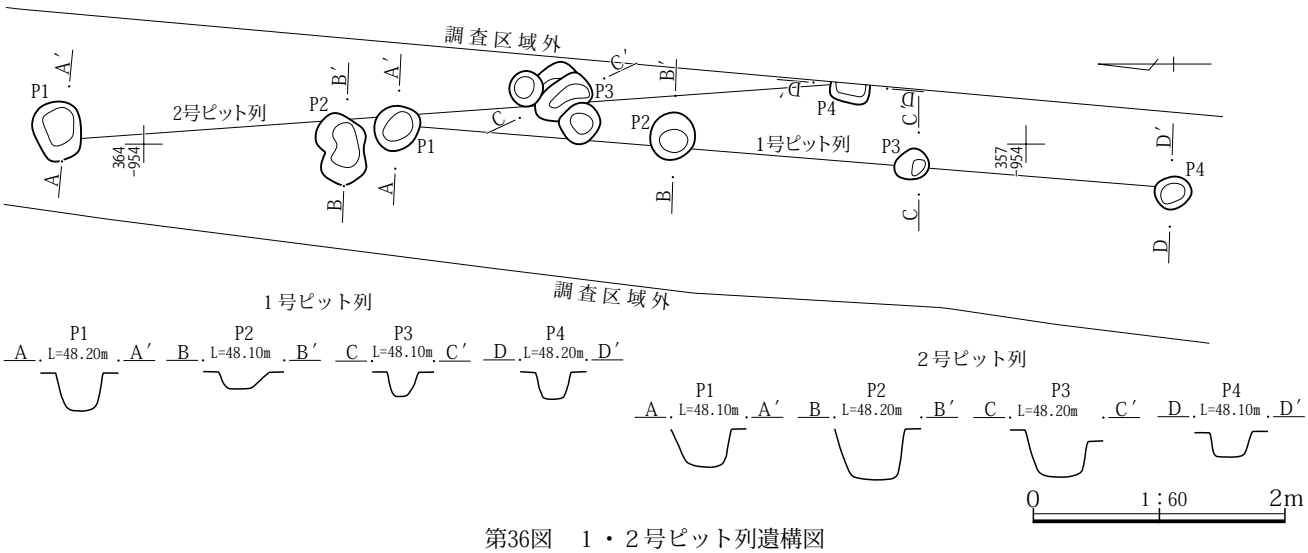
埋土：褐色から黒褐色土による自然埋没の様相を呈する。

出土遺物：なし。

重複遺構：28・30号土坑と重複し、遺構検出時の様相より、いずれの遺構より本ピット列の方が新しいものと判断される。また、ピット同士の重複は見られないものの、１号ピット列と軸線上で交わるため、時期差があると判断されるが、新旧の関係は明らかではない。

所見：軸方向がほぼ南北方向で、５号溝と直交する向きになるため、中世館跡に関わる施設の一部である可能性がある。

１・２号ピット列

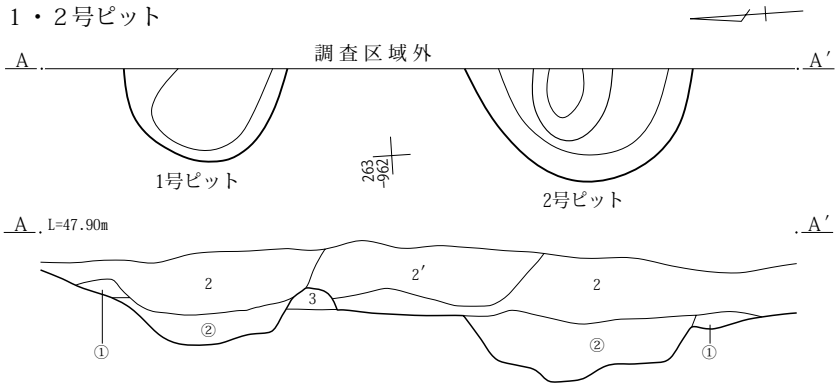


第36図　１・２号ピット列遺構図

第21表　ピット列一覧表

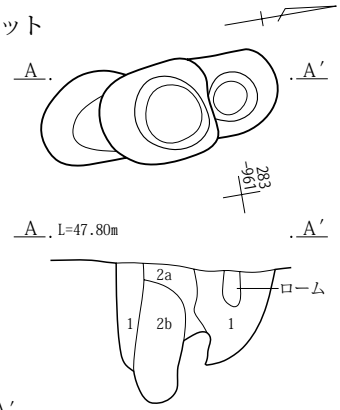
遺構番号	位置	形状	長(m)	短(m)	深(m)	長軸方位	重複遺構
１号ピット列　P1	X=33,362 Y=-49,954	円形	0.35	0.35	0.13	N-０°-	２号ピット列軸上
１号ピット列　P2	X=33,360 Y=-49,954	円形	0.35	0.35	0.13	N-０°-	28号土坑
１号ピット列　P3	X=33,358 Y=-49,954	円形	0.32	0.28	0.21	N-０°-	28号土坑
１号ピット列　P4	X=33,356 Y=-49,954	円形	0.30	0.24	0.21	N-０°-	26号土坑
２号ピット列　P1	X=33,365 Y=-49,954	隅丸方形	0.47	0.37	0.30	N-67°-E	30号土坑
２号ピット列　P2	X=33,362 Y=-49,954	楕円形	0.38	0.33	0.42	N-12°-E	
２号ピット列　P3	X=33,361 Y=-49,954	隅丸長方形	0.48	0.25	0.38	N-40°-W	28号土坑
２号ピット列　P4	X=33,358 Y=-49,953	隅丸長方形	0.30	0.15	0.19	N-４°-E	28号土坑

１・２号ピット



A－A′
２．暗褐色土　ローム粒　炭粒　わずかに含む　ややしまりあり。
2′．２層よりやや焼土多く含む。
３．くすんだ黄褐色土　ローム漸位層。
①．黒褐色土　炭化物やや多く含む。
②．くすんだ黄褐色土　３層土に小石を多く含む。

３号ピット



A－A′
１．くすんだ褐色土　ローム粒わずかに含む。
２a．くすんだ褐色土（１の層よりやや黄色）
ローム粒混じる。
２b．くすんだ褐色土　ロームブロック　多く
混じる。

0　1：30　1m

第37図　１・２・３号ピット遺構図

第22表　ピット一覧表

遺　構 番　号	位　置	形　状	長(m)	短(m)	深(m)	長軸方位	重複遺構
1	X=33,264 Y=-49,968	円形	0.65	(0.40)	0.17	N- 0°-	
2	X=33,262 Y=-49,968	円形	0.90	(0.45)	0.28	N- 0°-	
3	X=33,283 Y=-49,961	円形	0.45	0.45	0.55	N- 0°-	

第５節　溝

検出された溝は６条を数え、その走行は、調査区内を東西に走るものが大半である。以下に各溝の概要を記す。

１号溝は、調査区南端で検出され、断面形状は中段を有する逆台形状を呈し、東西方向に走行する。埋土下層より陶磁器(第40図１～21)、在地系土器(第40図22～第41図25)、瓦片(第41図26)の出土がみられる。埋土は主にやや粘性をもつ暗褐～暗灰褐色土の自然堆積で、水流の痕跡は見られない。

２・３号溝は、調査区中央南寄りで検出され、断面形状は緩やかなＵ字～Ｖ字形を呈し、共に東西方向に走行する。埋土は主にやや粘性をもつ暗褐～くすんだ褐色土の自然堆積で、水流の痕跡は見られない。埋土より在地系土器(第41図27～29)の出土がみられる。

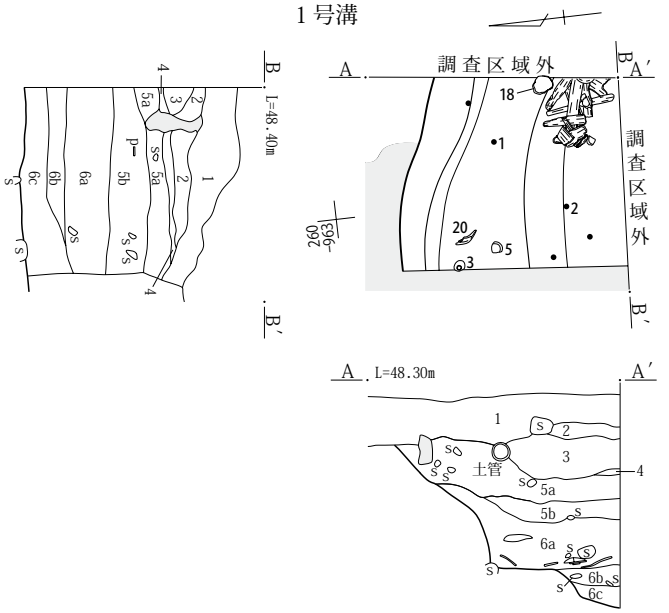
４号溝は、調査区中央付近で検出され、断面形状は中段をもつ逆台形状を呈し、東西方向に走行する。埋土下位から底面には水流の痕跡は見らないが、埋没途上の中位に水性堆積の砂層を含む緩やかなＶ字形～逆台形状を呈する溝の痕跡が認められる。

５号溝は、調査区北端部付近で検出され、断面形状は浅い皿状を呈し、東西方向に走行する。埋土はロームブロックを含む黄～暗褐色土で埋没し、水流の痕跡は認められない。

６号溝は、調査区北端部で調査区東壁に接して検出され、南北走行溝の西側肩部と判断された。埋土内に水性堆積の褐灰色砂層や小石混じりの褐色土の堆積が認められることから、通水を目的とした用水路と推察される。

以上、６号溝を除く溝には、水流の痕跡が見られず、共に東西走行で軸をほぼ同じくすることから、隣接の中世館跡群に伴う区画溝と推察される。

検出溝の規模等を下掲の一覧表(第24表)に記す。

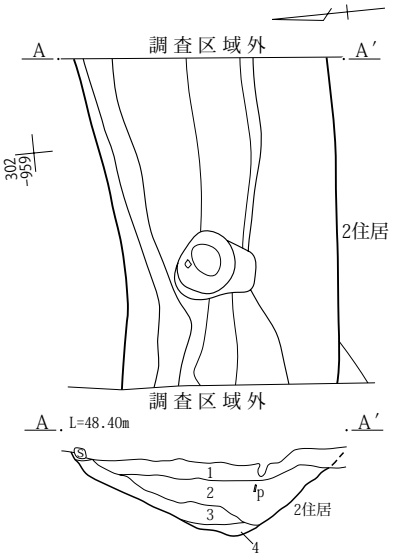


Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
１．褐色土　砂質　旧耕作土　近・現代層。
２．褐色土　１層に炭粒含む　近・現代層。
３．暗褐色土　ローム粒　小ブロック　炭粒含む　しまりややあり　コンクリ混じり　近・現代層。
４．暗褐色土　焼土小ブロック　炭　ローム小ブロック混じり　貼り床状のしまった層。
５a．暗褐色土　やや砂粒多く含む　炭粒わずかに含む。
５b．暗褐色土　ロームやや多く含む　粘性　しまりあり。
６a．暗灰褐色土　粘性強く　鉄分沈着　土器片　小礫やや多く含む。
６b．暗灰褐色土　砂質　ローム粒　焼土粒含む　木片多く含む。
６c．暗灰褐色土　粘性強く　ローム粒・炭粒含む

0　1:60　2m

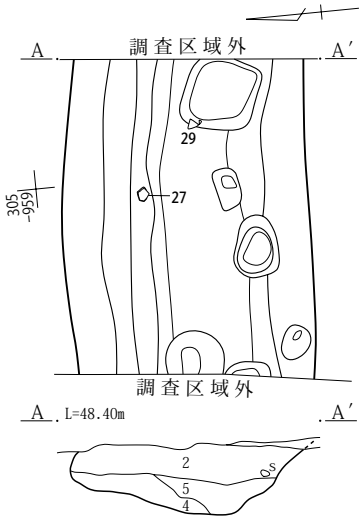
第38図　１号溝遺構図

２号溝



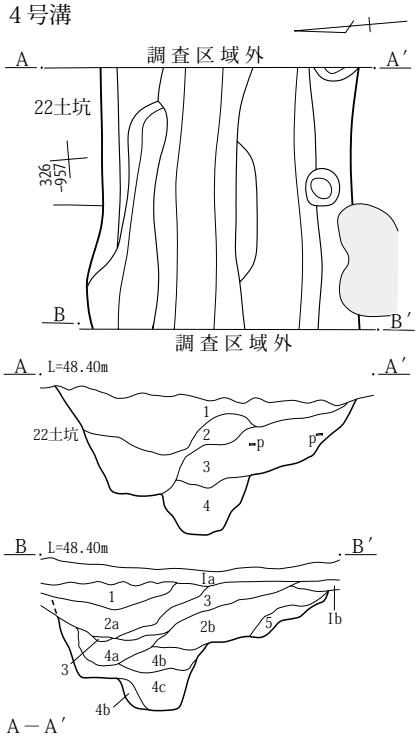
Ａ－Ａ′
１．暗褐色土　やや砂質。
２．暗褐色土　土質均一ローム小ブロックわずかに含む　粘性　しまりややあり。
３．暗褐色土　２層よりローム小ブロック多く含み粘性　しまり強い。
４．くすんだ褐色土　土質均質　粘性　しまり強い。

３号溝



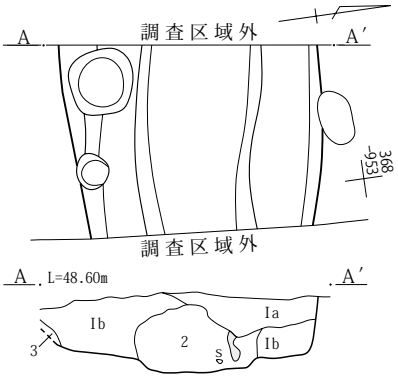
Ａ－Ａ′
２．暗褐色土　土質均一ローム小ブロックわずかに含む　粘性　しまりややあり。
４．くすんだ褐色土　土質均質　粘性　しまり強い。
５．くすんだ褐色土　ローム小ブロック　粒混じり　やや硬質。

４号溝



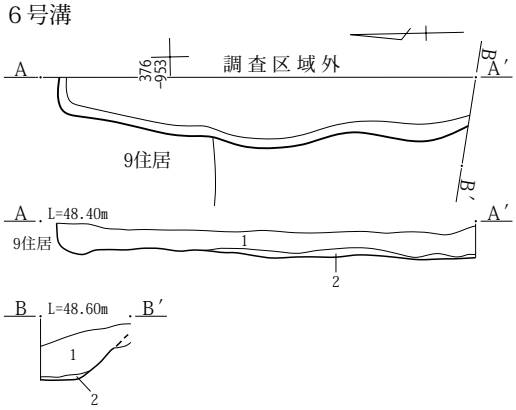
Ａ－Ａ′
１．暗褐色土　砂質　狭雑物少ない。
２．暗褐色土　ローム粒　小ブロック　焼土粒含む　やや粘性土。
３．暗褐色土　土質均質　土器片含む。
４．暗褐色土　ローム土　ブロック含む　粘性強。
Ｂ－Ｂ′
Ｉａ．褐灰色土　細砂主体の砂質　硬くしまる。
Ｉｂ．褐灰色土　Ｉａ層よりしまり弱い。
１．くすんだ褐色土　ローム土に小ブロック混じる。
２ａ．褐色土　土質均質　やや粘性あり。
２ｂ．褐色土　２ａ層よりしまり弱くローム小ブロック含む。
３．くすんだ褐色土　１層に似るがローム多く含む。
４ａ．褐灰色土　粘性しまりあり　細砂　粘質土ラミナ状(流水堆積土)。
４ｂ．褐灰色土　粘質土。
４ｃ．褐灰色土　４ｂ層にローム小ブロック混じり。
５．くすんだ褐色土　ローム土混じり　ローム小ブロック　斑に含む。

５号溝



Ａ－Ａ′
１ａ．暗褐色土　砂質　ローム小ブロックわずかに含む。
１ｂ．暗褐色土　砂質　ローム小ブロック斑に含む　やや砂質。
２．くすんだ褐色土　砂質　ローム大小ブロック多量に含む。
３．くすんだ褐色土　ローム小ブロック多く含む。

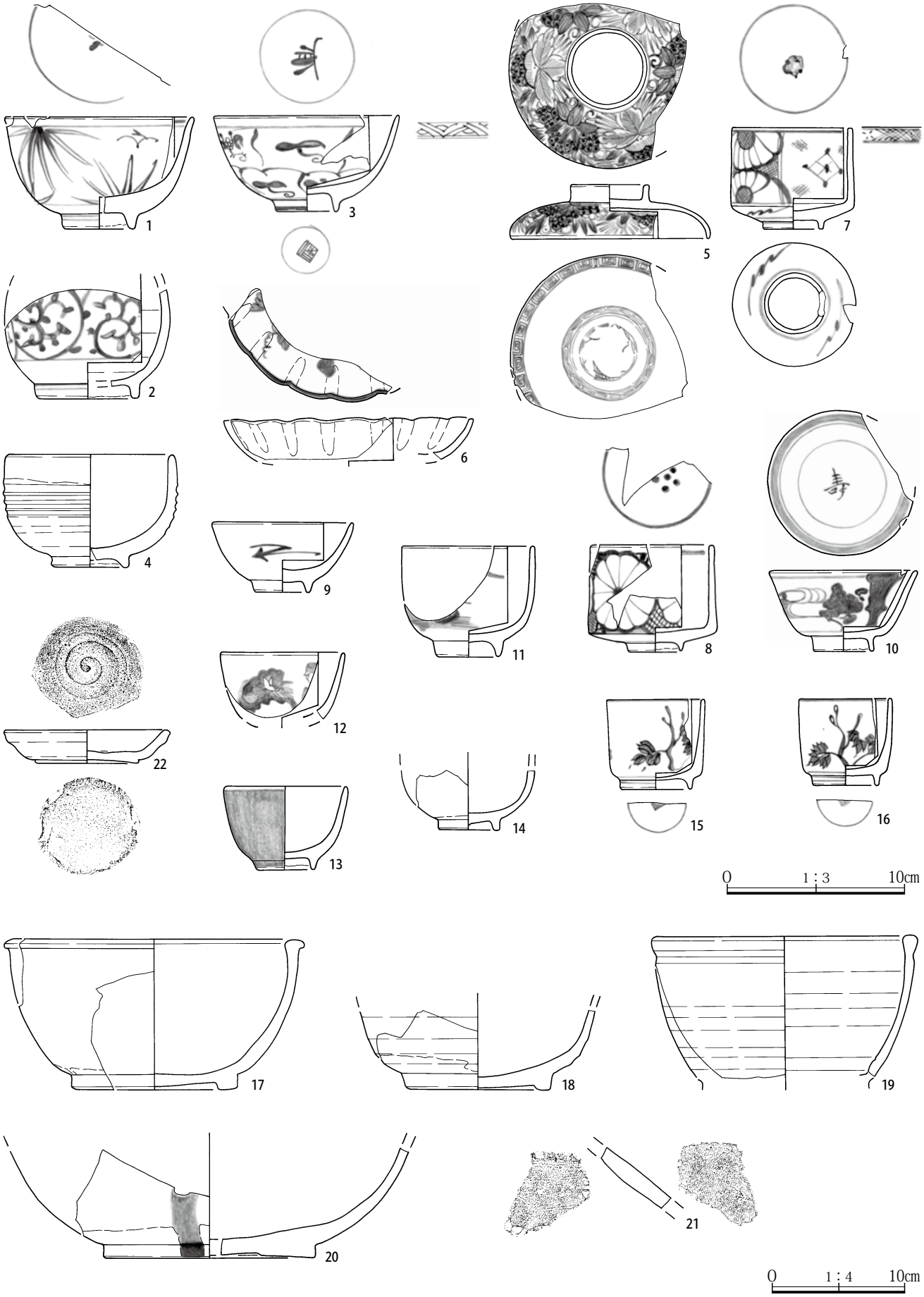
６号溝



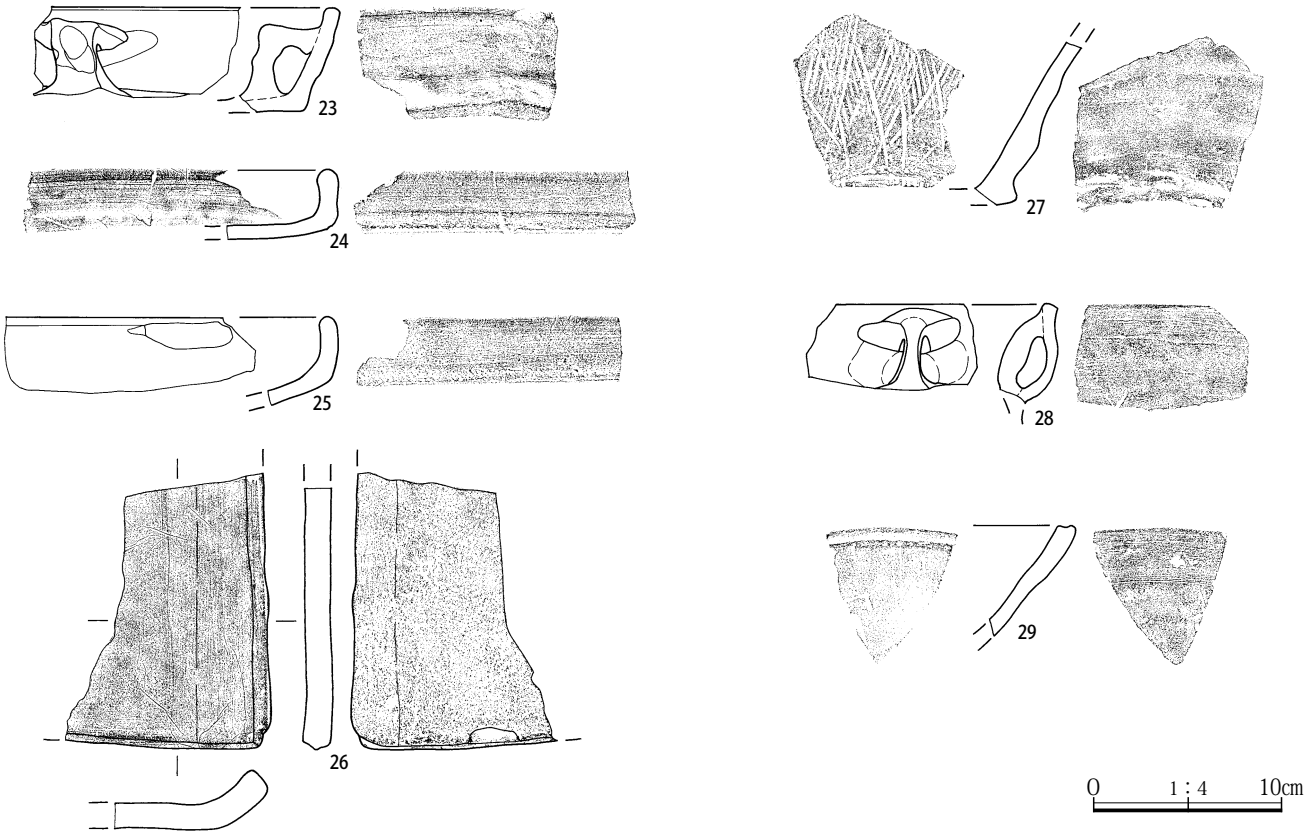
Ａ－Ａ′
１．褐灰色土　褐灰色砂層　硬質の褐灰色土の互層。
２．褐色土　ロームブロック　小石混じり。

0　1：60　2m

第39図　２・３・４・５・６号溝遺構図



第40図　１号溝遺物図（１）



第41図　１号溝遺物図（２）・３号溝遺物図

第23表　１・３号溝遺物観察表

１号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第40図 PL.22	1	瀬戸・美濃 磁器碗	+71 1/3	口 底	(10.5) (3.9)	高	6.2	白	底部付近の器壁は厚い。内外面は手描き染付。呉須は濃い紫色を帯びた色調。	19世紀中葉～後葉。
第40図	2	肥前 磁器瓶	+81 体部から底部 1/3	口 底	(5.3)	高		白	外面にいわゆる蛸唐草文。	江戸時代。
第40図 PL.22	3	瀬戸・美濃 磁器碗	+50 口縁部1/4、底部完	口 底	(10.3) 3.4	高	5.3	白	酸化コバルトに近い発色の呉須による手描き染付。外面にはいわゆるナズナ文。高台内は１重圏線内に不明銘。底部内面は１重圏線内に不明文様。	19世紀中頃～後葉。
第40図 PL.22	4	瀬戸・美濃 陶器腰錆碗	埋土 口縁部1/2、底部1/3	口 底	(9.2) (4.0)	高	6.2	灰白	口縁部外面に螺旋状凹線。内面から口縁部外面に灰釉、体部外面から高台内に鉄釉。高台端部は無釉。	18世紀中葉～後葉。
第40図 PL.22	5	肥前 磁器碗蓋	+44 口縁部1/3、つまみ完	口 つまみ	(11.0) 4.2	高	3.1	白	天井部外面は素描の一部に濃みを入れる。口縁部内面は雷文帯。天井部内面は簡略化した雷文帯風の文様内に細線の松竹梅文。	19世紀前葉～中葉。
第40図	6	肥前 磁器皿	埋土1/4	口 底	(14.0)	高		白	口縁部から体部を輪花とする。口錆。内面に染付。	19世紀前葉～中葉。
第40図 PL.22	7	肥前 磁器か筒形碗	埋土 口縁部1/2、底部完	口 底	(6.8) 3.2	高	5.6	白	外面を二重縦線で４分割し、菊花状文と格子状文を各一対描く。口縁部内面は簡略化した四方襷文。底部内面は１重圏線内に簡略化した五弁花。高台脇にも施文。	焼成不良で釉白濁。18世紀後葉～19世紀前葉。
第40図	8	瀬戸・美濃 陶器筒形碗	埋土 口縁部一部、底部1/2	口 底	(6.8) (3.0)	高	5.9	灰白	外面に菊花状文。口縁部内面に１重圏線。底部内面は１重圏線内に梅鉢状の文様。細かい貫入入る。	19世紀前葉～中葉。
第40図 PL.22	9	肥前 磁器小碗	埋土 口縁部2/3、底部完	口 底	7.8 3.0	高	3.9	灰白	体部外面に折れ松葉文。文様は２カ所残存するが、位置関係から３方と考えられる。	江戸時代。
第40図 PL.22	10	瀬戸・美濃 磁器か小碗	埋土 口縁部3/4、底部完	口 底	8.0 3.2	高	4.5	白	体部外面は三つに区画され、３方に簡略化した文様。口縁部内面は幅広と線描きの圏線。底部内面は１重圏線内に「寿」字文。	19世紀前葉～中葉。
第40図	11	肥前 磁器碗	埋土 口縁部一部、底部1/2	口 底	(7.4) 3.4	高	6.1	白	外面は山水文か。	19世紀前葉～中葉。
第40図	12	肥前 磁器碗	埋土 口縁部1/3	口 底	(6.8)	高		白	外面に雲と龍の染付。	江戸時代。
第40図	13	肥前 磁器小碗	埋土 1/2	口 底	6.7 3.2	高	4.6	白	口縁部から高台外面は瑠璃釉。口縁端部から内面と高台内面から底部外面は透明釉。	19世紀前葉～中葉か。

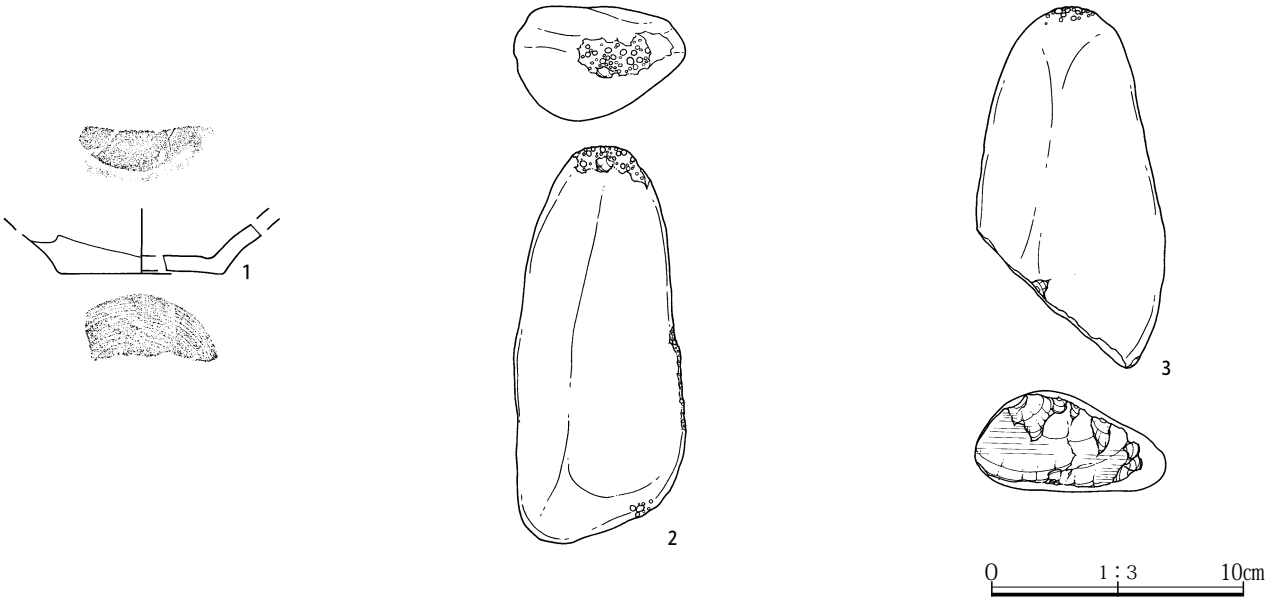
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第40図	14	瀬戸・美濃 陶器小碗	埋土 体部一部、底部完	口 底	3.2	高		灰白	内面から高台脇に灰釉。細かい貫入入る。	18世紀中葉～後葉。
第40図 PL.22	15	瀬戸・美濃 磁器小坏	埋土 1/2	口 底	(5.3) (3.8)	高	5.0	白	口縁端部は呉須塗り。外面に植物文。高台内不明銘。	近現代。
第40図 PL.22	16	瀬戸・美濃 磁器小坏	埋土 1/2	口 底	(5.2) (3.7)	高	4.7	白	口縁端部は呉須塗り。外面に植物文。高台内不明銘。	近現代。
第40図 PL.22	17	瀬戸・美濃 陶器練鉢	埋土 口縁部一部、底部1/2	口 底	(22.3) 12.4	高	11.2	灰白	口縁部は内湾気味で端部は外方に張り出す。口縁端部上面は丸味を持つ。内面から高台脇に灰釉。底部内面に団子状目痕。	18世紀後葉。
第40図 PL.22	18	瀬戸・美濃 陶器片口鉢か	+35 底部	口 底	10.5	高		灰白	内面から高台脇に灰釉。貫入入る。底部内面に目痕。	江戸時代。
第40図	19	瀬戸・美濃 陶器片口鉢	埋土 1/4	口 底	(19.2)	高		灰白	口縁部は肥厚。口縁部外面に凹線。内外面に灰釉。貫入入る。	18世紀前葉～中葉。
第40図	20	瀬戸・美濃 陶器練鉢	+37 1/2	口 底	(15.9)	高		灰白	高台は幅広。内面から高台脇に灰釉。口縁部に銅緑釉を流したようで、体部から高台外面に銅緑釉が２条流れる。底部内面に団子状目痕。	江戸時代。
第40図	21	常滑 陶器甕か	埋土 体部片	口 底		高		灰白	断面は灰白色、内面器表はにぶい褐色、外面は自然釉。	中世。
第40図 PL.22	22	在地系土器 皿	埋土 1/2	口 底	(9.0) (5.7)	高	1.9	橙	底部外面は段が付く。底部左回転糸切無調整。	江戸時代。
第41図	23	在地系土器 焙烙	埋土 破片	口 底		高	5.5	灰～暗灰	断面中央は黒色、断面は灰色から淡黄橙色、器表は灰色から暗灰色。耳部は口縁部内面から底部内面に貼り付け。体部外面下端は篦削り。	江戸時代。
第41図	24	在地系土器 焙烙	埋土 破片	口 底		高		浅黄橙	体部は直立気味で口縁部はやや肥厚。丸底。	江戸時代末～近現代。
第41図	25	在地系土器 焙烙	埋土 破片	口 底		高		橙	断面中央は灰白色、器表付近から器表は橙色。体部から口縁部は内湾気味。丸底。口縁部内面に幅広の耳貼り付け痕。残存部に耳下部の貼り付け痕は認められない。	江戸時代末～近現代。
第41図	26	在地系土器 十能瓦	埋土 破片	長 幅		厚	1.4	黒～灰白	断面は灰白色、器表は黒色で部分的に灰白色。凹面周囲は撫で。	近現代。
３号溝										
第41図 PL.22	27	在地系土器 すり鉢	+11 体部片	口 底		高		橙	断面中央は暗灰色、断面周囲は灰白色、器表付近から器表は橙色。底部は型作りで体部外面下端から底部外面に縮緬状の皺残る。基本的な作り方は江戸時代の鍋と同じで外面調製痕も同じ。内面は斜めに交差するすり目を施す。	17世紀か。
第41図 PL.22	28	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	口 底		高		橙	耳部分のみの残存のため、口縁部形状は不明。口縁部内面に紐状の耳を貼り付け。	中世。
第41図	29	在地系土器 鍋か	+1 口縁部片	口 底		高		灰白	断面中央は黒色、器表付近から器表は灰白色。口縁部は横撫で。口縁端部上面は凹線状に窪む。体部外面は撫でで、指頭圧痕状の凹凸がある。	17世紀か。

第24表　溝一覧表

遺構番号	位置	検出長(m)	幅(m)	深(cm)	底面標高(m)	走向	重複遺構	断面形状	流水痕跡
1	X=33,258 Y=-49,963	(1.50)	(1.85)	70	H=46.80 H=46.78	東→西	－	逆台形	無
2	X=33,301 Y=-49,959	(2.60)	1.28	26	H=47.68 H=47.56	西→東	２号住居	緩やかな U字～V字	無
3	X=33,304 Y=-49,959	(2.50)	1.94	25	H=47.69 H=47.64	西→東	－	緩やかな U字～V字	無
4	X=33,325 Y=-49,957	(2.06)	2.18	77	H=47.15 H=47.13	西→東	22号土坑	逆台形	無
5	X=33,367 Y=-49,954	(1.48)	1.82	23	H=47.93 H=47.92	東→西	－	浅い皿状	無
6	X=33,375 Y=-49,952	(3.20)	(0.57)	6	H=48.17 H=48.09	北→南	９号住居	－	有

第６節　遺構外出土遺物

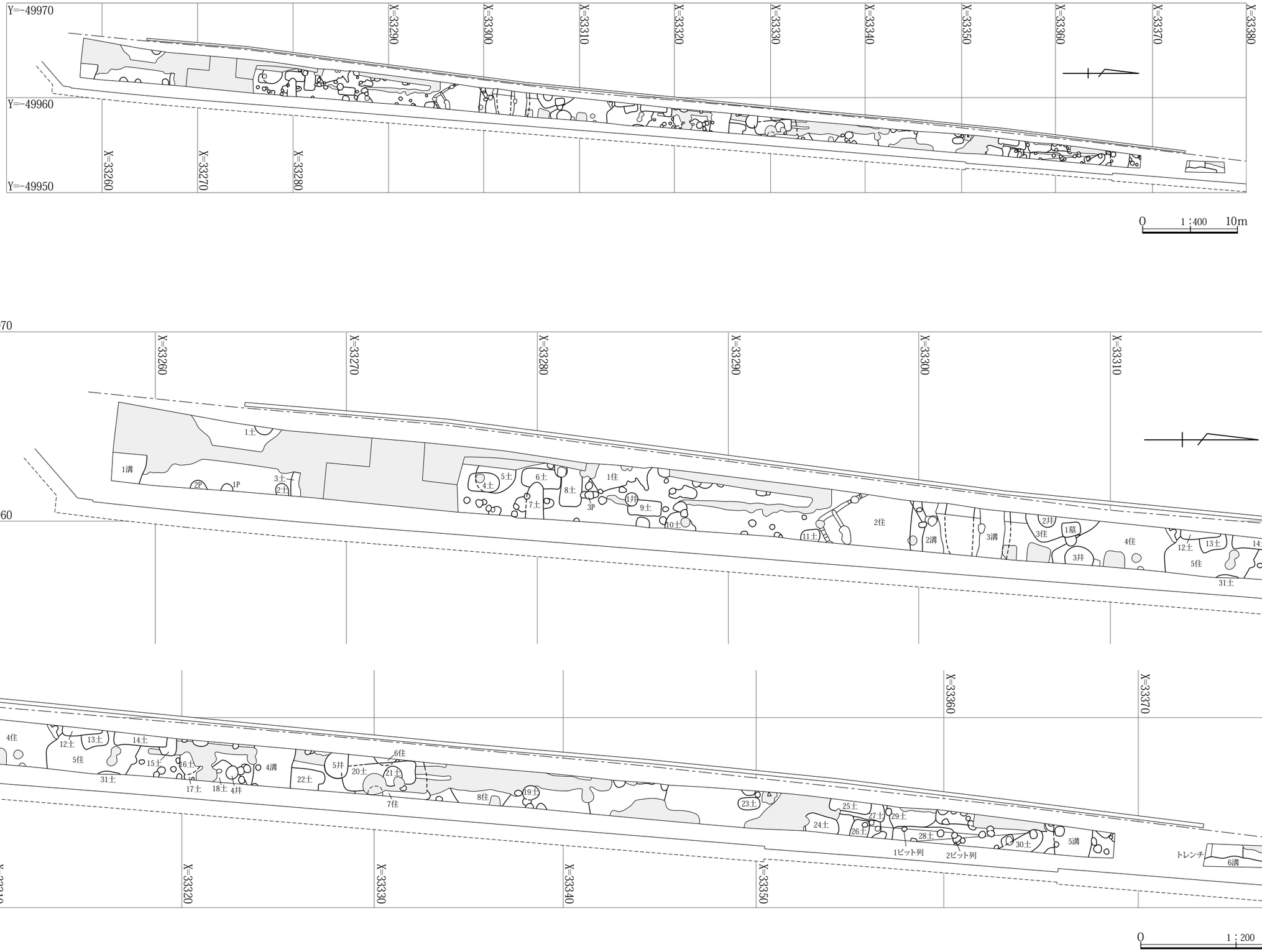
３号住居の埋土内より、在地系土器片(第42図１)が、また、４・５号住居の埋土内より、敲石(同図２・３)が出土する。



第42図　遺構外遺物図

第25表　遺構外遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第42図	1	在地系土器 皿	埋土 底部片						体部は外反して開く。底部内面周縁は凹線状に窪む。底部左回転糸切無調整。底部外面に浅い圧痕。	中世。
第42図 PL.22	2	礫石器 敲石	床面直上 完形	長	15.6	厚	4.5	粗粒輝石安山岩	小口部上端・右側縁に著しい敲打痕がある。	棒状扁平礫
				幅	6.7	重	539.6			
第42図 PL.22	3	礫石器 敲石	-106 2/3	長	14.2	厚	3.9	石英閃緑岩	小口部上端に敲打痕がある。このほか下端側の斜位分割面エッジに敲打に伴う小剥離痕が生じている。分割面と剥離痕は風化状態が異なるように見える。	棒状扁平礫
				幅	7.4	重	502.2			



第43図　前六供遺跡全体図

第５章　調査の成果

今回の前六供遺跡(以下「本遺跡」と称する)の調査、および近接の旧新田町教育委員会による前六供遺跡(以下「一次調査」と称する)・前六供遺跡Ⅱ(以下「二次調査」と称する)の調査成果を踏まえ、検出遺構の時期を中心に遺跡地周辺の歴史を概観したい。

〔古墳時代〕　本遺跡の調査では、計９軒の竪穴住居が検出されたが、調査区幅が狭いために全容が判る遺構は無い。そのため時期の推定は難しいが、出土遺物の年代などから１・２・４・５・７・９号住居の６軒が古墳時代後期の遺構と判断される。また、一次・二次調査においても推定全長42.2mの前方後方墳１基をはじめ、３件の前期住居、18軒の後期住居が検出されている。検出遺構の分布から、台地東部に古墳時代前期に小規模集落が営まれ、その後小規模な首長墓域となり、後期には台地西側へと大規模な集落が造営されていったものと推察される。また、生産域については、台地南側に広大な水田域が想定される。

水田域を支えた用水として、矢太神湧水を水源とする石田川が想定され、遺跡の北１kmほどにある北宿・観音前遺跡でも、石田川の水を台地の東側に流すための大規模な用水路跡が検出されており、石田川が水田開発の重要な水源となっていたことが確認された。

〔奈良・平安時代〕　本遺跡で検出された３・６・８号の３軒の竪穴住居に加え、一次・二次調査では３件の住居と２棟の掘立柱建物、１基の井戸が検出されている。一次調査の井戸跡内からは、「貞観九(867)年四月十五日」の紀年銘が記された木簡が出土している。木簡は、曲げ物の蓋を転用し、その表に一ヶ月分の検収記録を、裏に責任者である「検収権目代　壬生道□」の自署が記されている。当時の地方行政の実態を示す良好な資料であると共に、出土地付近に公的施設の存在も示唆される。この他の文字資料として、本遺跡の６号住居より「東」の刻書土器が、また、一次調査において「新」(新田の一字か)の墨書土器が出土する。

本遺跡周辺には、北2.1kmほどに東山道駅路(牛堀・矢ノ原ルート)、2.8kmほどには同(下新田ルート)が想定され、北東６kmほどには新田郡庁である天良七堂遺跡や県内の初期寺院である寺井廃寺がある。

本遺跡の調査範囲が狭域であるため、集落の様相について言及は難しいが、これら郡中心部からやや離れた位置にあるためか、検出件数とその密度からは拠点的集落とは言えない様相である。

天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴うAs-Bテフラの堆積が、田畑に甚大な被害をもたらし、「空閑地」となったこの地域を、後に再開発したものが新田荘であるといわれるが、本遺跡および周辺ではこれを裏付ける水田域の検出は残念ながらない。

〔中世〕　この時期の遺構としては、本遺跡の溝６条、井戸５基、土坑30基などがあり、加えて一次調査の５・６号溝、２号井戸と二次調査の１号掘立柱建物・９号溝・２号井戸などが同時期に相当する。いずれの遺構も近接する方形居館である上田中・長慶寺周辺城館跡(通称、田中館)の一部、又は、館廃絶後の寺院関連施設と考えられる。具体的には一次調査の５号溝が館南辺の堀に相当し、同じく本遺跡の１号溝が同堀の北法面に当たると考えられ、この位置に東西方向の堀を有していたことが検証された。また、一次調査６号溝は館中央を南下する堀に相当し、二次調査９号溝は、館西辺を南に延長した位置にある。本遺跡の調査では、薬研掘りの４号溝が館の中央部を東西に走る堀、同じく東西に並走する２・３号溝は両側溝をもつ通路と考えられる。その他、本遺跡の井戸・柵列をはじめ、一次・二次調査検出の井戸・掘立柱建物などが館の副郭部の施設に相当するものと考えられる。

館跡は、現在の真言宗智山派寺院長慶寺の寺域から県道を隔て太田市立綿打中学校敷地下におよび、館の姿を残す遺構としては、長慶寺北辺に東西走行の土塁の痕跡を確認するのみである。この館跡は、「田中館」として山崎一氏は『群馬県古城塁址の研究』上巻にて田中義清(里

見義俊の子)の館と推定し、峰岸純夫氏は『新田町誌』第四巻にて田中時明(足利義純と新田尼の子)の館と推定している。館の年代を探る資料として、長慶寺境内には４基の宝篋印塔と４基の板碑があり、宝篋印塔の内２基の基礎部には「貞治二(1363)年癸卯八月廿二日　義□往生」(県史No.40)、「永和二(1376)年丙辰八月三日　逆修得阿弥」(県史No.57)の銘文が、また、板碑には「嘉元元(1303)年十月十八□」(県史No.234)・「元亨□」(県史No.544)・「延文二□」八月日」(県史No.1222)・「延文六(1361)年四月日」(県史No.1282)の紀年銘が残る。この他、長慶寺と綿打中学校には年不詳の板碑が５基ほど確認されている。また、一・二次調査にて「徳治二(1307)年」・「至徳二(1385)年」・「応永二十六(1419)年」名の板碑の出土がある。中でも注目されるのは、長慶寺境内所在の宝篋印塔の銘文で、欠字はあるものの被供養者名として「義□」の名が刻まれている。新田一族に「義」の名は多く認められるものの、田中氏一族には用例が少ない。これら中世石造物の年代から、館の築造は14世紀初頭以前と推察される。現在ある長慶寺(真言宗智山派寺院)は、開山時の寺院名が宝(放)光寺であったものを、新田一族が奉じた長慶天皇(南朝三代天皇)の崩御に際し、寺名を改めたとされる。

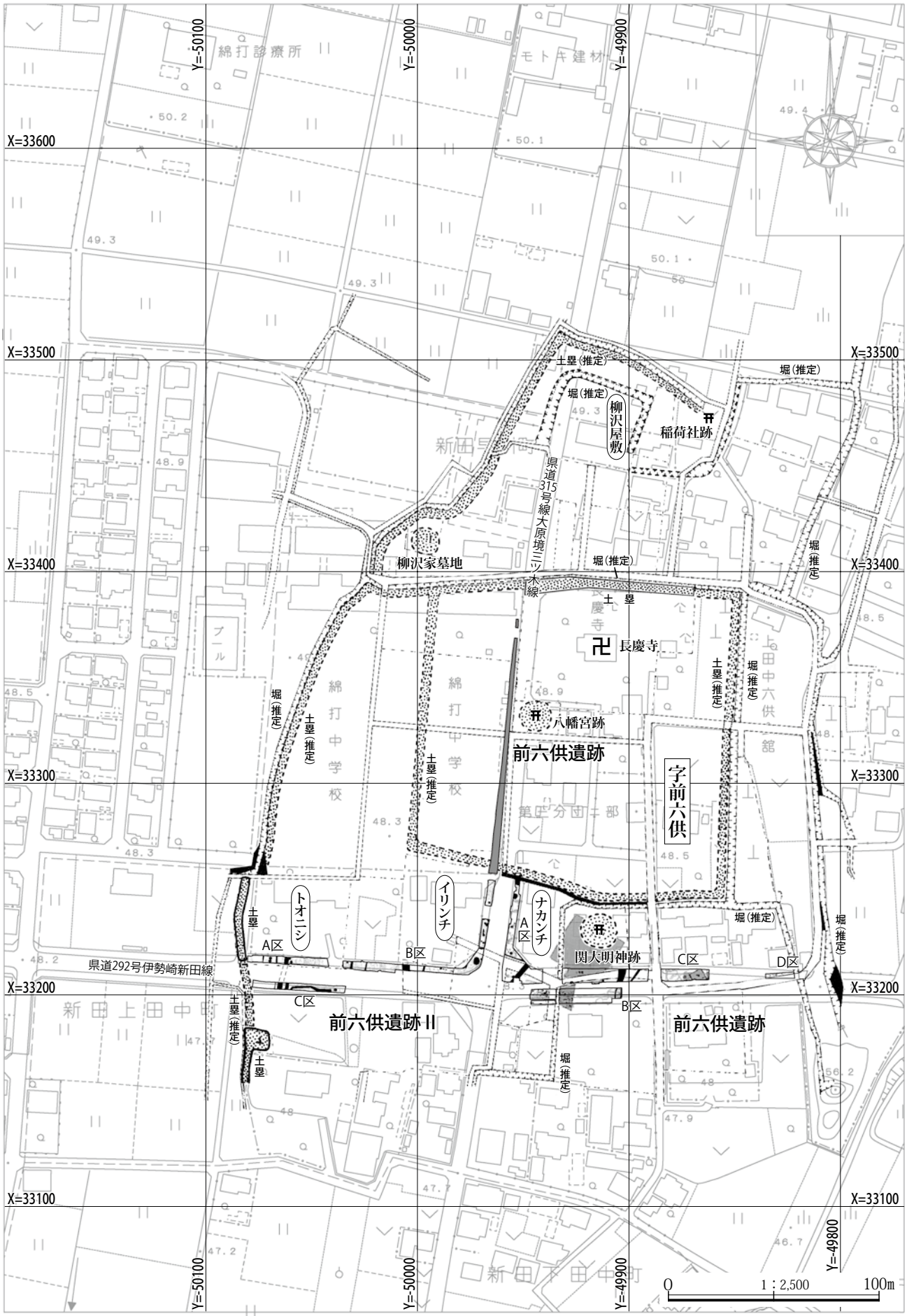
周辺の中世館跡として、この上田中・長慶寺周辺城館跡の谷を隔てた約500m東には、国指定史跡の江田館(昭和22年に群馬県指定史跡第１号、平成12年に新田荘遺跡として国史跡指定)がある。築造年代は明らかではないが、江田行義の館跡と伝えられ、戦国期には金山城主横瀬氏の家臣である矢内四郎左衛門が改築・居住したと伝えられ、後北条氏による金山城攻略の折に、この江田館を落とし拠点としたとされる。遺構の遺存状況は良好で、主郭・副郭部共に堀跡と土塁が残る。

長慶寺境内の石造物群

長慶寺境内の土塁跡

史跡江田館の土塁と堀跡

史跡江田館の土塁と堀(折れ)跡

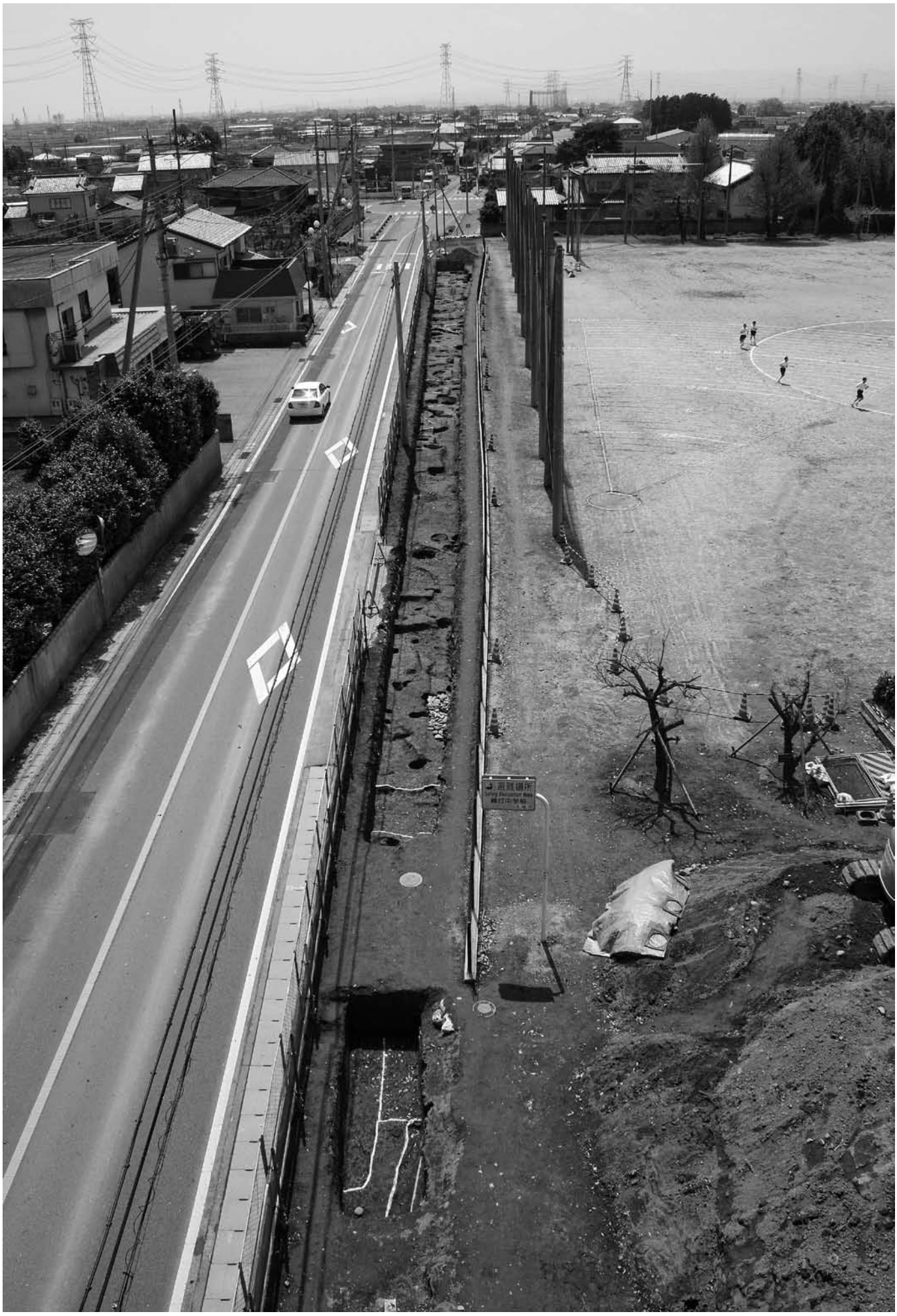


第44図　上田中・長慶寺周辺城館跡と前六供遺跡　太田市　現況図　1:2,500　No.51 平成22年10月測量(太田市転載許可済)

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	まえろっくいせき
書　　名	前六供遺跡
副 書 名	単独道路改築事業(一)大原境三ツ木線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第572集
編著者名	新倉明彦
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20130630
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住　　所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-２
遺跡名ふりがな	まえろっくいせき
遺 跡 名	前六供遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしにったかみたなかまち181-2ばんちほか
遺跡所在地	群馬県太田市新田上田中町181-2番地他
市町村コード	10-205
遺跡番号	★
北緯(世界測地系)	36°　17′57.981″
東経(世界測地系)	39°　16′37.539″
北緯(日本測地系)	36°　17′46.624″
東経(日本測地系)	139°　16′49.07″
調査期間	20120401-20120430
調査面積	540.0㎡
調査原因	道路建設
種　　別	集落／包蔵地
主な時代	古墳／奈良／平安／中世
遺跡概要	古墳時代－住居６／平安時代－住居３／中世－溝６＋土師器・須恵器５＋石製品３
特記事項	隣接の中世館跡である上田中・長慶寺周辺城館跡(通称田中館)の堀の一部や関連施設を調査。

写 真 図 版



調査区全景　北から

調査区遠景　北から

調査区遠景　南から

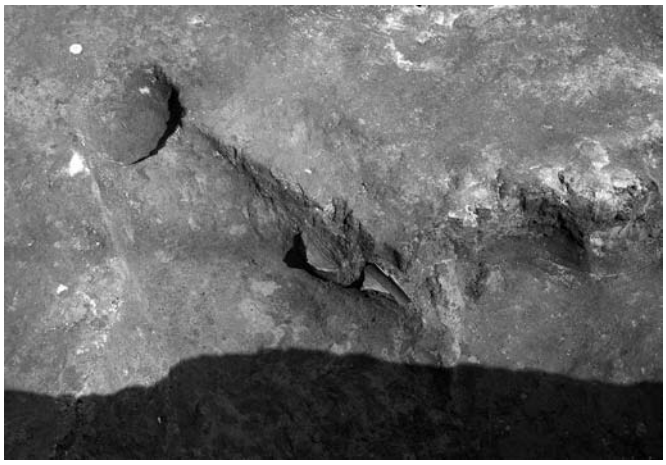
1～5号住居遠景　北西から

遺跡より長慶寺・江田館を望む　西から

1 号住居全景　南から

1 号住居遺物出土状態　南西から

1 号住居遺物出土状態　南西から



1 号住居カマド掘り方全景　西から

1 号住居貯蔵穴全景　南西から

２号住居全景　南から

２号住居遺物出土状態　南から

２号住居遺物出土状態　北西から

２号住居遺物出土状態　西から

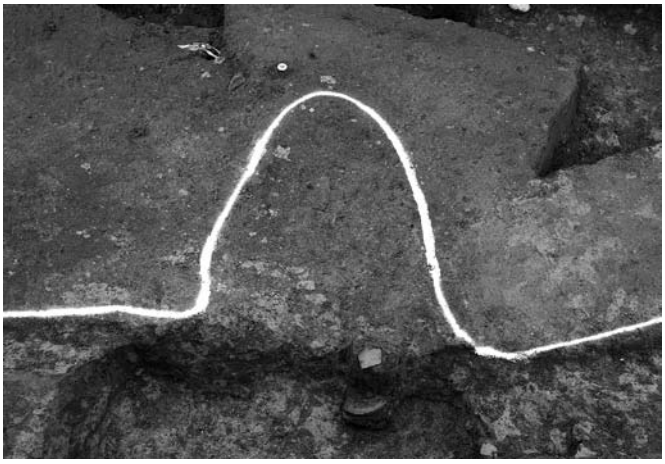
２号住居掘り方全景　南西から

３号住居全景　南から

３号住居埋土断面　東から

３号住居遺物出土状態　西から

３号住居遺物出土状態　南から



３号住居カマド検出状態　西から

4 号住居全景　南西から

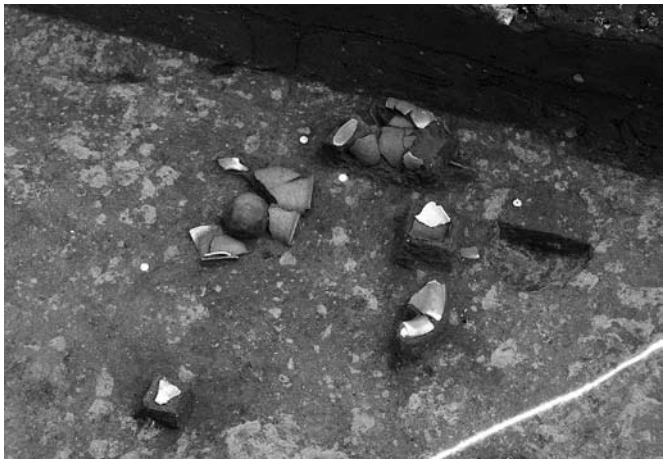
4 号住居遺物出土状態　南から

4 号住居遺物出土状態　南西から

4 号住居遺物出土状態　北東から

4 号住居遺物出土状態　南西から

５号住居全景　南西から



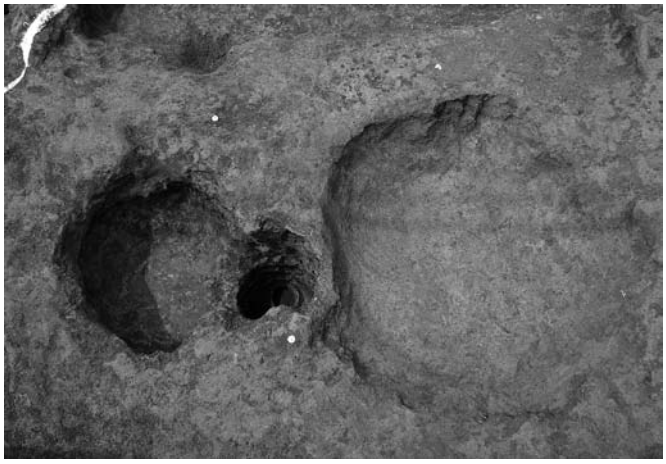
５号住居遺物出土状態　西から

５号住居遺物出土状態　西から

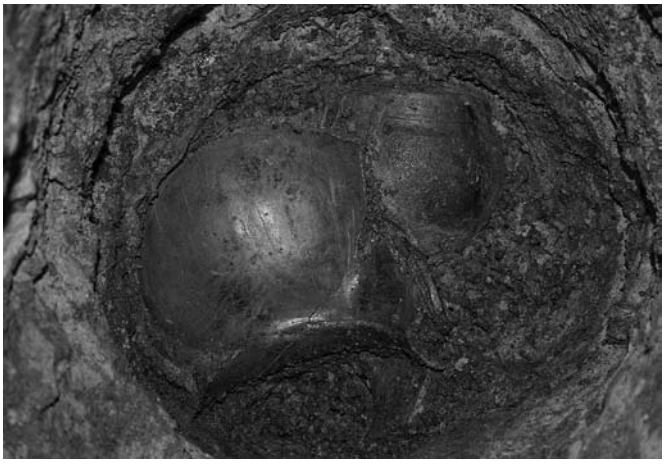
５号住居遺物出土状態　北西から

５号住居遺物出土状態　北西から

５号住居掘り方全景　南西から



５号住居床下土坑　東から

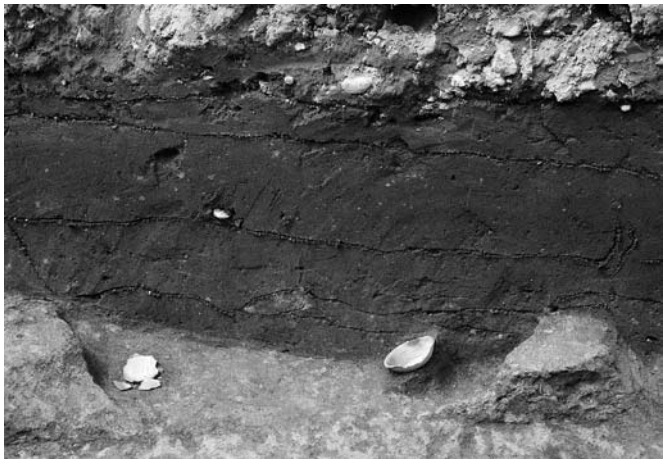


５号住居床下土坑上層遺物出土状態　南から

５号住居床下土坑中層遺物出土状態　東から

５号住居床下土坑下層遺物出土状態　東から

6号住居全景　東から



6号住居埋土断面　東から

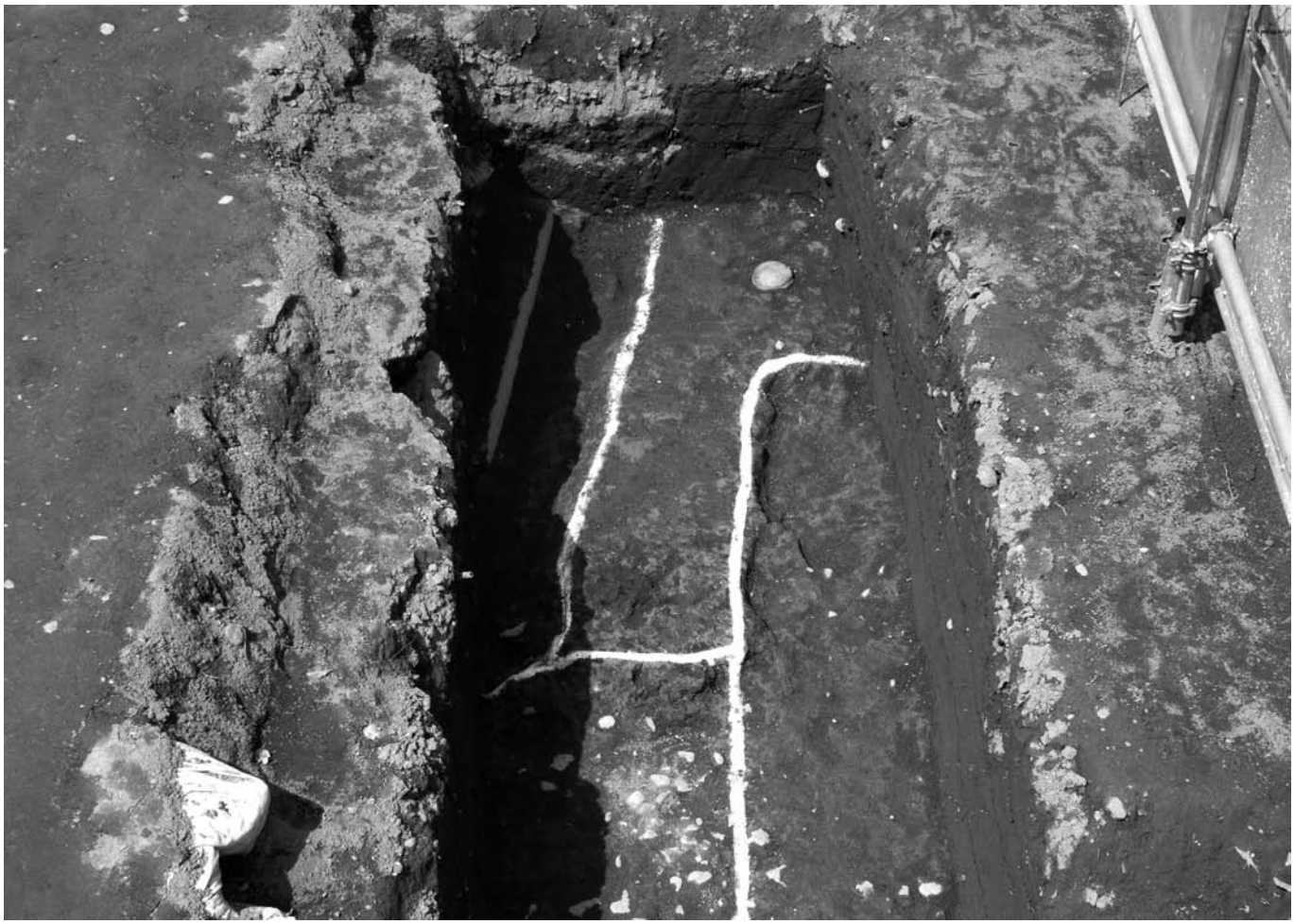
6号住居埋土断面　東から

6号住居遺物出土状態　東から

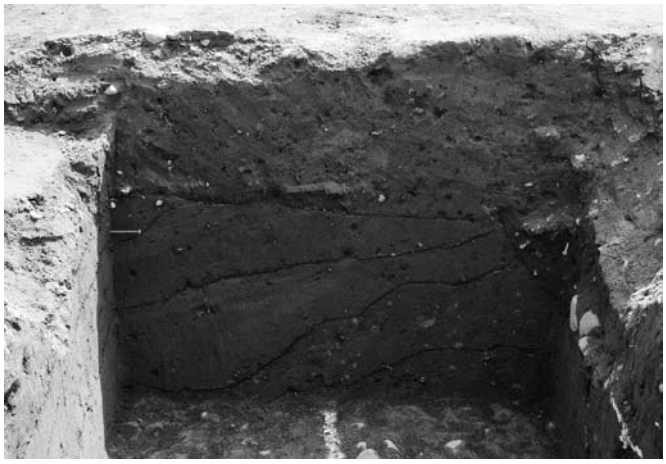
6号住居遺物出土状態　東から

7号住居全景　南西から

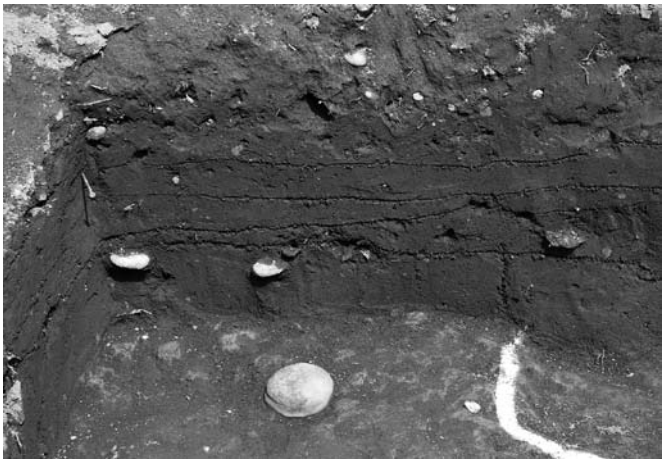
8号住居全景　南西から



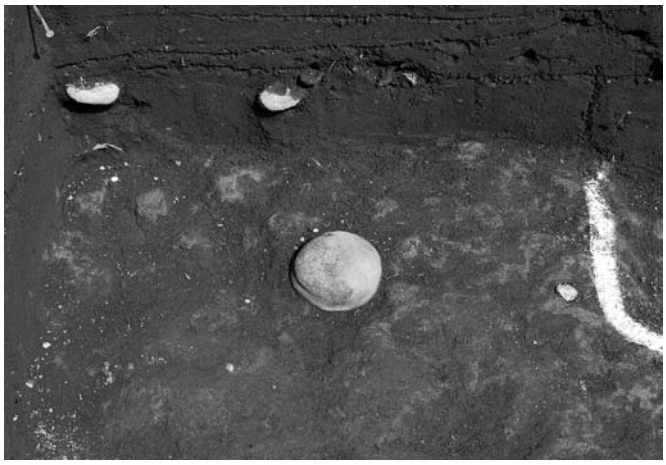
９号住居全景　南から



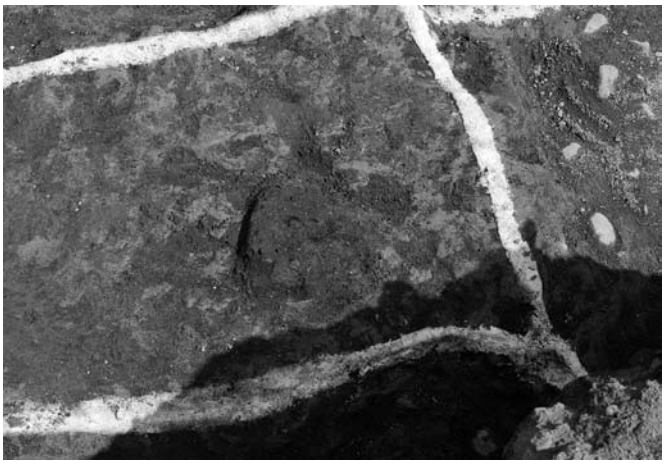
９号住居埋土断面　南から



９号住居埋土断面　西から



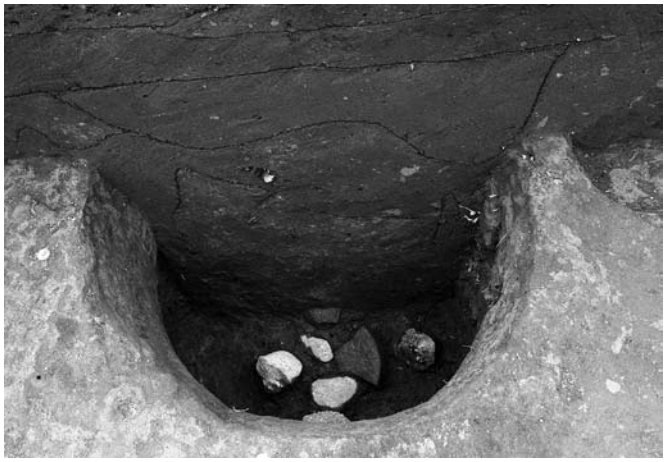
９号住居遺物出土状態　西から



９号住居炭化物出土状態　西から

1号井戸全景　東から

1号井戸埋土断面　東から



2号井戸遺物出土状態　東から

2号井戸埋土断面　東から

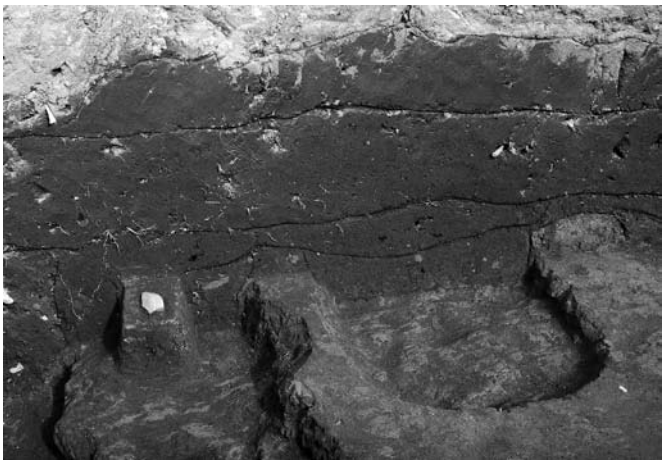
3号井戸全景　西から

3号井戸遺物出土状態　西から

4号井戸全景　西から

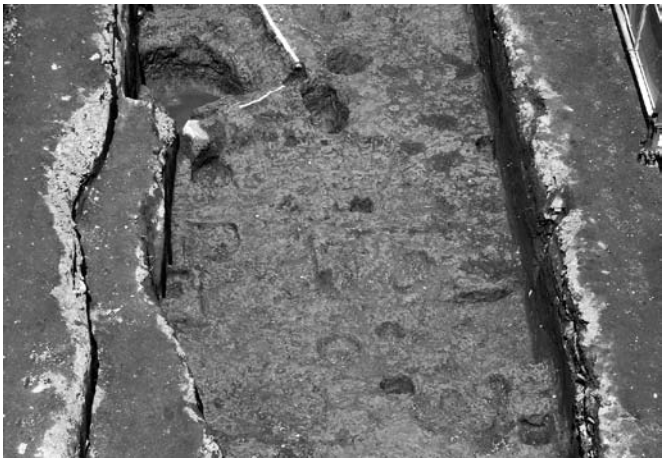
5号井戸全景　西から

1号土坑全景　西から



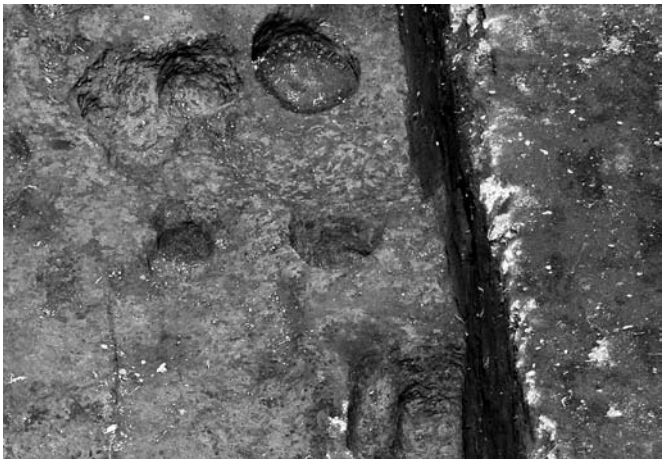
2・3号土坑全景　西から

4・5号土坑全景　南から



6・7・8号土坑全景　南から

9号土坑全景　南西から



10号土坑全景　南から

11号土坑全景　西から

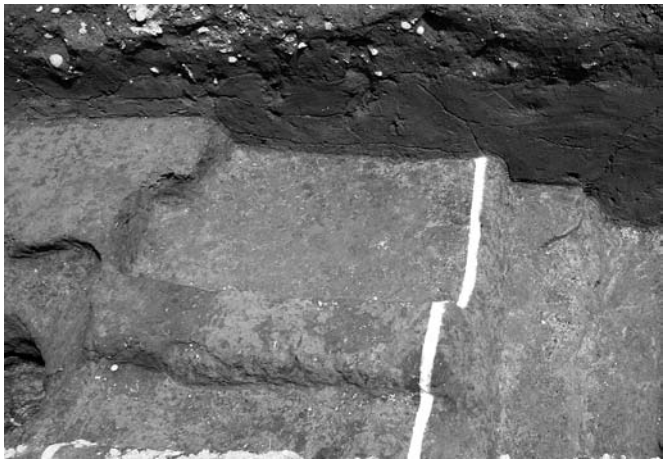
12・13号土坑全景　東から

14・15号土坑全景　南西から

16・17・18号土坑全景　西から

19号土坑全景　南西から

20・21号土坑全景　北西から



22号土坑全景　西から

23号土坑全景　北から

24・25・26・27号土坑全景　北西から

28・29号土坑全景　北西から

30号土坑全景　北西から

31号土坑全景　南西から

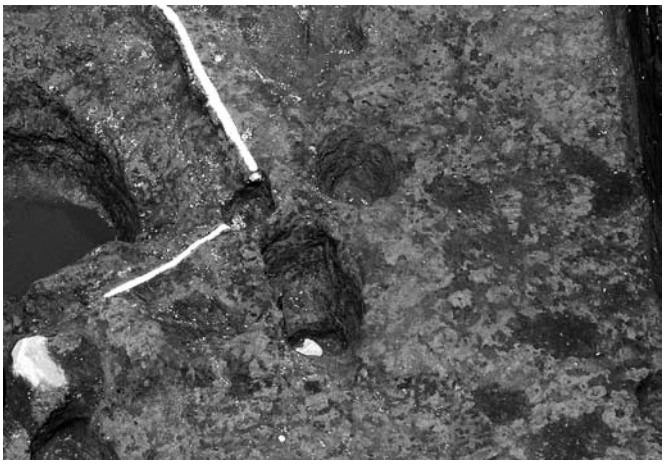
１号墓坑全景　西から

１号墓坑遺物出土状態　南東から

１号ピット列全景　北から

２号ピット列全景　北から

１・２号ピット全景　西から



３号ピット全景　南から

1号溝全景　北から

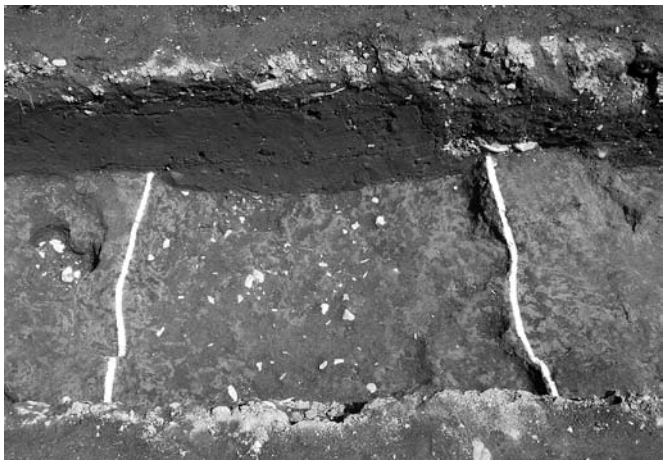
1号溝遺物出土状態　北西から

2号溝全景　西から

3号溝全景　西から

3号溝遺物出土状態　西から

4号溝全景　西から



5号溝全景　西から

6号溝全景　北から

田中山長慶寺

境内石造物群

宝筐印塔

宝筐印塔

境内北土塁跡

境内北土塁跡

1住1

1住4

1住5

4住1

4住3

5住1

5住3

5住4

5住9

5住5

5住6

5住7

5住10

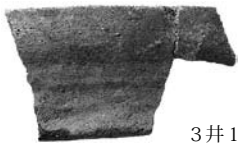
9住1

2井1

6住1

2井2

6住2


3井1

3井2

3井3

3井4

3井5

3井6

4井1

3井7

3井8

5井1

5井2

5坑1

1墓1

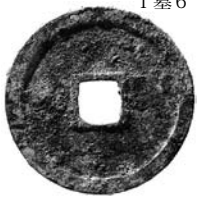
1墓2

1墓3

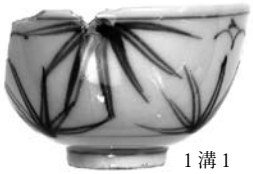
1墓4

1墓5

1墓6



PL.22


1溝1

1溝3

1溝4

1溝7

1溝9

1溝10

1溝5

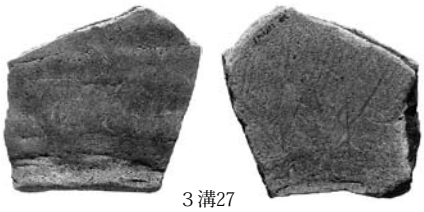
1溝15

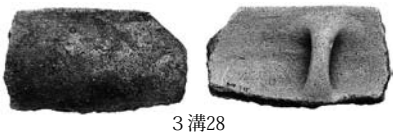
1溝16

1溝17

1溝18

1溝22


3溝27


3溝28

遺構外2

遺構外3

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第572集

前 六 供 遺 跡

単独道路改築事業(一)大原境三ツ木線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25(2013)年６月30日　刊行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／株式会社開文社印刷所